

ユウキに転生したオリ  
主がSAOのベータテス  
ターになつたら

SeA

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ユウキ（転生者）と、その友達のお話

目

本編

ユウキとキリト

ユウキとみんな

ユウキとアスナ

いーえつくす

番外編

I  
F

イフ

いふ?

もーしも

261 225 193 168

154 115 42 1

次



# 本編

## ユウキとキリト

「——なんだかんだ長い付き合いになつたね。ボクは正直途中で切れるかもつて思つてたから、ちょっと意外だな」

「……そうだな。俺もすぐに接点がなくなるつて最初に思つたよ」

「えー、ひつどいなキリトは。そんなにボクの事気に食わなかつたの？」  
「いや、そうじやなくて。辛くなつて途中で諦めるんじやないかつて思つてたんだ。なんたつて見た目はすごい病弱そうに見えたからな。ユウキは」

そう。最初にS A O の第1層で彼女を初めて見たときに思つたんだ。  
背も低く。

腕も細くて。

顔も少し瘦せていて。

こんな最前線にいるようなゲーマーっぽさもなくて。  
むしろ真逆な、病院の一室で眠つているような、そんな脆さを感じたんだ。  
だから、攻略組からはすぐリタイアすると思つたんだ。

「——まあ、すぐにその印象も吹き飛んだけどな」

「なにさその言い方は？ ボクそんな変な事なんかしたつけ？」

「……キバオウが『ベータテスター出てこい！』って言つたら、満面の笑顔で挙手してたろうが」

「あーあーあー。そうだそだそんな事あつたね。いやー、あれは本当に面白かつたね。ボク的にあれは S A O で楽しかつた出来事トップ5に入る出来事だつたね」

「キバオウも思うところあつてあんな事言つたんだろうけど、まさか出て来るなんて思つてなかつたろうし。なにより出てきたのがよりもよつてあんな病弱そうな女の子で、言いたい事あるけど言えない、みたいな感じの表情してたぞ……」

その直前までは俺自身がベータテスターつて事でちよつとキバオウに思うところもあつたけど。

あの何とも言えない顔見て、少し同情したぞ。

「いやー。前々からあの場面で名乗り出たらどうなるのかなつて思つてたから、実際に当事者として参加してみて結構ドキドキしてたんだよね。ほんとに面白かったよ、あのキバオウさんの表情。…………ふふつ、ダメだ、思い出したら笑えて來た」

いや、ほんと。あの場面で楽しそうにしてたのお前だけだつたからな。  
足元おぼつかない感じで歩いて、VR空間なのに咳しまくって

これでもかつてくらいに病弱アピールしてる癖に顔だけは思いつきり笑顔で。多分あの場にいた全員が思つたぞ。

『なんだコイツ』つて。

つていうか、いい加減笑うのやめてやれ。

「あー、ごめんごめん。面白くつてつい」

「まつたく。本当に変わらないな」

「えー、全然前と違うじやんか特に見た目。前は超絶プリティ一いつて感じだつたのが、今は超絶ラブリープリティーエンジエルつて感じになつたでしょ」

「そりやSAOのデータ使つてないんだろうから見た目は違うだろうさ。一応今からでも運営に連絡すれば前の姿に戻れるはずだぞ。つていうかなんだよ、ラブリーでエンジエルつて」

「無茶苦茶可愛いくつてこと。でも、前のデータねえ……。それもいいつちやいいけど、いいんだ。ボクのSAOはもう終わつたし、なによりこつちの方がボクの好みだしね！」

「……そつか」

「うん。そうなんだ」

やつぱり変わつてないじやないか。

見た目は変わつても中身は同じだ。

いつも明るくて。

ムードメーカーで。

気配りで。

楽しい事が大好きで。

そして、見た目に反して無茶苦茶強くて。

みんな、頼りにしていた。

「いやー、それにしてもほんと楽しかったねS A O。いっぱい忘れられない思い出があるよ」

「——そうだな。嫌な事も辛い事もたくさんあつた」

時には共に戦つた相手と仲良くなつて、その人が死んで。  
時には殺されそうになつて、自分が生きる為に殺して。

「でも、楽しい事も嬉しい事もそれ以上にたくさんあつた世界だつた」

頑張つてつて応援してくれる人がいた。

任せたつて言つてくれる仲間ができた。

帰ろうつて言つてくれる友達ができた。

——同じ未来を歩みたいつて、そう思う事が出来る人ができた。

「あの世界は多くの人にとつて忘れない出来事かもしれないけど、俺は一生忘れない。」

忘れてたくない。とても大切な、大事な思い出の世界なんだ」

忘れたいって思つたことは確かにあつた。

自分が犯した罪を無かつたことにしたといつて。

だけど、もうそんなことは考へない。

あの世界のおかげで今の俺がある。

あの世界のおかげで今の皆がいる。

だから、忘れないなんて思うことはもう二度と無いんだ。

「……忘れてたくない、か」

「ああ」

「そうだね。ボクも忘れないよ。ずっと」

「…………」

「——ボクとヒースが付き合つてるんじやないかつてキリトが勘違いしたこと、

ずっと」

「うわあ————!!！」

「うわあ————!!！」

「あれはっ！　お互に忘れるつて話になつた筈だろ!?」

「えく、だつてく、キリトがく、忘れてくないつてく、言うからく」

体をくねらせながら言うな！

「いやー、まさかただ一緒にご飯吃べてるとこを何回か見られただけで、そういう発想になるとは思わなかつたよ。ほんと予想外だつたねアレは」

「マジで勘弁してください」

「しようがないだろ。行く先々でなぜか二人一緒にいて、楽しそうに会話してるとこ何度も見たらそう思つても不思議じやないだろ。  
いや、変か……。

ただ友達と一緒にいただけだしな。

俺もアスナとまだ付き合つてない頃に一緒に行動した事何度かあつたしな。  
本当になんで俺はあんな早合点してしまつたのか…………。

「あの時はほんとに笑つたね。もう大爆笑。珍しくヒースも顔崩して笑つてたし」

「——ヒース、も？」

「よつと待て。

「あ」

「内緒にするつて言つたよな！ レアアイテムあげるから黙つてくれつて頼んだよな  
俺！」

わかつたつて腹抱えながら言つたじやないか！

「いやー、ごめんごめん。ついうつかり」

「頼むぜほんとに……。他には漏らしてないよな?」

「大丈夫大丈夫。ボクを信じなさいって」

どの口で言うんだコイツは。

「それにその話したのもSAOの最後の時だつたし。あの時は二人つきりで他に人はいなかつたから、安心していいよ」

「…………そ、うか」

最後、か。

「なあ、聞いてもいいか?」

「んー?」

「二刀流、ほんとは俺じやなくてユウキの物になるはずだつたんじゃないのか?」

「…………どうして?」

「あいつは、茅場は言つてた。二刀流は全プレイヤー中最大の反応速度を持つヤツの所にいくつて。なら、俺が二刀流を持っていたのはおかしいだろ」

「なんで? キリト凄いじやん。銃弾バアーつて切つたりとかさ」

「ああ、出来るよ。今ならな」

そう。今なら出来るさ。

あの2年があつたから、その積み重ねがあつたから。

飛んでくる銃弾でも切れるような反応速度を手に入れたんだ。  
でも、それは今の話だ。

「ユウキは俺よりも速かつた。そしてそれを完全に自分のモノにしてた。なら二刀流が  
俺のところに来たのは不自然だろ」

「んー、そつかそつか。……まいったな。今日は楽しくおしゃべりするだけのつもり  
だつたんだけど」

「…………」

「そんなに知りたい…………？」

「——ああ」

あの世界の事はちゃんと知つておきたいんだ。

きつと、とても大事な事だと思うから。

「……はあ、しようがないか。んじやまあ突拍子も無い話するけどちゃんと聞いてね」

「……わかつた」

「二刀流は確かにボクのここに来たよ。でもアレはボクじや駄目だから文句言いに行つ  
たんだ。『返品させろー』つて」

「駄目？ つていうか文句？ どこに？」

「ヒースに」

「は……？」

な、それは、つまり。

「ちょ、ちょっと待つた。ユウキが早い段階で気付いてたのは知つてたけど、そんな早い時期に気付いてたのか？ ヒースクリフが茅場晶彦だつてことに」

「知つてたよ。最初つからね」

最初からつて、それは

「……どこからが最初なんだ？」

「んー。ナーヴギアが出た頃？」

「……は、はあ？ ナーヴギアが出た頃つてまだSAOが発表された頃だろ？」

「そ。だからその時に気付いたんだ。ボクがユウキだつて。まつたく我ながら鈍いよねボク、そりや自分の名前に変な既視感があるわけだよ」

「ユウキ……？ お前何言つて」

「んで、気付いたんだけどSAOは別に関係無いって思つてたら姉ちゃんが懸賞でナーヴギア当てちゃつてさ。そしてSAOのベータテスターの抽選まで当てて、姉ちゃんすつごい喜んでるのにボク一人で冷や汗かいてたよ」

「……ユウキ」

「まあ、問題があるのは製品版でベータ版は問題ないからいいかなって、それで姉ちゃんと一緒にかわりばんこでプレイしてる間に家族が製品版予約してるし。姉ちゃんに危ない事させたくなかつたからボクが無理矢理順番替わつてもらつて、そしてS A Oに、あの世界に行つたんだ」

「……なら、帰つてきたらお姉さん、泣いてたんじやないか？」

「お、よくわかつたね。もう大号泣。ずっと『ごめんねごめんね』つてそればつか。慰めるの大変だつたんだよ。泣いてほしかつたわけじやないんだけどね……」

「そうだな……。でも嬉しかつただろ？ 泣いてくれる家族がいるつて」

母さんが、父さんが、スグが泣いて迎えてくれて、申し訳なく思つたけど、俺はそれ以上に嬉しかつたからな。

「そうだね。嬉しかつたよ。本当に。ギリギリ間に合つたんだから」

「間に合つた？ 何にだ？」

「——姉ちゃんとのお別れ、かな」

——それは、

「パパとママには間に合わなくてね。ほんと悪い事しちやつたな……。ボク、ユウキの家族はマザーズロザリオの1年前つて間違つた覚え方してたからさ。ほんと親不孝者だよねボク」

「……そう、か」

「ちょっとー、ここは肩を抱きしめて慰めるところだよ。……まったく、そんなんじゃアナにそのうち捨てられちゃうぞ」

「それはない」

「うわあ、真顔で断言したよ、この『元自称コミュ障』

アスナが俺を手放すことも、俺がアスナを手放すこともないから大丈夫だ。問題ない。

「って、話いつの間にか脱線しちゃつたね。どこまで喋つたつけ？」

「ヒースクリフに文句言いにいったとこ」

「そうそう、それそれ。んで、言つてやつたんだよ。『多分大丈夫だと思うけど、ボクいつリアルの事情でリタイアすることになるかわからないから、コレいらない。だから違うのちょーだい』って」

「ちよつと待て、もしかしてユウキが持つてたあのユニークスキルって……？」

「この時にもらいましたー。きやはつ」

コイツは、本当に……。

「まだ40層越えたばつかでバラされたくないだろつておど、お願ひしたらくれたんだよ」

「今、脅したつて

「そんでね」

聞けよ。

「まあ、そのあと色々あつて仲良くなつて、ごはん食べに行つたりとか、レベリング一緒にしたりしてたんだ。楽しかつたよ、S A Oの製作裏話とか聞けて」

「なあ、なんでバラさなかつたんだ?」

「ん?」

「その時にヒースクリフの正体が露見してたんなら、もつと早く帰つて来れたかも知れないだろ?」

俺が75層でやつたような方法で、なんとかできたかも知れない。

今思えばあの時対峙したヒースクリフはちゃんとプレイヤーだつた。

ボスエネミーじやなく、プレイヤーだつたんだ。

プレイヤーの何倍もあるH Pがあつたわけでもなく。

ものすごく高いステータスだつたわけでもなく。

ただ、神聖剣つてスキルがあつただけのプレイヤーだつた。

なら、その時点でデュエルに持ち込めればユウキの両親の最期にも間に合つたかもしない。

「あれはね、キリトだからヒースも乗ったんだよ。魔王を倒すのは勇者つて決まつてるじゃない? だから、ボクじや駄目だつたんだよ」

「……俺に勇者が務まるなら、ユウキでもいい気がするけどな」

「残念。ボクヒーローじゃなくて攻略される系ヒロインだから出来ないんだな」

「よく言うぜ。……それで、ちなみに誰に攻略されるんだ?」

仲良かつたヒースクリフか?

それとも、まさか、俺、とか?

「んー、アスナだね」

「アスナ!? なんで!?'

まさかの女同士!?

禁断の友情つてやつか!?

いや、なんだかんだ仲良かつたけど!?

「あはは、ボクもなんでつて思つた。まさかの主人公交代かよつて」

「なんの主人公だよ……」

「まあ、そんな感じでずつと黙つてたんだ。ごめんね」

「……その、なんだ。辛くなかったのか? 知つてるつてのは」

「うーん。ちょっとだけね。最初はあまりそういうの感じなかつたんだけど、30層過

ぎたぐらいからもつと何かした方がいいんじゃないかなって思うようになつたけどね」「あー、あのなんか妙に張り切つてた時か

「これでもかつてくらい突撃しまくつて、すぐボロボロになつて後ろに引っ込むつてのを繰り返してたあの頃か。

周りから『ヘイト管理大変になるから止めろ』って怒られて、すぐ終わつたけど。

「いやー、その節はご迷惑お掛けしました」

「どうも、迷惑掛けられました」

「ひつどいなー。人が珍しくちゃんと謝つてるのに」

「いつもはもつと有耶無耶にするもんな

「もー」

「…………」

「…………」

「…………」

「……いいの？」

「なにが……？」

「聞きたいこと、もつとあるでしょ？」

結局なんで知つてたのかとか、ボクこのままはぐ

らかしちゃうよ？ いいの？」

——そうだな。

気になつてるし、知りたいと思つてる。

でも、

「——いいさ。言わなくても」

「……どうして？」

「友達だろ。俺達」

「——つ」

「なら、言いたくないなら言わなくていいさ」

「……そつか」

「ああ、そうだ」

そうさ。

友達だつたら、そいつが言いたくない事まで聞きたいなんて思わないさ。

友達つてそういうものだろ、きつと。

「…………ふふ」

「どうした……？」

「いや、これがリアルハーレム野郎の実力かつて思つただけ」

「ハーレム野郎!?」

「残念だつたね。ボクルートのフラグ立つまであとちょっとだったのに。これはアスナに報告案件だね。間違いないボクは詳しいんだ」「今どこのにそんな要素があつたんだよ!?」

ただ普通に喋つてただけだろ!?

あと、それはそれとしてアスナに言うのはやめて下さい。

「いやー、やっぱ久しぶりにキリトからかうのは楽しいね。アスナとくつついてからはちよつと自重してたからさ」

「……自重つて言葉の意味を調べなおした方がいいぞ」

俺は忘れてないからな。

面白そだからつてS A O内で俺とアスナのキス画像ばら撒きまくつた事。  
おかげで本当にアスナのファンに殺されるかと思つたんだからな。

絶対に忘れないからな。俺は。

——そう。絶対に忘れない。

「…………」

「いやー、やっぱいいね。反応が面白いよキリトは」

「…………なあ」

「なにー?」

「…………なんで俺なんだ?」

「なにが?」

「…………最後に、会うのが」

S A O が終わつた後、ユウキとはしばらく連絡が取れなかつた。

アスナに、エギルやクライン、リズベットにシリカといった面々は総務省の役人に確認を取つたら連絡先を教えてくれたんだが、ユウキに関しては先に本人から『誰にも自分の事を教えるな』と一足先に起きて言われたらしく、俺たちがユウキと再会することはできなかつた。

ユウキと再会したのはA L O のゴタゴタを片付けて、G G O での殺人事件を解決した後。

S A O がクリアされてから実に1年以上経過した頃。A L O で俺が一人でアスナ達を待つていた時の話だ。

『あのー、キリトさん、ですか?』

『え、あ、はい。そうですけど……』

『良かつた。本人だつた。あの、お願ひがあるんですけど、今お時間大丈夫ですか？』  
『え、ええ。今はフレを待つてただけなんで、それまでなら大丈夫ですか？』  
『よかつた。あの、ワタシとデュエルしていただけませんか？』

『デュ、デュエル？　俺が、あなたと？』

『はい！　ワタシ、友達と一緒にこのゲーム始めたばかりなんですけど弱くって、すっごく強くなつたとこ見せてピックりさせたいなつて。それで強い人とP V Pしたら強くなるかなーって考えまして。他のプレイヤーさんに聞いたらキリトさんがALOで一番強いつて聞いたので』

『あー、えつと、一番強いのはわからないんですけど、そういう事なら相手するよ。初心者からの折角の頼みだしな』

『本当ですか！　ありがとうございます！』

『それじやあ、ルールはありあり、えつと、魔法とアイテム自由のほうがいいかな。勿論俺は剣だけでいくし』

『本当にですか！　はい！　全然オッケーです！　じゃあ申請しますね』

『……名前はユウキ、さんか』

『はい。そうです。名前がどうかしましたか？』

『いや、友達と同じ名前だなつて思つただけ。それじやあ始めようか。スタートのタイミングはそつちの好きな時でいいよ』

『本当ですか!? それじやあ——行きますね』

『えつ——ちよ、速』

そして、俺は負けた。

圧倒的なスピード。

卓越した技量。

剣に身を晒す度胸。

巧妙なフェイント。

どれもが初心者とは思えない熟練の剣士のものだつた。

——といふか、とてもよく知つてゐる剣だつた。

姿かたちは違つても、その剣筋は同じだつた。

なんたつて、2年も一緒に肩を並べて戦つてきた剣なんだ。間違いようがなかつた。

『な、あ、え』

『イッエーイ! ユウキさん大勝利ー!! いやつほー!』

『お、おま』

『スタートのタイミングはそつちの好きな時でいいよ』つかー、かつこいいなー。負け

たけど。これでもかつてくらい負けたけど。いやー、さすがだなー。かつこいいなー。

「勿論俺は剣だけでいくし」つて、いやー、キリトさんパネつすわー』

『おま、おまえ』

『はーい。超絶プリティーガールのユウキちゃんですよー』

『ユ、ユ、ユウキーー!!』

『ふふん。久しぶり、元気にしてた? キリト』

そんな、とてもユウキらしい再会だった。

その後、合流した他のみんなに対してもアバターが違うことを活かしたドツキリを仕掛け、おもいつきり怒られてた。

なぜか俺も黙つてたからと、ユウキの隣で一緒に怒られた。

アスナがとても怖かったです。

それが2025年の12月末。

そこからは怒涛の日々だつた。

ユウキはこれでもかつてくらいにALOを楽しんでいた。

西へ東へ、浮遊城へ地下世界へ。

俺達皆を連れまわした。

ギルドメンバーも紹介された。

SAOが終わつた後に他のゲームで出会つた友達らしい。

俺と同じでずっとソロだつたユウキがギルドに入つて、しかもリーダーまでやつてゐるつて言うんだから驚きだ。しかもそこそコリーダーシップを発揮してたことにさらには驚いた。

その能力は是非SAOでも発揮して欲しかつたな。

さらにユウキはギルメンだけでボス討伐したいとか言い出して、俺達にギルドの仲間に對して『ボスの攻略方法を叩き込んでくれ』なんてお願ひをされた。  
もちろん全力で協力した。

クラインが仮想敵として戦つて、エギルがアイテムを仕入れてくれて、リーフアが上手な飛び方を伝授して、リズベットが武器を作つて、シリカがダンジョンの注意事項を教えて、アスナが後衛職の立ち回りを伝え、俺が「好き勝手に動くユウキの背中の預かり方」なんてのをわざわざ文書データにして配つたりした。

ユウキには『なに小つ恥ずかしいモノ作つてんだー』つて怒られたけど、たまには普段の仕返ししないとな。やられっぱなしは性に合わない。

剣士の碑で見せた笑顔は今までの付き合いの中で見たもので一番きれいなものだつ

た。

あの時のことはとてもハツキリと覚えてる。

あんなに嬉しそうに――泣いてる顔を初めて見たからだろう。

仲間が死んでも、人を殺すことになつても、暗い顔を見せたことはあつたが、泣いたところを見たことは一度も無かつた。

いつも笑顔で楽しそうに明日を語るユウキは、皆にとつての心の支えの一つでもあつたんだ。

そんなユウキが泣いていた。

嬉しそうに楽しそうに、時間が過ぎていくのが勿体ないというように。

その日はずつと、打ち上げの間も笑いながら泣いていた。

ずつと。

ずつと。

再会してからずつと違和感を覚えていた。

それは俺だけじゃなく、アスナ達も、攻略組として付き合いが長かつたメンツは特にそう感じていたみたいだ。

明るくて、元気なユウキ。

でもどこか、それが空元気に見える時がある、と。

当然ユウキに聞いてみた。

ただ何度も聞いても『もうちょっとしたら教えてあげる』と誤魔化すだけ。ユウキのギルド——スリーピングナイツに聞いても、答えは返つてこなかつた。

ただ彼らはその理由を知つていたみたいだつた。

どれだけ問いただしても彼らの口から真実を聞くことは出来なかつた。結局そのままざるざるとただ時間が過ぎていつた。

みんなで集まつて走つて、飛んで、戦つて。

そんな日々を漫然と過ごしていつた。

ある日俺は我慢できなくなつて、ユウキに強く問いただした。

『なにがあつたんだ?』

『なにか困つてることがあるなら手伝う』

『俺だけじゃ無理かもしけないけど、話してくれれば皆手を貸してくれる』

『俺達はそんなに頼りないか?』

観念したようにユウキは言つた。

『もうすぐ死ぬんだ。ボク』

ユウキは——ただ笑つてそう言つた。

それが2026年の3月末。  
今から1週間前の話だ。

「…………なんで俺なんだ？」

「なにが？」

「…………最後に、会うのが」

「あはは。なにキリト、そんなこと気にしてたの？」

「…………」

1週間前のあの日、ユウキは詳しい説明をしてくれなかつた。

ただ病院の名前と、「紺野木綿季」という名前を告げてログアウトしていくつた。  
俺は病院に走つた。

ただ行かなくちやいけないとだけ思つて走つた。

あんなに慌てたのはアスナを探してたころ以来だつた。  
病院では倉橋という医師が待つていた。

ユウキとは長い付き合いだといふ。

先生は教えてくれた。  
ユウキの身体のこと。

病気のこと。

ご家族のこと。

残りの――時間のこと。

「くつらいなー。いつもそんなまつくろくろすけみたいな服ばつか來てるから暗くなるんだよ」

「……ユウキもいつも暗い装備ばつかだろ」

「ボクのは紫色だからいいんですー。アクセントに赤とか入ってるから問題ないの」

「……そうかよ」

俺は当然アスナ達にもこの話をした。

ユウキも『キリトだけに教えるのは不公平だから皆にも言つていいよ』と言つていた。

皆、戸惑つて、絶望して、怒つていた。  
当たり前だ。

なんで話してくれなかつたんだ。

もつと早く言つてくれれば、たくさん色んなことができた。  
なのに、なんで今さら。

「もー、ほんと暗いなー。今日で最後なんだから笑つて送つてやるつて気持ちはないもんかね」

「こんな時に、どう笑えってんだよ」「そんなのいつもみたいに、だよ。ボクがからかつてキリトが怒る。んで、たまに仕返しされる。ボク達はそだつたでしょ?」

今日ユウキからメールが届いた。

件名は「最後にお別れの挨拶がしたいです」

中身はただ「待つてる」とだけ。

ふざけるな。

なにが、最後だ。

なにが、お別れだ。

本当にいつもいつも自分勝手にもほどがある。

俺はそう言いに来たんだ。

——そのはず、だつたのに。

「……」

——言葉が出てこない。

——前はね、友達もいなくてひとりぼっちだつたんだ

「……ユウキ？」

「病室で一人でずーっと過ごしてた。大部屋ではあつたんだけど、なかなか他人と溶け込めなくてね。いつも本の世界に逃げ込んでた」

あのユウキが？

初めて会った相手ともすぐ仲良くなつて、そのまま一緒に冒険に行くようなユウキが  
？

いや、それより『一人で過ごしてた』？

先生が言うにはいつもお姉さんと一緒にたつて話なのに？

「家族はいたんだけど、あまり会いに来てはくれなくてね。疎まれてたんだよ。早く死  
ねばいいのについて直接言われたこともあつたけどね」

いや、違う。この話は。

この話は『ユウキ』の事じゃなくて

「ほんとどうかと思うよね。今ならともかく、当時のボクはそれはまあショックを受け  
てさらに読書に励んだつてわけ。まあ、ただの現実逃避だよ。我ながらかつこわるい  
ね」

「……別にかつこわるいなんて事はないだろ。辛い事を言われて何かに逃げるのは普通  
の事だ。なにもおかしくなんてないさ」

「そう？　でもそつか。そう言つてくれるなら嬉しいよ。まあ、そんなこんなで一人寂しく過ごしていつて、そのまんま一人寂しく終わりを迎えたのさ。ただそれだけの話。あつ、S A Oはそこらへんで知つたんだ」

「…………」

「だから、ボク頑張ったんだ。『ユウキ』は友達いっぱい作つて、寂しいなんて思わないようにしてようつて。そんな風に過ごしてたらナーヴギアがドーンつて感じで家に来ちゃつて。そのあとは、さつき話したね」

「……………」

「うん。そうなんだ」

「……………」

「ねえ、キリト。一つ聞いていい？」

「……………なんだ？」

「キリトから見てボクは、寂しそうだつた？」

「――いや、ユウキはいつも笑つて、明るくて、そのまま周りも明るくするようなやつで。寂しさなんて感じたことないんじやないかつて思うくらい皆の中心にずっといたさ」

ずっと、その笑顔が絶える事はないつて皆信じてたんだ。

だから、

「……そつかそつか。なら、よかつた」

「——なんかしたいことあるか？」

「え、どうしたのいきなり？」

「もう、最後なんだろ？　ならなんかやり残したこととかないのか？　今ならなんでも

聞くぜ」

「なんでも？」

「おう、なんでも」

「そつか、そつか。ふふつ、あははは、ははははは」

「……なんでそこで笑うんだよ」

「もう、なんていうか、キリトだなって思つてつい笑っちゃつた」

「いや、だからなんでそこで笑うんだよ」

キリトだなって思つたら笑うつて、俺普段どんなイメージなんだよ。

「それにしてもしたいことが、いっぱいあるなー」

「例えば？」

「海外行きたい」

「えつ」

「エアーズロックとかピラミッドとか、凱旋門とかなんかそういうの見てみたい」「いや、そういうお金かかるのはちょっと」

見るだけならなんとかなるか?

学校で作つた視聴覚双方向プローブを使えば、でも、結局誰かは現地に行かないといけないし。

みんなでカンパすればなんとか?　いや、でも海外なら結構かかるよな。

「あとは友達の家でお泊り会とか、遊園地で遊ぶとか」

「それくらいなら、なんとか」

それこそ、プローブを使えばなんとかなるはずだ。

まず、病院に話を通して、専用の仮想空間を用意してそれから――

「生身でつて言つたらどうする?」

「――それ、は」

無理だ。

現状のユウキの体で外に出るのは無理だ。

それはただの自殺行為に他ならない。

ただでさえ短い時間を削るだけだ。

「ふふ、ごめんごめん。いじわるだつたね。あとはそうだね、うーん。あつ、結婚式とか。

アスナの結婚式行きたい」

「なら、呼ぶよ。ちゃんと席も用意する。披露宴で友人代表としてスピーチだつて頼むさ」

「え、ボクは別にキリトの結婚式には興味ないけど？」

「……？ アスナの結婚式だろ？」

「あ、うん。ふざけたつもりだつたんだけど、まさか本気でそう言い返してくるとは」  
アスナは俺以外と結婚しないから、アスナの結婚式はつまり俺の結婚式だぞ。  
「でも、いいねスピーチ。いいなあ、やりたかつたな」

「——やれるさ。やろうと思えばいくらでも」

だから、そんな顔で言うなよ。

「——うん。そうだね。じゃあやろうか、今から！」

「えつ、今から？」

「そう。今から。キリト、映像記録用のアイテム持つてたよね。それ起動して」  
確かに持つてるけど、ちよつと待て。

そんな今撮つてどうするんだよ。

「じゃあ、いくよ。ほら、はやくはやく」

「あ、ああ。わかつた」

「すうーはあー、よし——和人君、明日奈さん。ご結婚おめでとうございます。私は二人の出会いから結ばれるまでを隣で生暖かく見守つてきました。二人がぶつかり合い喧嘩をした時には油を注いで炎上させ、仲良く食事に出かけたところを見れば冷やかし、二人が結ばれたと知るや、すぐさま新聞に載るように情報をリーケしました」

あの号外はお前の仕業か！

「私のサポートのおかげで二人は恋の障害を粉碎していき、今では切つても切れない縁で結ばれ、たとえ死んだとしても切る事ができない存在となりました。私ほんと恋のキューピッド、さすがだね。サポート成功率100%は伊達じやないね。えつ？ クラインのサポート？ あれは最初から脈無しだつたからノーカンで」

あの時やる気なかつたのはそれが理由か。

普段は人の色恋沙汰に首突つ込むくせに、妙に騒がないと思つたら。

まあ、俺もアレは無理だと思つたけど。

「まあつまり何が言いたいかと言うとですね。一人が結ばれたのは私のおかげなので、二人は私に感謝しなくちゃいけません。これでもかつてくらい感謝しないといけないのです。なので二人は私の言うことを聞かなくちゃいけません。絶対厳守だね」

なんかすごい恩の押し売りが始まつたんだが。

基本ユウキのせいでアスナに怒られたり、ファンに追つかまわされたり、クライイン

に妬まれたりした記憶しかないんだけど。

「私は友達が大好きです。友達が泣いてたら泣かせた相手をぶん殴つてやると決めてます。そして二人は私の大事な大事な友達です。だから」

「——だから、二人は幸せにならないといけません」

「ボクは友達思いなので友達を殴りたくありません。なので二人はお互いを一生泣かせてはいけません。ボクの為にね。キリトもアスナもお互い愛が重いからなんか今は上手くいつてるけど、それに胡坐をかいて相手の事を疎かにというか、縛り付け過ぎちゃだめだからね。あ、ちなみに子供産む時とかそういう感極まつた時は泣いてもいいからね。嬉し泣きはオツケー。悲し泣きはNGだからね。そこは勘違いしないでよ」

「ユウキ……」

「さて、あとなに喋った方がいいかな? なんか結構今のでボクはスッキリしたけど、多分これだけじゃ短いよね。きっと二人のエピソードとかがいいよね。二人のとなるとそうだなあ、キリトが爆笑ギャグとか言つてやつた激寒ギャグ5連発の話とかしようか?」

「ユウキ……」

「あれは確か、S A O の 6 6 、 7 層くらいだったかな。ボスの L A 取った人は攻略組の皆の前でギヤグをするつていうのが丁度流行つてた時期があつてね。キリトがいつものよう L A 搭つ攫つていつて『考えて来るから時間をくれ』つて言い出して、そしたら——つてキリトどうしたの？ 大丈夫？」

「なにがだよ……」

「なにがつて、泣いてるよキリト。おなか痛い？ このすごい微妙なバフかかるグミ食べる？ 10 秒間与ダメージプラス 5 とかいう使いどころがよくわからないやつだけど、さらにラーメン味とか言つてすゞいますいけど。というか今ボク友達泣いたら殴るつて言つたばかりなんだけど、こういう時は誰殴ればいいの？ キリト？」

ああ、泣いてるのか俺。

道理で景色が霞んでるわけだ。

「なんで俺が殴られるんだよ。俺を泣かしたのはユウキだ。こういう時はどうすんだけ？」

「えつ、ボクう？ ジやあ、仕方ないからこの微妙なグミはボクが食べよう。これで殴られたのと同等ということにしよう。そうしよう」

本当にコイツは、相変わらずだな。

「つていうかキリトそれまだ撮影中でしょ。どうするのさこのグダグダな感じ。ボク撮

り直しつて嫌いなんだけど」

「本当におまえは——ならこのまま流すさ。それでいいだろ」「マジ!? イエーイ! キリト、アスナみつてるー? リズ、シリカ、リーファ良い男見つかつたかーい。ユイちゃんボクみたいない女になるんだよ。エギル奥さん美人つてほんと? 一度くらい写真見せてくれてもいいじゃんかー! クラインは、えー、相変わらず一人でかわいそうですね同情します頑張つてください応援してます5分くらい」

「——じゃあ、そろそろ切るぞ」

「ちょ、あとちよつとだけ! えつと、ボク幸せだつたよ! 辛くて苦しかつたけど、もつとたくさん楽しかつたよ! みんないたからボクほんとに楽しかつたよ! だから、えつと、つまり、みんなボクの友達なんだから幸せになるんだよ! もし誰かに泣かされたらボクに言うんだよ! 絶対に相手ぶん殴りに行つてあげるから! だから、みんな元氣でね。ボクとの約束だからね! 絶対だからね!!」

「守つてないやつがいたら俺が守らせるよ。約束だ」

「お、言つたなキリト。ボクとの約束は破れないんだからね——ではでは改めまして、桐ヶ谷和人君、結城明日奈さんの友人代表、紺野木綿季でした。二人の道に幸福が訪れることを願っています。約束破つたら末代まで祟つちやうからね」

「——切ったぞ」

「うん……。ありがとう」

それだけ言つてユウキは崩れ落ちた。

もう限界だつたんだろう。

撮影中も足元がふらついていた。

途中からずつと壁にもたれかかりながら話していた。

撮り直しなんてできる体力はもうどこにもないんだろう。

「おい！ 大丈夫か!?」

「あー、もうギリギリだつたね。キリトがあそこで切つてくれなかつたら倒れるとこまで入つちやうとこだつたよ。やつぱり相手を見極めるのはキリトに敵わないね」「そんなことはどうでもいいっ！ 早くログアウトしろっ！」

「そんなこととはなにさ、そんなことつて。人が一生懸命頑張つたことをそんなこと扱いつて、さすがにユウキちゃんどうかと思うよ？」

「何言つてるんだよ！ このままじや本当に」

「——倉橋先生にお別れはもう言つてあるんだ。多分、今日だと思つたから」

「————あ」

「虫の知らせつてやつ？ スリーピングナイツのみんなにはキリトが来る前にメール

送つておいたんだ。ボクがみんなと過ごしたのはたつた1年だつたけど、それでも、みんなとても良くしてくれた。さすが姉ちゃんが集めた仲間だよね。これが俗に言うさすおねつてやつだね」

「アスナ達にはキリトに伝言頼もうかと思つたんだけど、今撮つたから大丈夫だね。ちなみに今のは披露宴以外で再生することは禁止だからね。つまり、みんなにボクがなに言つたのかを伝えたかつたら、さつさとアスナと結婚しないといけないって事だからね。ふふん、キリト君は一体いつご両親に挨拶しに行くのかなあ?」

「ふつふつふ、まあボクの最後のキューピッドとしてのお仕事だね。アスナ、この前いつになつたら家に来てくれるんだろうつて愚痴つてたよ。ま、友達思いのキリト君ならこうやつて発破かければすぐ行くでしょ。もうこのボクの天才的発想にはホレボレしちゃうね」

「あとは、いっぱいあるけど、言いたいことは言つたからいいかな。キリトはなにかある?」

「——俺は、」

「俺は、アスナを幸せにする。アスナだけじゃない、皆もだ。10年経つても、20年経つても、皆で集まつてバカやつて、いっぱい笑つて、そんな風に過ごせるようになる。絶対に。ユウキが殴りに来る要素なんてないよう、誰かが泣いてる余裕なんて作らせてやらない。そうやって過ごしていつて、人生を走り終わつたら、そしたら」

「また、皆で一緒にゲームをしよう」

「だから、それまでおとなしく待つてろ。俺達放つて勝手にどつかに行くんぢやないぞ。ユウキとの約束は、絶対なんだろ?」

「あはは、ははははは」

「……なんだよ」

「いいや、やっぱりキリトはキリトだねつて。いいよ、約束ね」

「ああ、約束だ。絶対行くから待つてろ」

「うん、待つてる。お土産期待してるからね」

「はいはい。余裕があつたら持つてつてやるよ

「うわ、冷たいなー」

「うつせ」

「…………」

「ボクが最後にキリトを選んだ理由はね」

「…………ああ」

「好きだつたから、じゃないよ—— 親友だと勝手に思つてたからだよ。だから最後

はキリトが良かつた。一度も言わなかつたけどね」

「俺も、親友だと思つてたさ。俺は男で、ユウキは女だつたけど。ずっと一緒にバカやれる友達だつて思つてた」

「ほんと? それは、うれしいなあ。これが相思相愛つてやつ?」

「友愛、だけどな」

「そりやそうだ。じやないとアスナに刺されちゃう」

「ぞつとしないこと言うなよ。たまにユウキとのことで疑われてたんだから」

「あはは、ははははは」

「本当にお前つてヤツは……」

「…………キリト」

「なんだ?」

「約束、守つてね」

「ああ、絶対守る。だから安心しろ」

「よかつたあ。じやあ大丈夫だ」

「ああ、お姉さんによろしくな」

「ふふふ、あることないこと吹きこんでおくね」

「あることだけにしてくれ」

「キリトは我がままだなー」

「おまえがいうな」

「あはは」

「…………」

「…………約束だよ」

「…………約束だ」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………また、みんなであそぶの、たのしみだなあ」

「…………」

「…………さよなら、ユウキ」

また、会おうな。

2026年4月。

俺の大事な友達が、この世を去つた。

「…………アスナの家に挨拶行かないとな」

いい加減覚悟決めないと。あんなこと言われたし。

お母さんにはあまりいい印象持たれてないから、なんとかしないとな。

「つよし！ 頑張るかー！」

とりあえずは、あいつが羨ましくなるようなゲームを作ることを目指すとするかな。

# ユウキとみんな

【ユウキとシリカ】

「剣爛祭、ですか…………？」

「ああ、攻略組で主催する祭りなんだ。一応2週間後の予定なんだけど」「はあ、お祭り…………なんか、ちょっと意外です。攻略組の人達つてもつとこう、戦うことにしてしか興味ないんじやないかって思つてましたから」

「え、そうか？　じゃあシリカも俺の事そういう風に見てたつてこと？」

「ち、違います！　あたしはキリトさんの事はそんな風に思つてないです！」  
「ははっ、わかつてるつて、冗談だよ」

「もー、キリトさんつたら」

　もー、意地悪なんだからキリトさん。

　久しぶりに会えたのにそういうこと言うんだもん。

　…………ちよつと、親しくなれたみたいで嬉しいけど。

「（めん）めん。で、その剣爛祭の事を周りに広めてほしいんだ」

「…………それは別にいいですけど。キリトさんがそんな事しなくても攻略組が企画するなら皆行くと思いますよ?」

多分新聞とかにも載ると思うから、大丈夫だと思うけど。

「ああ、いや、ノルマつていうか『フレンドには手当たり次第に声かけろ!』ってアイツが言い出して皆それに乗っちゃったから、俺もやらないといけなくてさ」

「アイツ? ですか?」

「えっと、絶剣つて呼ばれてるヤツなんだけど、聞いたことないか?」

「あ、それなら聞いたことがあります。攻略組の最強アタッカーツて」

攻略組の2強つて呼ばれてる人の一人だよね。

守りの神聖剣。

攻めの絶剣つて言われてる。

「そうそう。そもそもソイツがお祭りやりたいつて言い始めて、それを主力ギルドがオッケー出したのが始まりなんだよ…………まさかヒースクリフが乗り気になるなんて誰が予想できただんだよ」

「…………? キリトさん、なにか言いましたか?」

「――いや、なんでもないよ。とにかくそういうわけだから、よかつたら来てくれ。俺もなんかやらされるらしくて、ちょっと心配だけど……」

「ふふつ、はい！ 楽しみにしてますね！」

キリトさん。なにやるんだろう？

屋台の店員さんとかやるのかな？

「うわあ、すごい規模。さすが攻略組」

剣爛祭の開催場所は、ここ、第60層の主街区シユテイン。つい10日前に解放されたばかりの街だ。

この前に来たときは人も少なかつたのに、今はどこ向いても人だらけだ。  
というか、2週間前にお祭りは決まってたのに、どこでやるかは決まってなかつたのかな？

それにしても、本当にすごい人の数。

でも、見知った顔も多いし、やっぱり中層から遊びに来た人が多いのかな。

「ピナ？ はぐれたら危ないから今日は飛んじや駄目だよ。いい？」  
「きゆるー」

本当にわかつたのかな？

あつちこつちに首動かして、あたしの方全然向いてくれないけど。

「キリトさんは確か中央広場の北側にいるって言ってたつけ？　じゃああつち、だよね」

結局キリトさん何やるか教えてくれなかつたから楽しみだな。

先週に会つた時も教えてくれなかつたんだよね。

なんかユウキ？が企画担当だからどうたらこうたらとか言つてたけど、どういう意味だろう？

「キリトさん何やるのか楽しみだね、ピナ……………ピナ？」

頭の上、いない。

肩の上、いない。

背中に張り付いて、ない。

ポケットの中に隠れて、ない。

スカートの中に潜り込んで、ない。

「……………」

どつか飛んで行つたあああああ!!!

どどど、どうしよう。

こういう時はどうしたらしいんだつけ！

迷子センターに連絡すればいいんだつけ!!

つていうかゲームの中に迷子センターあるのかな!?  
「おーい、そこのかわいこちやーん」

そ、そudad!

キリトさんだ! キリトさんに連絡しよう!

「もしもーし。そこの栗毛の子、聞こえてる?」

キリトさんなら、助けてくれるはず!

前もピナのこと助けてくれたし!

……いや、さすがに無理かな? ただ迷子になつただけだし。

そんな何度も面倒かけるわけにもいかないし。

なんとかあたしだけでピナを探し出して――

「ヤツホーーー!!」

「きやあああああああ!!!!」

ぎやあああああああ!!!!

なに!? なに!?

新手のイベント!! モンスターの襲撃!?

「お、気付いた」

「や、あ、え……?」

「かわいこちゃんが、この子の飼い主さんで合つてる？」

あ、ピナッ！

よかつたあ。

つて、なに知らない人の髪齧つてるの!?

「ご、ごめんなさい！　あたしがその子の親です！　ほらピナ、早く離して！」  
「いやいや、いいよ全然。動物とのふれあいなんて久々で楽しかったしね」

その人は、楽しそうに笑つてそう言つた。

見たことのない人だつた。

自分では中層で顔が広い方だと思つてたけど、全く見覚えのない顔だつた。

背は低く。

体も細くて。

顔も少し瘦せぎみ。

あたしより、ちょっと年上ぐらいかな？

一度見たら忘れられない容姿をしている人だつた。

普段はあたしがいる層より、もつと下にいる人なのかな？

「その、本当にすいませんでした」

「だから全然いいって。ビーストティマーに会うのなんて初めてで、むしろラツキーフ

て感じ。逆にありがとうつて言いたい気分だよボクは  
すごい、良い人みたい。

「でも、本当にありがとうございました。あたし、すごくテンパっちゃって……な  
にかお礼させてくれませんか？ 髪も噛んじやつたみたいですし」

「んー？ 別にいいんだけどね、本当に……でも、お礼っていうならそうだな……う  
ん、よし。ならちよつとボクを手伝つてくれない？」

「へ？」

あたしに手伝いを頼んだ彼女は、ユウキさんという名前らしい。

なんでも、この剣爛祭のスタッフの一員らしく、その仕事を一部手伝つてほしいとの  
事。

ということ、らしいんだけど……

「あの、あたしは結局なにをすればいいんですか？ 内容をまだ教わつてないんですけど……」

「大丈夫大丈夫。ボクが呼んだらステージに出てきてくれるだけでいいから」  
「ステージ！ あの、あたし本当にさせられ……行つちやつた」

結構強引に連れて来られたけど。

ユウキさん。実はあんまりいい人じやないのかな？  
ちょっと心配になつてきました。

『あーあー、マイクテス、マイクテス。…………おつけー？よし、じゃあいくよ？』  
あれ？ この声。

『レディースアーニジエントルメーン！ 本日は皆様、攻略組主催の第1回剣爛祭によ  
うこそおいで下さいました。ボク達一同心より感謝いたします』

ユウキさんだ。

すごい。司会なんてやるんだ。

『砂漠に咲く一輪の花。皆の心の太陽こと、このボク、ユウキちゃんがオープニングス  
テージの司会を担当させていただきます。よろしくー!!』

「「イエーイツ！」」「  
す、すごい歓声。

ユウキさん、結構有名なのかな？

今さらだけど、このお祭りのスタッフの一人だつて言つてたし、攻略組の人なんだよ  
ね。きっと。

でも、戦えるようには見えなかつたし、鍛治や裁縫とか、そういうサポート系の人な

のかな？

『では、まず最初にこの剣爛祭の主催を代表して、ギルド血盟騎士団の団長。ヒースクリフの挨拶から行こうか！』

「「Y e a h – !!」」

なんか、会場よりもステージ裏からの声の方がすごく強いんだけど。  
なんなんだろ、このノリ。

攻略組つて、思つてたよりも愉快な人が多いのかな？

そんなこんなで、挨拶とか、スポンサーの紹介とかをした10分後。  
ようやくあたしの出番が来たらしい。  
来なくともよかつたのに……：

『——はい、というわけで、クッキングナイツのみなさんでした。みんな、あとで食べ  
に行つてね——さあ、待たせたねみんな、こつからが本番だ！』

「シリカさん。スタンバイお願ひします」

「はっ、はい」

うう、結局なにさせられるんだろうあたし。

周りのスタッフさんも内容は知らないって言つてるし。

ちよつと怖いんだけど。

『ボクたち攻略組は、いつも戦っている。現実に帰りたいから、戦うのが好きだから。そんな様々な理由で日夜戦っているのがボクたち攻略組。男も女も関係なく戦いに命を捧げた存在』

戦いに命を捧げる、か。

あたしがいる場所とは、違う場所。

いつ死んでしまうかわからない、死線の先。

それが、キリトさんが普段いる場所。

あたしが――――いけない場所。

『男も女も関係ないとは言つたけども、他人がそんな中イチャイチャしてたら腹が立つ。でもだからって手を出したりはしない、そうでしょ？ 下層や中層でそれを見たとしても、ボクたちはそれを捨てて戦うことを選んだんだから』

う、うん？

ま、まあ、攻略組の人達も普通の人だし、そういう事は思うよね。うん。

『だからこそ！ 攻略組の中でイチャイチャしてるやつがいたら、ムカつくよね！』

「「ムカつく———ッ！！」」

『腹立つよね！』

「「「イラつくーーーッ!!」」

『そして、そんな中この剣爛祭である！　あのッ!!　ボクらのアイドルこと閃光のアスナとデートしようとしてる不逞の輩がいるらしいんだよね！』

「「な、なんだつてー!!?」」

『というわけで、本日のメインイベント一発目はコレ！　「真っ黒野郎ぶつたおせゲーム」!!』

「「「うおおおおおおおおお!!!」」

『ルールは簡単。不逞の輩こと真っ黒野郎のキリトを取つ捕まえたら勝ち、出来なかつたら負け。つまりは鬼ごっこだね。場所はこの主街区シユテインのみ、外のフィールドエリアは含まれません。ここちやんと覚えておいてね。制限時間は1時間。それまでにキリトを捕まえて、ここ中央広場に来てね。あつ、キリトも逃げきたらここに戻つてくるようにな』

「よつ、え、キリトさん!!

「キリトさんがデート!?

「あ、いや、でも相手はあのアスナさんか……。

「いつだつたか写真見たけど、あのすごいキレイな人だよね？

「あたしみたいにちっちゃくなくて、大人っぽい感じの人。

……………わかつてたけど、ちよつとショックだな。

あ、ユウキさんが手招きしてる。

あたしの出番ここなの？ このタイミングなの？  
なにするんだろ？

『そんでもって、賞品のお話ね。見事黒いあんちくしようを捕まえる事が出来た人には  
なんと、キリトの代わりにアスナとのデート権が与えられまーす。やつたね』

「「「いよっしゃああああああああああ!!!!」」

「ちよつ、ユウキ、私それ聞いてない！」

『さらにさらに、勝利した人にはデート権にプラスしてさつきボクが捕まえてきた、この  
中層区のアイドル、ビーストティマーのシリカちゃんからほっぺにキッスまでして貰え  
ちゃうぜ！————皆ボクに感謝しなよ』

「「————ツ!!!!」」

「な、な、ななな」  
なにそれ———つ!!!

無理無理無理無理ツ！絶対無理ツ！！

そんな知らない人のほっぺにキ、キスとか、本当に無理です!!

「ユウキさん！ あたしそんなのできないですよつ」

「大丈夫大丈夫、ボクに任せなさいつて。あとでボクに感謝する事になるから」「感謝つて……」

「この状況でそんな事思うわけないじやないですか！」

『つてなわけで、準備はいいねみんな？』——んじゃまあ、よーいスタート!!

り切つて行つてこーい』

「あとで覚えてろよユウキ——ツ！」

「「待ちやがれキリト—————!!!!」

あ、キリトさんいた。

もう見えなくなつたけど。

いやいや、今はそれどころじゃなくて

「あのつ、ユウキさんあたし』

「勝者にはデートにキス。ボクはそう言つたね』

「は、はい。だからあの、あたしつ』

「捕まえたら勝ち、捕まえられなかつたら負けとも言つたね』

「——つ！ あたしやつぱり無理で——』

「じゃあ、キリトが逃げきつたら誰の勝ち？』

「——す…………えつ？」

キリトさんが、逃げきれたら……？

「誰の勝ちになるとと思う？」

「…………それは、つまり捕まえられなかつたつて事ですから、えつと、キリトさん、ですか？」

「じゃあ、勝者が貰える賞品は誰が受け取ることになると思う？」

勝つた人にはアスナさんのデートとあたしのキス。

捕まえたら勝ちで、出来なかつたら負け。

キリトさんが逃げきつたらキリトさんの勝ち。

そうなつたら、キリトさんがアスナさんとデートして、あたしのキスは――

「はわわ、はわわわわわ」

「ふふつ、ははは。面白いねシリカは。もう顔真っ赤じやん」

「だつ、だつてあたし、キリトさんにキ、キ、キシユすることに」

「噛んでる噛んでる。いやー、予想以上の反応するねシリカ。ボク的に100点上げよう。まあ、そんなわけだからシリカが知らない人にキスする事にはならないから、安心していいよ」

「でもですねつ、もしキリトさんが捕まつたらどうするんですかつ？」  
「そう、そうだよ。

キリトさんが逃げきれるかなんてわからないし。

さつき追いかけてたのだつて、すごい高レベルの人も多そだつたし。

「大丈夫だよ。キリトが勝つから」

「…………なんで、そう言い切れるんですか？」

「友達だからね！」

「…………友達だから、ですか」

「そ。キリトは友達の期待を裏切ることはしないからね。だから大丈夫だよ」

根拠なんて無くて、信じられる要素はどこにもなかつたけど

つい、この言葉をあたしは信じてしまつたのだ。

「まあ、もし仮にキリトが捕まつたとしてもボクが有耶無耶にしてみせるから安心していいよ。ボク、そういうの得意なんだから」

「…………わかりました。ユウキさんを信じます」

「よしよし。じゃあ1時間ここで突つ立つてるのもなんだから、周りの出店でも回ろうか。折角だからアスナも呼んで3人で。アスナもきっと喜ぶよ、数少ない女の子のプレイヤーだしね」

「楽しいよ、きっと。」

そんな風に言いながら、ユウキさんは歩いていく。

そしてあたしもその後を続いて歩いていくのだった。

こうして、あたしの剣爛祭は幕を上げた。

結果を言うと、キリトさんは見事逃げきつた。

アスナさんとのデート権を勝ち取り、あたしのキスも受け取ったのだ。  
攻略組の人達は文字通り泣いて悔しがっていて、ちょっと怖かつたけど。  
ちなみに、剣爛祭2日目でキリトさんがしたユウキさんへの仕返しにも、あたしは巻  
き込まれてしまつたんだけど……

それはまた、別のお話。

### 【ユウキとクライイン】

見覚えのない景色、どこからか漂う緊張感。  
戦場独特の空気。

ついに辿り着いた。

AINクラッド第32層。現在の最前線。

あいつが――――――キリトがいる場所に！

「くうー！ 気合入ってきたぜ!!」

「おい、リーダー、いいからはやく行こうぜ」

「そうそう。まず会議やるっていう町まで行かねえと話にならねえ」

「お、おう、わかつてるよ。顔見せだろ？ ちゃんと覚えてるつての」

まつたく、人がやる気出してるつてのに水差しやがって。

まあいいさ。とにかく追いついたんだ。

いきなりボス攻略に参加できるなんて思つてねえが、まずは最前線の雰囲気を知らないとな。

出しやばつた結果、揉め事になるなんてのはごめんだ。

どこのギルドの影響が強いとかは情報屋に聞いたが、直で確かめないといけないからな。

「よし、じゃあ出発するか！」

まず目指すのは迷宮区に一番近い町。

そこで攻略組と接触だな。

待つてろよキリト！ 今行くぜ！

「…………で？　どうすんだよリーダー？」

「いやー、その、なんだ？　ちょっと先走つたというか、気合が入り過ぎたっていうか…………」

「それで道間違えてたら意味ねえだろ。なんのために事前にマップ買つといたんだよ」「いやー、ははは…………すまん」

「ま、いいさ。逸る気持ちはわからなくもないしな。ただ次はやめてくれ」「わるいな…………ありがとよ」

マジすまん。

まだ上に登つてきただけだつてのに、さすがに調子乗り過ぎたな。

こんな調子で進んで、仲間死なせたらどうすんだつて話だよな。

マジで気持ち入れ替えてかないとな。

じやないとギルマス失格だぜ。

「町までは結構かかりそうな感じか？」

「今の進行スピードだと、だいたい2時間くらいじゃないか？」

「となると到着は夜中だな。ほんとわりいな、今日は全員分の飯おごるぜ」「やつたな。じやあうんと高いのにしねえとな」

「だな。久々の贅沢だぜ」

「……ちよつとは抑えてくれよ」

確かに俺が悪いけどよ、あんま高すぎるのは勘弁だぜ。

「——ん？ リーダー、索敵範囲内にプレイヤー反応だ」

「……PKか？」

「そこまではわからねえが、数は2。こんな最前線のフィールドで二人つてのは不自然な気がする。どうする？」

「ちよつと待て。今考える」

PKとした場合ならその二人はまず凹だろう。数が少なすぎる。周りに仲間が潜んでるはずだ。

だが、ここは32層だぞ？

現状での最上到達エリア。

この層にいるのはほとんど攻略組だ。そいつら相手にPKを狙う？

狩れればうまいだろうが、失敗する確率の方が高いはずだ。

……いや、そもそも話、ここは町からだいぶ離れた場所だ。

町から迷宮区までの道で待ち伏せるするならわかるが、こんな場所で狙う意味はなんだ？

まず獲物がかかるかどうかもわからねえだろ。

そう考えるならPKの可能性は低いか？

いや、だけど、そうでないとは断言しづらい。

「…………このまま町に向かう。近づいてきたら戦闘準備、その後の対応によつては迎

撃する」

「了解」

対応は間違つてないはず。

PKの可能性は低いんだ。ただのプレイヤーかもしだれねえ。

それか俺達みたいに登つてきたばっかで道に迷つた可能性もある。

問題はないはずだ。

「――反応、道の先で止まつた。このまま進めば当たるぞ」

「――戦闘準備……行こう。多分問題ねえはずだ」

大丈夫、大丈夫だ。

もしPKだつたとしても、俺達なら大丈夫なはずだ。

対人戦はデュエルでしかしたことないが、攻略組を目指してレベルは十分上げてき

た。

卑怯なPK野郎なんかに殺されるわけねえ。

「なんだ……明かり……？」

道の先で明かりが灯っている。そこに相手がいるんだろう。

幸いまだ俺達は人を斬つたことはねえが、最悪の時は俺が仲間の代わりに斬つて——

え？」

「ふえ？」

そこには見知った顔と知らない顔がいた。

「にしても、びっくりしたぜ。索敵スキルですぐ傍にいるのは気付いてたけど、まさか柄に手伸ばしながら近づいてくるとは思わなかつたぜ」

「あー、なんかすまんな。一人しか反応なかつたからPKの可能性考えてたんだよ」

「なるほど、そういうことか。確かにこんな場所で二人つてのは変だもんな」

「そう言つてもらえると助かるぜ……」

いたのは男と女の子の二人組。

男の方は知ってるやつだ。

元ベータスターで、VRゲームに慣れてて、女みたいな顔をしてる。このゲームで初めての俺のフレンド。

キヤラネームはキリト。

あの悪夢の日からずつと、最前線で戦い続けるみたいだ。

女の子の方はまつたくわからん。

だが、こんな場所にはそぐわない容姿をしている。

背も低くて、体も細い。

まあ、ある意味ゲーマーっぽいかもしだれないが、剣を振り回す姿が似合うとは言えねえ。

キリトと一緒にいたつてことはパーティを組んでるんだろうが……なぜか今はちよつと離れたどこから俺を見て、首を傾げている。

「…………で、キリト。あの子はなんだ？ まさか彼女とか言わねえよな」もし、そうだったなら俺は縁を切る事も辞さないぞ。

「彼女…………？」いや、ないない。ただの友達だつての」

「友達ねえ？ こんなどこで二人つきりでいてかあ？」

「本当だつて、ユウキとは同じ攻略組の仲間だよ。結構強いんだぜ」

「攻略組の？ マジか……人は見かけによらないとはこのことだな」

VRだし見た目と能力が乖離するのはわかってるけども、似合わねえな。

あんな病人みたいな見た目で攻略組とは。

「わかるわかる。俺も初めて会った時は驚いたさ——ユウキ、なんでそんなところで黙つてるんだ？」コイツのこと紹介するよ」

「うん？ もういいの……？ なんか久しぶりに会つた感じだつたし、話す事いっぱいあるのかなって思つてたんだけど」

「これからも会うことになるから、その時でいいさ——紹介する、こっちが俺のフレンドの」

「クライインつてもんだ。ギルド風林火山のギルマスもやつてる。よろしくな」

「クライイン…………？ クライイン！？ あーあーあー、なるほどなるほど。キリトのフレンドで後発攻略組…………へー、そういうことか。納得」

なにに納得したんだこのお嬢ちゃんは？

「じゃあ自己紹介させてもらうね。ボクはユウキ、キリトと同じで普段はソロでやつてるよ。ボス攻略の時とかの集団戦闘じや主にダメージディーラー担当。つてことでこれからよろしくね、クライインさん」

「お、おう。こっちこそよろしく頼むぜ、ユウキさん」

「む。さん付けはしなくていいよ。ボクあまりその呼ばれ方好きじゃないし」

「なら、こつちもクラインでいいぜ。俺達の方が攻略組としてはユウキの後輩になるしな」

「うん、オッケー。わかつたよクライン」

結構明るい感じの子なんだな。

姫プレイヤーみたいな明るさじやなくて、ムードメーカーみたいな感じの。

……実はキリトが貢がされてる、なんてのは無さそうだな。

「それでキリト、なんでこんなとこにいたんだお前ら？」迷宮区からは遠いだろここ

「それはこつちのセリフでもあるけどな——理由としてはボスの弱体イベントの帰りだ」

「弱体イベ…………？　こここのボスそんなのがあるのか？」

「ああ、二つ下の階もあつたみたいなんだけど、その時はごり押しできたんだが……」

「もー、ひつどいんだよこここのボス。全っ然攻撃通らないの。ゲージ一本も削れないんだよ？」『絶対おかしいコレ』ってなつてみんなで情報収集したらそれっぽい情報が手に入つてね。それでボクとキリトが行つてきたつてわけ。迷宮区と真逆の場所だつたんだよ？　ひどいと思わない？」

「はー、なるほどな…………なんでお前ら二人になつたんだ？」

「調べた限りだと難易度が低そだつたのと、俺もユウキもソロだつたから、だな。自分の準備が終わればすぐ出発できるし、軽剣士だから移動も速いしな」

「さらに言えば、ボク達が強いからだね！」

「それ、普通自分で言うか？」

「なにさ、キリトは自分が弱いって思つてるの？」

「……いや、思つてないけど」

「じやあいいじやん。自分の思いを周りに伝える事は罪じやないんだからね！」

「物は言いようだな……」

「なんというか、こいつら

「仲、いいんだな」

「——うん！ ボク達友達だからねつ！」

「ちょつ、いきなり肩組もうとするなつていつも言つてるだろ！」

「いいじやんか、たまにはー」

「女子の気軽な接触は健全な青少年にはダメなんだつての」

「なんかちよつと安心したぜ。

最初に会つたときはあんまり人付き合いが得意には見えなかつたからな。  
ちゃんと友達作れてんだな。

「大丈夫大丈夫。ボク、自分より弱い人は異性として見てないから。だから安心していいよ、2連敗中のキリトくん」

「おまえ…………その前までは俺に負けまくりだつたじやねえか！」

「かつちーん。アレはキリトがずるいんじやんか！ 初心者に対しても卑怯だよ！」

「誰が初心者だ！ 元ベータテスターだろうが！」

「対人戦は正式版が初だつたんですうー。ベータはモンスターとしか戦つてなかつたんですねうー」

「こいつ…………ベータじゃ攻略組にもなれなかつたくせに」

「頑張り始めたのが正式版になつてからだつたんだつての」

「…………」

「…………」

「やるかユウキーツ！」

「上等だキリトーツ！」

仲、いいん、だよな…………？

というかお前ら

「喧嘩するなら町についてからにしろ！ ここまだ道端だつての！」

「だつてキリトが！」

「だつてユウキが！」

攻略組になつてからの日々は、なんだか騒がしくなりそうだな。

【ユウキとリズベット】

「リズー、いるー？」

「——店開いてるんだから、いるに決まってるでしょうが。なに？ どうしたの？」

「剣、研いでほしいなつて」

「……あんた、三日前にも同じこと言つてなかつたつけ？」

「……えへへ」

相も変わらずこいつは……

このバカみたいな笑いで誤魔化そうとしているのはユウキ。攻略組の一員だ。その中でもトップ中のトップに位置する実力を持つたプレイヤーもある。

見た目だけならその辺の雑魚にもやられそうな感じだつてのに。  
もはや、一種の詐欺としか思えない。

「はあ、まあいいけど…………にしてもあんた最近頻度高過ぎない？」

少し前までなら、早くてもせいぜい1週間に一度くらいだつたのに。

最近は少しダンジョンに籠り気味じやないかしら？

「いやー、ほら残りはあと30層でしょ？ そろそろ本腰入れないとダメかなーって」

「なに言ってんのよあんたは…………それで自分が潰れたりしたらどうすんのよ」

「お、なになに？ リズ、ボクのこと心配してくれてるのー？」

「茶化さないの。あんたはただできえそんな見た目なんだから、あんま無理するんじやないわよ。あと普段からもつとご飯食べなさいっての」

そんなガリガリの体で戦つてる姿見ると不安になるつての。  
そのくせ強いから困るのよね。

「ふふふ、リズは優しいなー。ボクにそんなに優しくしたら惚れられちゃうぞー？」

「生憎あたしは女の子に興味はありません」

「それもそうだね。リズが興味あるのはまづくろくろすけだもんね」

「…………アスナに聞いたの？」

「いーや。知つてただけだよ」

「ふーん。そう……」

「…………本当になんでコイツは他人のそういうことにすぐ気付くんだか。

「いやいや、ほんとにキリトはすごいね。知つてはいたけどあんなにモテモテだとは。知つてる？ この前の結婚式に来てたシリカちゃんつてビーストティマーの娘もキリストのこと好きなんだよ？ びっくりだよね」

「…………一応聞くけど、そういうこと周りに言いふらしたりしてないでしようね？」

「してないしてない。これでも攻略組のキューピッドとしての守秘義務は守ってるんだよボクは。これまで14組のカップルを成功させたボクだけど、誰が誰を好きだとそういうことは周りには絶対喋つて無いんだからね。そういうことされたら傷つくでしょ？」

攻略組のキューピッド、ねえ？

なんか恋愛事に首を突っ込んで回つてるのは噂で聞いてたけど、そんなことをしてたのね。

下手に手出したら拗れそうなもんだけど、よくそんな事やるわね。あたしには無理。

「そんなことしてるんなら、クラインの事も手伝つてあげればいいじゃない。いつも『彼女欲しい』って騒いでるじゃない」

「あー、クラインはちよつと、アレでき…………なんていうか、ボクは可能性が1%でもあ

ればそれを100%に出来るように手助けするけど、元が0%じゃ手助けするにも手の  
出しようがないんだよね…………」

「…………それ、本人に伝えてないわよね？」

「さすがにそれは、ちょっと不憫すぎる。

「ボクだつてそれぐらいの分別はあるよ。かわいそそうだし一回だけ協力したけどね

「へー…………で、フラれたわけ？」

「フラれたというか、当て馬になつたというか…………」

当て馬?

「…………氣になるつていう女の子が丁度その時のボクの依頼人でね。相談受けてたんだ  
よ」

「あー、それは」

「なんといえばいいのやら。

「さすがに不憫でね。キリトに相談して一緒にそれとなく諦めさせるようにしてたんだ  
けど効果なくて、それでまあ色々と糺余曲折ありまして」

「当て馬になつて結果的に相手のサポートをしたつて？」

「そーいうこと。さすがにボクでもあれはからかえなかつたよ。言葉も出ないつてのは  
正にあのことだね」

「ふーん」

なんていうか、この娘の周りはいつも愉快な事になつてゐるわよね。

こういつたくだらない雑談をするといつも思うけど。

でも、よく考えたらいつも周りの話ばかりでユウキ自身の話は聞かない気がする。

「…………それで？ そういうあんたは？」

「ん？ ボクがなに？」

「あんたの恋バナ、あたし聞いたことないんだけど」

「ボクう？ 期待してるとこ悪いけど、誰かを好きになつたことも好きになられたこともないよ」

「へー、ほー、ふーん」

「え、なにその反応？」

好きになつたことがない、ねえ。

「キリトはどうなのよ？」

「…………はい？」

「だからキリトはどうなのよって話よ。いいわよ、今さら隠さなくとも」

何を今さら。

ユウキのキリトに対する反応は他の人に対するものと全然違うのはバレバレだつての。

いつも話題に必ず一度はキリトが出て来るし、普段からよく一緒にいようとしてる  
し。

というか最近ダンジョンに籠つてゐる本当の理由はそれでしょ？

キリトとアスナが結婚したから、そのショックを誤魔化す為でしょうに。

「……………それ流行つてるの？」

「は？」

「それ、この前アスナにも言われたんだよね…………ボクそんなにキリトの事好きに見えるの？」

「は、いや、つていうかアスナにも言われた？ いつの話よ！」

「アスナがキリトにプロポーズされた日の夜に、アスナの家で」

「は、はあ！？」

なにそれ！ どういう状況よ？！

「キリトのこと励ましてたらその最中にアスナから『話がしたい』つてメッセージ届いて  
さ、結構遅い時間だつたんだけどアスナの家行つたんだよ。そしたら」「  
待つた」

「えつ、な、なに？」

「キリトを励ましてたつてなに？」

「ああ、それ？『プロポーズしたけど時間をちょうど言われた』って落ち込んでね。ボクの見立てだとすぐオッケーくれると思つてたから予想外だつたんだけど、アスナも嬉しくてちょっと混乱してただけだよってキリトを励ましてたんだよ」

いや、待つた。つまりなに？

あの男はプロポーズしたあとにそれを真つ先に別の女に報告しに行つたつてこと？さらに励まされてたつて？

……ちよつと今度会つたら殴つとこ。

「えつと、それでアスナの家行つたらさつきリズが言つたみたいにボクがキリトのこと好きなんじやないかつて言われて。違うつてことを朝になるまで説明してわかつてもらつたんだ。アスナなかなか納得してくれなくてね……」

え、じゃあなに？

ユウキは本当に好きじやないの？

あんなに一緒にいて？

しょつちゅう二人で遊びに行つたりして？

「…………キリトのことどう思つてるわけ？」

「ボク的には、すごく気の合う仲のいい友達、なんだけど……わかつてもらえた？」

そんなの

「な」

「な？」

「納得できるかあー！　あんなに仲睦まじくしてそれが通るなんて思うんじゃないわよ!!　あたしは騙されないからね!!!」

ふざけんじやないわよ！

今さら言い逃れしようなんてそれはいかないんだからっ！

「今日はもう店仕舞いよ店仕舞い！　ユウキッ！　今日は家に泊まりなさい！　一晩かけてじっくり聞き出してやるわ!!」

「ああ、うん、おつけー…………アスナもこんな感じだつたなあ」

絶対に本音を聞き出してやるわ！

覚悟しなさい!!

本当に好きじゃないと説得されるまで6時間かかりました。

【ユウキとエギル】

「——で、いつまでいるつもりだユウキ?」

「……決まるまで。あとちょっと待つて」

「待てとはいが……ユウキ、お前さん、ここがどこかわかつてるとのか?」

「……どこつて、エギルのお店」

「そう、俺の店だ。つまりな——」

このAINクラツド第50層主街区アルゲードに開いた雑貨屋。

それが俺のやつてる店だ。

モットーは、安く仕入れて安く提供すること。

その性質上この店には役に立ちそうな物から立たなさそうな物まで揃つてゐる。  
だがな——

「——ウチの店で結婚祝いになりそうなモンなんてあるわけないだろ!」

「ぶー。そうは言つてもボクの行きつけのアイテム屋なんてここぐらいだし……あと  
よく行くのは『飯屋さんばかりなんだから仕方ないじやん』

「……別に行きつけの店である必要はないだろ。ユウキが渡すプレゼントなら、キリト  
もアスナも喜んでくれるだろうが」

服とかアクセサリーとか、皿なんてのでいいだろうに。

ウチにあるのは基本的に素材アイテムばっかりだぞ。

「喜んでくれるからちゃんと選びたいんでしょ？　一人に心から喜んでくれるもの渡したいんだもん…………」

「まつたく、いつもは大胆に切り込んで行くくせに、こういう時は慎重なんだな」  
絶剣のスキルの仕様上仕方ないんだろうが、あんな普段見てて心配になるような戦い方してるくせにな。

こういう時もその豪胆さを活かせばいいものを。

「…………だつて、ボクこういうの初めてで、どうしたらいいかわからんし」

本当に今日はらしくないな。

いつもは何もなくとも笑つてるつてのに。

「ハア、しかたねえ…………今日は早めに店閉めてやるから、そのあと一緒に買い物に付き合つてやる。それでどうだ？」

「…………うん。うん！　わかった！　ありがとう、エギル！」

「はいはい、どういたしまして」

嬉しいのはわかつたから、ぴよんぴよん飛び跳ねるのはやめろ。

システム的に大丈夫だろうが、ケガしそうで見てて怖い。

「つつても、さすがに今から店閉めるつてわけにはいかねえから、せめてあと1時間ぐら

いは待てよ」

「わかつた！　じゃあ待つてるね」

さつきと打つて変わつてニコニコと楽しそうにしゃがつて。

これを狙つてやつてるなら将来は立派な悪女になれるな。

「……ねえねえ、エギル」

「なんだ？」

「結婚式つてお金持つてくんだよね？　えつと、お香典、だつけ？」

「…………香典は葬式だ。結婚祝いに渡すのは葬祝儀な」

「そう！　そのご祝儀つていくらあればいいのかな？　千Kくらいで足りる？　少ないかな？」

「…………それで足りないって言つてくるやつとは縁を切ることを俺は勧めるが  
な」

「……？　ちょうどいいってこと？」

「多すぎるつてことだ」

「なんというか変なところでズレてるな。

まあ見た目からして、おそらく中学生前後。

多少物事を知らなくても不思議つてわけじゃないがそれにしても普段から――

——いや、リアルの詮索はマナー違反だな。

やめよう。そこまで踏み込んでいいものじゃない。

「——今のうちにどんな物にするかぐらいは考えておけよ？ せめて種類を決めて

くなきや店を回りようが無いからな」

「はーい。ふふーん、なににしよつかなー」

「やれやれ……」

テンションの切り替えが速すぎてついてけないっての。

「あ、そうだ。ねえねえ、エギル。一個聞いていい？」

「今度はなんだ？」

「エギルは結婚した時はどうだったの？」

「…………」

俺が既婚者だつて事を知つてる？

前に話したか？

いや、ユウキにそんな話をした覚えはない。

それ以前に俺はこのSAOの中で、現実では結婚してるなんて話は一切してない

…………はず。

…………いや、どうだろう。

男連中と飲んだ時に、酔つた勢いで喋つちまつた可能性は否定できねえ。

「エギル？ ねえねえ、どうだつたのさー」

「——はあ、誰から聞いたんだ？」

「お、つてことは認めるんだね」

「はあ…………？」

「誰にも聞いてないよ。ボクが知つてただけ」

「なんだそりや…………それを言うなら、気付いたの間違いだろ」

「えー、そうかなあ。合つてるとと思うんだけど」

まさか力マをかけられたとは。

初めて会つた頃は商人プレイヤーによくぼつたくられてたユウキがこう育つなんてな。

見た目は変わらねえがちゃんと成長してるつてことなのかね。

「それで、エギルは結婚した時に友達になにもらつたの？」

「別に大したものはないさ、ちょっととしたインテリアとかだな。店に置けるよう

な」

「ほー。なるほど、インテリア…………うー、選択肢が増えた」

「そんなに難しく考えなくていいと思うんだがなあ」

「考えるよ！　これはお返しなんだから！」

お返し？

「なんだ、お返しつて？　あの二人になんか貰つてたのか」

「そんなの決まってるじゃん！　幸せだよ。それ以外ないでしょ？」

「幸せ…………？」

「うん。幸せ」

「…………なんでだ？」

「なんでって、二人が結婚したからだよ？」

…………頭が痛くなってきた。

「すまん、わからん。なんであの二人が結婚したらユウキが幸せなんだ？」

「ボクの友達が好きな人と一緒になるんだよ？　しかもその相手もボクの友達。これが  
幸せじやなかつたらなにが幸せなんだーって感じだよ。ほんと嬉しいよね」

「…………確かにお前さんが妙にあの二人を囁し立てたのは知ってるが、そんなに思う  
ほどか？」

ついこの間も、自費で号外作つてばら撒いてたしな。

よくそんなことをやるもんだとは思つたが。

「そりやそうだよ！　だつてエギル今の到達階層がどこかわかつてる！」

「どうつて、そりや69層だろ?」

フロアボスのLA取ったのユウキで、散々周りに自慢してたじやねえか。

「そう、69層! まだ69層なのにあの二人はもう結婚するんだよ! これがどういうことかわかる!? つまりボクのおかげってことなんだよつ!」

「すまん、全然わからん」

もう結婚するつてなんだ。

まだしちゃダメだつて言いたいのか?

確かにあの二人が結婚したのはユウキの尽力があつたからなのはわかるが。

あれだけさんざんキリトの事煽つてたしな。

俺もやつと告つたかとキリトの報告聞いた時は安堵した覚えはあるが……  
でもやつぱり意味が分からん。

「もー、つまりはあの二人が一緒になつてくれてボクはすごい嬉しいつてこと。実に恋のキュー・ピッドらしいねボクつてやつは。さすがは数多のカツップルを成功させた女だよね」

「キュー・ピッドねえ…………そりゃなんでそんなのやり始めたんだ?」

「なんでつて?」

「いや、だからよ。確かに他人の色恋沙汰を聞くのは楽しいが、普通はここまで手出したりしないだろ？　もしそれが原因で別れたりなんかしたら大変だしな」

「そんなの決まってるよ。いいエギル？　ボクはこれまで数多くの恋愛小説と少女漫画を読破してきたんだよ。そんなボクが叶えられない恋なんてあるわけないじやないか。そしてボクはみんなのハッピーエンドを見てみたい。ならやることは決まってるでしょ」

つまり、小説やら漫画みたいな恋を見てみたかったからってことか？

本気で言つてるんじやないだらうなコイツは……

いや、ユウキのことだ。どうせ本気で言つてるんだろう。

「それに、好きな人と一緒に居られるのって幸せな事なんでしょ？　だからボクも、それを見て幸せになれるんだよ」

「ふーむ。なるほどな」

誰かが好きな相手と一緒にいるところを見て、自分もそうであるかのように感じていると。

自己投影してゐることになるのか。

ん？　ということはユウキは――

「――なんだ、つまりユウキは寂しがり屋つてことか」

「——えつ？」

「要は誰かと一緒にいたいけど、それが無理だと思い込んでる。だから相手に自分を重ねてるってことだろ」

「——う」

「ユウキにも見た目相応のところはあつたんだな。少し意外だつたが」

「——がう」

「まあ、心配すんな。確かに俺達は特別な関係とかじやないが、皆お前の仲」

「——ちがうつ！」

「——問……ユウキ？」

「ちがうちがうちがうちがうちがうちがう！」

「お、おい、どうした？」

「なんだ、いきなりどうした。

「ちがうつ！ ボクは寂しくなんてない！ ボクは一人じやない！ ボクはここにいる！ ここにいるんだよつ！」

「ユツ、ユウキ？」

「ボクはいらなくんてない、邪魔なんかじやない！ パパもママも愛してるつて言つてくれた！ 姉ちゃんも大好きだつて言つたんだ！ キリトもアスナもこんなボクを

友達だつて言つてくれたんだ！だからちがう寂しくなんかないつ！！

「おいつ！ ユウキ落ち着け！」

「もうボクは僕じやない、ボクになつたんだ！ ユウキになつたんだよ！ 変われたんだ！ いやだいやだいやだ戻りたくない、もうあそこにいたくない！ もういやなんだ！ もう一人はいやなんだよつ！！」

「——ユウキッ！」

「——つ」

「落ち着け、俺が悪かつた。全部俺が悪かつたんだ。だから、落ち着け、な？」

「あつ、やつ、ちが、ちがう、ちがうんだよ……寂しくなんてない、ほんとだよ……エギル、ボクちがうんだよ、うそじやないんだ」

「ああ、そうだ、そうだな。違うんだな。大丈夫、わかつてるさ」

「ほんとうだよ、さびしくない、一人でもだいじょうぶなんだよ」

「ああ、わかつてる。わかつてるさ、安心しろ」

ああ、ちくしょう。

こんな地雷があるなんて少しは予想できたはずじやないのかよ、俺。

ユウキの見た目で多少は察せたはずだろうが。

普通の子供がこんな体で生活してるわけないなんて、最初に思つたはずだろうが。

言動と比べて幼い見た目、明らかに平均以下の体重であろう細い体。仮に引きこもりの子供だとしても、もつと筋肉はついてるはずだ。リアルの詮索はマナー違反？

そうだとしても大人は子供に対して気を配つてやらなきやいけないってのによ。ああ、ちくしょう。

こんな失敗いつ以来だよ。

「…………… 買い物、今日はやめておくか？」

「…………… 行く」

「そうか、わかつた。今店閉めてくるからちょっとだけ待つてろ」

「…………… うん」

……詫びはちゃんとしないとな。

今日は好きなだけ言うことを聞いてやつて、落ち着かせてやらねえと。

なんなら嫁の話をしてやつてもいい。

とにかく、周りから見て変に思われないレベルには戻してやらないといけない。また誰かが地雷を踏みでもしたら、その時傷つくのはユウキだ。

——本当なら、カウンセラーとかに診てやつてほしいところだが

——恨むぜ。茅場晶彦

こんな閉じ込められた世界に子供まで巻き込んでるんじゃねえよ。  
 大人としての自覚もないのかよ、天才ってのは。  
 もし会えたなら、そん時は一発ぶん殴つてやらねえとな。

### 【ユウキとユイ】

「ほれーここか？　ここがええんか？」

「ちよつ、もう、くすぐつたいですよつ」

「ほれー、ほれほれー」

「もー、ユウキさんやめつ、もう、パパー」

「はいはい。ほらユウキおさわりタイム終了だ。

今日はもう諦めろ」

「ああ、ボクの癒しがあ…………キリトするい！」

反則だ！　チートだチート、チーターやー！」

「なんだよその変な似非関西弁。つてかそれどんなチートだよ、逆に気になるつての」

「むつ、あの迷言を変なモノ呼ばわりとは。さすがキリト格が違うね」

「はいはい。俺とユウキじや格が違うんだよ。ということでユイに触るの禁止な」

「あー！ キリトずるつ！ .....ボクより弱いくせに」

あ、パパの動きが止まつた。

「ほ、ほー。誰が弱いって？」

「さあ誰だつたかなー。この前5分持たなかつたのはどこの黒づくめだつたかなー？」

「.....はは、その黒づくめにこの前負け越したのは誰だつけなー？」

「.....あは、あははははははは

「ははは、はははははは

「.....」

「.....」

「表出ろキリトーツ！」

「上等だユウキーツ！」

「.....行つちやつた。

本当にパパはユウキさんといると子供っぽくなりますね。

ママがたまに羨ましそうにする理由がちょっとわかる気がします。

剣戟の音が遠く、地面を踏みしめる音が聞こえないで今日は空戦みたいですね。この前ママに庭で戦つてたらうるさいって怒られたのを一人とも覚えてたんでしょうか。

宿題やつてる最中にあれば騒がしかつたですから、私もしようがないと思いますけど。

ユウキさんがパパたちの前に姿を現したのは今から3週間前のこと。

それから毎日パパたちは一緒に遊んでいます。

そんな二人を見てママやクラインさんたちはSAOに戻つたみたいと言つています。

二人ともSAOの頃とはアバターが異なつてゐるはずなのに、なぜかそう見えるそうです。

私がユウキさんに会つたのも3週間前が初めてです。

そもそも、パパたちはユウキさんとこの1年間連絡を取れなかつたそうです。

なんでも、現実での連絡先をユウキさんが教えてくれなかつたらしくて。

ユウキさん曰く、「ネットで会うのはともかく、リアルはちょっと恥ずかしいじゃん」との事。

結局、今もメールアドレスしか教えてくれてないみたいですね。

電話もダメっていうのはなぜなんでしょうか？

もしかしたら声とかにコンプレックスがあるのかもしれません。

それから俗に言う、恥ずかしがり屋さん、という人なんですかね？

ちょっと不思議な人です。

「——でも、悪い人ではないですよね」

パパやママの事が大好きーって気持ちはすごく伝わってきますから。

いつもみなさんにニコニコ笑つて突撃して行つてますし。

……私を撫でまわすのはちょっと遠慮してほしいんですけど。

まあ、そこはパパの頑張り次第ですかね。

なんでも戦つて勝つた方が命令できる、なんてルールが最近の二人の間にはあるみたい

いですし。

昨日はパパが負けて一日語尾に「ざわす」を付けるなんて命令されましたけど。

多分、一昨日にユウキさんが「ざざる」って語尾に付けさせられた仕返しでしようけど……。

本当に二人とも仲いいですよね。

ちょっと気になるのは、パパがたまにユウキさんを見て不思議そうな顔をすること。

なにか違和感がある気がするそうです。

それがなにかはまだわかつてないそうですけど、ちょっと気になりますよね。

「ユイちゃん。出かけるよー。これから地下で邪神狩り競争やることになつたんだー」

「つて、わ、

「お、なにやつてるの？ 日記？」

「中身は見ちゃダメですよつ。パパにつけてみたらどうだつて言われたんです成長の記録がどうとかつてパパは言つてましたけど。

「へー、キリトが。確かに意外と書いてみたら楽しいしね日記つて」「はい。毎日なに書こうか迷っちゃいます」

「ふーん。いいねそういうの。ねね、今度見せてよユイちゃんの日記」「ダメですよつ。恥ずかしいから禁止ですっ」

「えー、お願いつ、この通り。一回でいいからさ。ねーねーいいでしょー？」

「そんな目をウルウルさせながら言わないでください。

「むー、じやあ一回だけですよ」

「ほんとつ！？ やつたね」

「でも、今はまだダメですよ。まだ書き始めたばかりなのでもつと中身が増えたら見せてあげます。ユウキさんだけの特別ですよ?」

「オッケー オッケー。じゃあ今度読ませてね」

「はい。楽しみにしててください」

仕方ないですから見せてあげることにします。

でもそれはもう少したつて、ユウキさんの恥ずかしい記録を書いた後にしましよう。パパが言つてました。ユウキさんはそういつた攻撃に弱いつて。普段のパパがからかわれてる仕返しです。

決して最近パパが取られてるからじやありません。

「おーい。ユウキ、ユイまだかー?」

「はいはーい。今行くよ——いこつか、ユイちゃん」

「はい!」

その日が来るのが、楽しみですね。

【ユウキとヒースクリフ】

第55層主街区グランザム、そこにある一つの塔のような建物。そこに、ここギルド血盟騎士団の本拠地がある。

そしてその一室に、私は彼女と二人でいた。

「ぶえー、ぜんぜん終わんなーい。ヒース、へるぷみー…………」

「…………企画部長をやると立候補したのは君自身だつたと記憶しているが？」

「だつて、こんなに大変だなんて思わなかつたんだもん。もつとこう、パパーツと案出したら終わりだつて思つたのに…………こんなにやる事多いなんて聞いてないもん」

「やれやれ、一社会人として忠告するが、そのままでは今後の人生苦労すると思うがね」「むう。ぶーぶー」

「…………なにか？」

「豚の真似」

「…………せめてもう少し肉付きを良くしないと、あまり伝わらないと思うがね」「つつこむのそこ？ というかなんで皆ボクにもつと食えつて言うのさ」

「君の体に聞いてみたらいいのではないかね？」

「好きでこんな体になつたんじやないつての。もう、仮想空間なんだから意味ないつて言つてるのに…………」

「ふむ…………まあ、気持ちは理解できるがね」

「なにさそれー」

彼女はユウキ。

俗に言う攻略組に分類される、この世界でもトップの能力を持つたプレイヤーの一人だ。

普段はソロで活動していて、所持しているユニクススキルの名前から「絶剣」などと呼ばれることがあるそうだ。

現在は「剣爛祭企画部長」の肩書を持っている。

そして私の名前はヒースクリフ。

同じく攻略組で、その中でも主力ギルドと呼ばれる「血盟騎士団」のギルドマスターでもある。

「神聖剣」というユニクススキルを持ち、全プレイヤーでもつとも堅い男とも言われているらしい。私にとつてはどうでもいいことではあるが。

現在は「剣爛祭実行委員長」の肩書を持っている。

我々は今、第一回となる剣爛祭の開催に向けて、資料を作成中だ。

もつとも、彼女の方はリタイア寸前であるが。

「もうやだー、つかれたー。ねえレベリング行こうよレベリングー」

「明日の会議資料を作成しなくていいのなら、それも構わないが。ちなみにその場合祭りは中止になる可能性が高いがね」

「ううううう」

「唸つてもどうしようもないと思うが？」

「…………十分休憩！ それくらいいいでしょ！」

「ふむ…………では、そうしようか」

「いえーい！ おやつおやつー、アスナのクツキー」

そう言つて無邪気にはしゃぐ彼女。

以前、私の前にたつた一人で向かい合つたようには見えないな。

「…………ふむ。ユウキ君、一つ聞いてもいいかな？」

「んー？ なーに？」

「なぜ君は、私を排斥しようとしてしないのかね？」

「…………なに、ボクに茅場の話をしろって言つてるの？」

「少し興味が湧いたのでね」

「あつそ…………で、なんで追い出さないかつて？」

「ああ。別に君なら可能だろう？」

「よく言うよ。血盟騎士団の団長を、ただのソロの小娘が『あいつは実は茅場晶彦なん

だ』なんて言つて誰が信じるつてのさ。考えるまでもないでしょ」

「そうかな？ 普段のユウキ君の慕われた姿を見るに可能性はそう低くないと思うがね。それに約一名は確実に私と君なら無条件で君の事を信じると思うが？」

「…………で？ 仮にそれで追い出せたとしてどうするのさ。もしそうなつたとしたらデメリットが多すぎて、本末転倒だよ」

「ほう――――では、君の言うデメリットとは？」

「わかってるくせによく言うよ…………言つておくけど、ボクは神聖剣無しに75層を突破出来るなんて欠片も思つてないからね！」

「なるほど。だが、それだけではないだろう？」

「神聖剣の裏切りによる士気の低下に、攻略組内でのトップ争いの激化による仲間割れ。それに伴う攻略スピードそのものの遅れ！ 中層以下のプレイヤーからの攻略組そのものへの不信感の増加!! これで満足!?」  
なるほど。

普段の姿を見る限りではあつたが、あまり考えを回すのは得意ではないと見ていたのだが。

出来ないわけではないと。

「ふむ、あの時点でそこまで考えが回っていたのか……ならばなぜ二刀流を手放した

のかね？ あれは君の言うところの勇者の力のはずだが？」

「あー、もうつ！ ボク、茅場大つ嫌いだからそんな奴と会話するの嫌なんだけどつ！」

「私はユウキ君との会話は好きだがね」

「私には無い思考や発想を聞くというのは、存外おもしろいものだ。

「あつそ！ ……このゲームを終わらせるのはキリトで、ボクはイレギュラー。それなのに、ボクがアレを持つてたらこの世界が無事に終わるかどうかも分からぬ…………これでいい？」

「未来を知っているからこそその判断というわけか」

「…………ボクはこの世界の終わりを知ってるし。なんで茅場晶彦がこの世界を作ったのかも知ってる。だからお前が嫌いなんだ」

「…………君を巻き込んだからかね？」

「違う！ みんなに死を押し付けたからだ！」

死を、押し付けた。

変わった表現だな。興味深い。

「この世界は痛みが遠くて、悪意が近い。システム的にそういう風にできてる。だから痛くなるのは心だけ…………現実だったら逃げられる、連絡手段を全部捨ててどこか遠いところに逃げれば、一時でも心を休ませられる——でも、この世界に確実な逃げ

場なんて一つしかない

「それが死だと？」

「そう。こんな限られた鉄の城で、確実に離れられるのは死だけだ…………そしてなにより、プレイヤーは本当に死ぬのかどうかを確かめる手段がない。だからみんな一握の救いを求めて飛んでいくんだ」

「だから、私を許せないと」

「許すとか許さないじゃなく、嫌いなの！　ふん、どうせ言つたつて伝わらないだろうけど、教えてあげる…………死ぬのは、ほんとに怖いんだよ…………」

死は恐ろしい、か。

確かに、それは私には理解できないものだな。

死が不可逆なものという考えはあるが、恐ろしいものであるという考えは私には無い。

「…………まだなんかあるの？」

「いや、聞きたい事は聞けたが。あえて聞くなら、なぜヒースクリフとは交友を深めたのかね？」

「別に、ヒースクリフは好きだからだよ。ちょっと不愛想で話しかけづらい印象あるけど普通に会話してくれるし、普段はリアクション薄いけどたまに想定外の事あつたりし

た時の顔はおもしろいし…………微妙なN P C 料理店に連れて行つた時は特にそうだよね」

「…………だから君は妙に私を食事に誘うのか」

「あとたまーにバグ見つけて、それ教えたたらその場で修正してるの見るの、結構おもしろいしね。滅多に見れないちょっとイラッときてるヒースの顔見れるから」

「…………なるほど」

楽しげな顔をしながら報告してくる理由はそれかね。

「――だが、それは茅場晶彦とヒースクリフを別の存在と見る理由にはならない気がするが？」

「なるよ」

「なぜかね？」

「――だつて、皆はボクのこと『ユウキ』として扱つてくれてるでしょ？　だからボクも茅場とヒースは別物だつて思つて接してるのでだよ」

　　彼女を『ユウキ』として扱う、か。

「そんじやま、休憩おーわり。仕事しようか。ヒース」

「――ああ、そうしよう」

　　彼女とのこれまでの会話で分かつてること。

彼女は未来を知っていると言ふが、正確にはこのSAOの未来を知っているということ。

あるいは、プレイヤーの誰かの未来を知っていると称するのが正しいということ。

会話から読み取れる断片的な情報から、そう読み取る事ができる。

そして、彼女自身の未来について彼女が知っていることは少ない。

だが、キリト君やアスナ君。そして私についての未来は自身のことよりも得てている情報が多い。

そしてその未来もこのSAOを中心とした4、5年といったところ。

そしてなにより、彼女は、彼女自身の死がいつ訪れるのかを知っている。

この世界において、死を誰よりも恐れる少女が、死への覚悟を誰よりも早く決めているとは。

いやはや、難儀な話だな。

「で、仕事の話に戻るんだけどさ、今お祭り会場39層の予定でしょ？ ただ、あそこそ  
んなにキヤパないから違う場所の方がいいんじゃないかって意見上がってるんだよね。  
どうしたらいいと思う？」

「はじまりの街ではダメなのかね？ あそこの中広場なら十分な広さだと記憶してい  
るが？」

「あー、1層はほら、なんていうか、その、休んでる人が多いでしょ？　だから候補から除外した方がいいかなって」

休んでいる人、この世界を受け入れられずに部屋に閉じこもり、自分以外の力による脱出を願い続けている受動的なプレイヤーのことか。

「そういうことならば現在解放されている層で適任な場所は無いな。主街区に拘らなければいくつか候補は出せるが」

「転移門ないからパス。中層以下の人達にモンスター倒して辿り着けって言うわけにはいかないでしょ」

「そう言うとは思つたがね。ならばあとは、シユテインだな」

「シユテイン？…………え、どこ？　そんな名前の場所あつたつけ？」

「60層の主街区だよ。そこそこ大きな街で中心にはステージが併設された広場もある」

「おお、いいね、そこ！　よし、そのシユテインって街に決めた！」

「現在の最前線は58層で、明日には剣爛祭企画会議もあるが？」

「明日の会議はとりあえず39層つてことで仮決定して、60層が解放されたら条件的にこっちのほうがいいからつて変更かける！」

以前の私なら、その時点のプレイヤーが知るはずもない情報を教える、なんてことは

しなかつただろうが。

「やれやれ、広報の仕事が増えるな」

「よーし、そうと決まればちやちやつと資料作つて、攻略に行こう！ なんだつたらキリトとかアスナも誘つてさ。うんうん。いいねえ、ユニークスキル3人衆勢ぞろいといとうか」

「彼はまだ外部に公表していないようだがね」

まあ、彼女風に言うのならば。

——そつちの方が楽しそうだから、構わないがね。

### 【ユウキとリーフア】

「ただいまーつて、まだ誰も帰つてないか……」

そりやそうだよね。まだお昼だもん。

今日は学校が半日しかなかつたから早く帰つてこれただけだしね。

お母さんは昨日から会社に泊まり込んでるし、お兄ちゃんはまだ学校だもんね。

「…………たまに早く歸れても、そんなにやることないんだよなあ」

お昼は今途中で食べてきたから別に作らなくていいし、どうしよ。

勉強か、剣道か、ゲームかの3択くらいしか思いつかないや。うーん……いいやゲームにしよ。

平日のこの時間帯にインすることなんて滅多にないし、もしかしたら誰かいるかもしれないし。

でも、誰もいなかつたらどうするかな。

「いや、その時考えよ——リンク・スタート」

まあ、そんなわけでALOにログインしたはいいものの。

「まあ、いないよね」

あたしのフレンドって大体いつものメンツだし、この時間は学校と仕事だもんね。当然ながらフレンドリストは真っ黒だらけ。

当たり前だけどいるわけな——あれ？

「——ユウキさん、こんな時間にもうインしてるんだ」

ユウキさんはいつもインしたら既にいるけど、普段からこの時間にはいるのかな？いや、さすがにそれはないか。

お兄ちゃんが言うには年齢は多分あたしと同じか、もしかしたら下かもつて言つてた

し。

リアルは誰も知らないっていって、実はあたしと同じ学校とか言わないよね？  
……それはないか。SAO帰還者は皆同じ学校に入つてるって話だもんね。  
でも、同じ学校にはいないみたいだつてお兄ちゃん言つてたけど、ならどこに通つて  
るんだろう？

「ま、いつか。暇だし会いにいこ。場所は……お兄ちゃんの家？」

フレンドには鍵渡してるつて言つてたけど、ユウキさんにも渡してたんだ。

別におかしくはないか、すごい仲いいみたいで最近はいつも一緒に遊んでるし。  
喧嘩することも多いけど……

まあ、なんていうか仲良く喧嘩してるつて感じだから問題ないんだろうけど。  
ああいうの見てアスナさん嫉妬とかしないんだろうか？

なんかパーソナルスペースが近いというか、常に傍にいるというか。距離が近いとい  
うか。

実は特別な関係なんじやないかつてあたしは邪推してんだけど……

奥さんの余裕つてやつなのかな？

そんなことを考へてるうちに到着。

やつぱりいいなこのお家。なんか落ち着く。

「…………？ 明かり付けてないんだ。ユウキさん」

どうしたんだろう？ 寝てたりするのかな？

…………ふむ。

よし、せつかくだからこの前の心靈ドッキリのお返ししてあげよう。

お兄ちゃんもよくやり返してるし、いいよね。

決してみんなの前で呼ばされた事を根に持つてゐるわけじゃない。

ほんとだよ？

というわけで、そろりそろり。

「…………おじゃましま————あ」

その時、あたしは初めて妖精を見た。

乳白色の肌。

艶やかな美しい黒髪。

愁いを帯びた表情。

何處か遠いところを見つめる瞳。

そして——流れる涙。

その零れ落ちる思いを彼女は拭うことせずに、ただじっと窓の外を見つめていた。

彼女は何も発さず、あたしの存在にも気付いていないようだつた。初めての経験だつた。誰かに見惚れるなんてことは。まるで絵画の世界に迷い込んでしまつたようで。

そんな風に錯覚してしまうような。

少しでも触れてしまえば壊れてしまうような空気がそこにはあつて。僕くも、美しい光景だつた。

「…………ん？ リーフア？ あれ、まだお昼なのにどうしたの？」

「えつ、あ、いや、その、そ、そ、そう！ 今日は学校早く終わつたので、あはは、はは」

「…………なんでそんなに慌てるの？」

「いやいや全然慌ててないですほんと。というかその…………なんかお邪魔しちやつたみたいで、ごめんなさい」

「お邪魔？ ……………ああ、またボク泣いてたんだ。気付かなかつたよ。なんかごめんね、変なとこ見せちゃって」

「いやいや、変とかそんなことは全然思つてないですからっ。ほんとに」  
顔に触れて、初めて自身が涙を流していたことに気付いたらしい。  
自身の状態に気が付かないほど、何を思つていたんだろうか？

「…………その、なにかあつたんですか？」

「うんにや、なにも。気にしなくても大丈夫だよ。よくある事だから」

「よくある事、ですか……」

「あんな風に泣いてたのが、よくある事？」

「そ。ほら仮想空間つて感情表現がリアルに比べてちょっとオーバーでしょ？　ちょっとイラツつとしただけですごい怖い顔になるし、ちょっと悲しむだけで泣いちゃうし。つまり、さつきのはそういうことだよ」

「…………それなら何か悲しい事があつたつてことじやないんですか？」

「うーんとね、ボク結構感激屋でね。もともと感情表現が他の人と比べてオーバーぎみなんだ。だからすぐ笑うし、すぐ泣いちゃうの。そんなだから仮想空間だつたらさらにひどくてね。さつきは窓の外見てたらなんか感動しちゃって、つい泣いちゃつたみたい。ほら、ちょっと前の打ち上げもずっと泣いてたでしょ。あれと一緒に」

「そう、ですか…………大丈夫ならいいんですけど…………」

感動してた？

そんな風には見えなかつた。

あたしには、まるでなにかを探しているような。

ガラスケースの向こう側に手を伸ばしている、そんな風に見えたけど…………  
気のせい、だつたのかな。

「あ、そうだ。今泣いてたこと皆には内緒にしてね。キリトの耳に入つたらボクがひどい目にあつちやうから」

「内緒にするのはいいですけど、ひどい目……？」

「お兄ちゃんに聞かれたら、ユウキさんがひどい目にあうつて、なに？」

「ボクがからかつてキリトが仕返しするのがボク達の基本なんだ。だけどたまにキリトからからかつてくる時があつてね。さつきみたいになんでもない時に泣いてたのを知られたら、これでもかつてくらいにからかつてくるんだよ」

「あははは……仲、いいんですね」

「まあ友達だからね——そんなわけで、キリトだけじゃなくて皆にも絶対に言わないでほしいんだ。お願ひ！　この通り！」

「いやいや、頭下げないでください——大丈夫です。誰にも言いません。安心してください」

あたしだって、泣いてたのを誰かに言いふらされたりするのは嫌だし。

理由はどうあれ、女の子が泣いてるのをからかうのはどうかと思うしね。

「ほんと!?　ありがとう、リーファだいすきつ！」

「ちよつ！　いきなり抱き着かないでくださいよつ」

ちよつと、どこ触ってるんですか!?

「あー、おっぱいやわらかくて気持ちいいー」

「もー、顔押し付けないでください。セクハラですよ?」

「女の子同士だからおつけー」

「……はあ、女の子同士でもハラスメント報告できるんですけどね」

なんか掴めないというか、行動が読めない人だな。ユウキさんつて。

いきなり突拍子も無いこと言つたりするけど、空気が読めてないわけじやないみたい

だし。

基本皆で楽しめる事優先して行動してる感じが多いから、なんか嫌いになれないんだよな。

昔のお兄ちゃんだったら苦手そうなタイプなのに、よく友達になつたなつて思うよ。

「…………そういえば、気になつてたんですけど」

「んー?」

「ユウキさんもS A Oでは攻略組で、お兄ちゃん達と一緒に戦つてたんですよね?」

「うん。これでもボク結構強かつたんだよ? 攻略組の3剣士って言われるくらいには」

「3剣士…………? 他にも二人いたんですか?」

「あれ、キリトに聞いてないの?」

「聞いてない、と思います。お兄ちゃんあまりSAOの話はしないですから。アスナさんとか皆との思い出とかはたまに話してくれますけど……」

それでも、そんなに詳しく教えてくれてるわけじゃないから。  
あたしが忘れてるつてことじゃないなら、聞いたことないはず。

「ふーん。恥ずかしかったのかな？　まあ、いいや、教えてあげる」

まあ、いいやで無視されるお兄ちゃんの羞恥心。

「別に難しい話じゃなくて、ただ攻略組にいた3人のユニークスキル持ちを、纏めてそう呼んでたってだけなんだけどね」

「あ、じゃあ残りの二人つて」

「うん。二刀流のキリトと神聖剣のヒースクリフ。で、ボクの絶剣。3人揃つて3剣士」  
『黒の剣士』に『英雄』。さらには『3剣士』か。  
なるほど。

お兄ちゃん、この前ネットで自分の事調べてなんか悶えてたし。  
恥ずかしかったからあたしに教えてくれなかつたわけだ。

「そもそも3人とも強くてね、さらにユニークスキルまで持つてたから他のプレイヤーには『チートやチート。チーターや！』って言われそなくらいには強かつたんだよ」「へー、なるほど…………ん？　言われそう？　言われてはなかつたんですか？」

「言つて欲しかつたんだけど、キバオウさん結局言つてくれなかつたんだよねー。ちよつと残念。なぜかビーター云々は発生すらしなかつたし……生で聞きたかつたんだけどな。やつぱディアベルさん助けたからかな？ でもあそこで助けないのはアレだしなあ」

「へ、へー。よくわからないんですけど、残念でしたね……」

なにが残念なのか本当によくわからないけど。

「えつと、ちなみにその3剣士の中では誰が一番強かつたんですか？」

あたしの中で一番強い剣士といつたら、やつぱりお兄ちゃんだけ。

実際にはどうだつたんだろう？

「強さランキング？ それはやつぱり一番はヒースだね。ボクもキリトも勝率は2割つてどこだつたし。もうひどいんだよアレ、硬くて全然攻撃通んないし、そのくせ火力もそこそこあるしで初撃決着だと全然勝てなかつたんだよね。半減決着ならまだ勝率上がるんだけどさ」

へー。

お兄ちゃんでもダメだつたんだ。

あれ、でも確か

「なるほど…………でも、そういうえばヒースクリフさんつて」

「中身は茅場晶彦だね。ド畜生の」

「あ、えっと……」

そつか、そうだよね。

S A O に巻き込まれた人からしたら、そういう感想になるのが普通だよね。

お兄ちゃんが普通に話してくれてたから忘れてた。

「で、次がボクだね。対ヒース戦の勝率は同じくらいだつたけど、ボク対キリトなら6割ボクが勝つてたからね。つまりキリトは3剣士最弱の男だつたのだよ、はつはつは」

「お兄ちゃんが最弱……」

なんか、信じられないかも。

あたしの思う最強の剣士つていつたらやつぱりお兄ちゃんで。

同じ剣士相手に一対一で負けてる姿なんて想像もつかない。

なんかちよつとショックかも。

「…………まあ、今はボクのほうが弱いんだけどね」

「…………そう、なんですか？」

「うん。この2か月で負け越しちやつてさ。スランプなのか、さらに今は2-1連敗中。

ちよつと自信なくしちゃいそうだよ…………1年も違うゲームを渡り歩いてた弊害だね」

「そう、なんですね」

ユウキさんには悪いけど、ちょっと嬉しいかも。

やつぱり憧れの人は強い今までいてほしいからね。

「その、ユウキさん…………」

「ん？ なーに？」

「他にもSAOの事とか、お兄ちゃんのこと聞いても大丈夫ですか？」

「ふふつ、いいよいよ全然、どんどん聞いて、話してあげる…………そうだなあ、  
じゃあキリトが絶対に自分からは言つてないであろう恥ずかしい話をしてあげよう」

「えつ、お兄ちゃんにしたんですか？」

「ふふーん。それはね——」

この日、あたしは前よりもユウキさんを知る事が出来た。

その日はどこか特別な日ではなく、よくあるいつもの日常で。

たまには早くログインしてみるものだな、なんて思った。そんな一日。

それがお兄ちゃんがユウキさんの真実を知り、あたしたちに教えてくれる1週間前。

ユウキさんが亡くなる2週間前の日の事だつた。

# ユウキとアスナ

「汝和人は、この女明日奈を妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が一人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

「はい、誓います」

「汝明日奈は、この男和人を夫とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が一人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

今日、わたしは

「——はい、誓います」

最愛の人と、結婚します。

S A O —ソードアート・オンライン。

ゲームが遊びでなくなつた世界。

一人の天才が作り出した、もう一つの現実。仮想世界。  
1万人が囚われ、約4千人が亡くなつたデスゲーム。  
そこにユウキ、という一人のプレイヤーがいた。

明るく、元気で、強くて、いつも笑顔な女の子。

天真爛漫という言葉がそのまま当てはまるような存在。  
わたし——アスナにとつて、とても大切な友達。  
もう会うことのできない——友達だ。

「ねえねえ、君たちのどこまだ枠空いてる？　他のパーティーもう空いてないって言う  
んだよね」

「…………」

「えっと、君もアブレたのか？」

「うん。みんな、ちやちやっと組んじやつて空きないんだって」

「あーっと、俺は大丈夫だけど……君は、どうだ？」

「…………別に、なんでもいいわ」

この人、さつき名乗りり出てたベータテストスター。

このゲームの経験者つていうのなら本来なら引く手数多なんだろうけど。  
目の敵にしている人がすぐそばにいる状態で一緒に戦おうとする人は、いないわよね。

わたしにはどうでもいいことだけど。

「ほんとっ？ ありがとう、嬉しいよ！ ジやあまず自己紹介だね。さつきも聞いてたかもしれないけど、元ベータテスターのユウキだよ。ベータじやエンジニヨイ勢？ つていうのだったよ。ケーキの美味しいお店とか、キレイな景色とかならいっぱい知ってるから、知りたくなつたら聞いてね」

なんなの、この娘？ ふざけてるの？

ハツキリとそう言つてあげようかしら。あまりこういう娘は得意じゃないし。

——いや、いいわ。どうせ今回だけなんだから。少しの間我慢すればいいだけね。

「じゃあ次は俺だな。俺はキリト、片手剣士だ。MMOの経験はそこそこあるから、なん

かあつたら言つてくれ。多分教えられると思う」

「キリト…………？ キリトッ!? そつかそつか、そうだよね、1層の攻略会議だもんね。なるほどなるほど。なんだかんだボクつて運いいよねやつぱり——つてそうじやなくて、これからよろしくね。キリトさん!—」

「あ、ああ。よろしく、ユウキさん……えつと、俺にさん付けは別にしなくていいぞ」「ほんと!? じやあボクもいいよ付けなくて——それで、そっちのフードさんのお名前は?」

「…………」

「ねーねー、どうしたの? 名前はー? おなか痛い?」

「…………」

うるさい。

放つておいてほしいのがわからないのかしら。

「あー、そのうち判るだろうから教えるけど、パーティー組んだから視界の左端に名前が表示されてるはずだぞ」

「左端、端つこ…………?」

「…………あ」

「これだ。KiritoにYuuki、確かに自分のゲージの下に表示されている。

「おー、あるある。Asunaって書いてるね。つまりあなたの名前はアスナさんだね?  
…………ん？ あすな？ アスナ!? おお、アスナ！ アスナだ！ うわあ、ボク、何  
気に今すごい場面に立ち会ってる気がする」

「…………人の名前を無駄に連呼するの、止めてもらえるかしら」

「あ、そつか、そうだね、マナー違反だよね。失礼しました、ごめんなさい…………  
では改めて、ボクはユウキ！ よろしくねつ、アスナさん！」

「…………ええ」

不愛想で仏頂面だつたわたしと、常に明るく笑顔だつたユウキ。

その時限りの、ボス戦のみだと、そう思つて出来た即席のパーティー。

ボス戦が終わればすぐに離れていくと思つたのに、最後まで共に戦つた友達との出会い。

なぜユウキが最初から、無口で冷たくて不愛想なわたしに好意的な態度だつたのか。  
それは結局、今でもわからないままだつた。

「えー、本日はお忙しい中、私たちのためにお越しいただきまして、まことにありがとうございます。先ほどチャペルで――」

なんだか今日は、時間が経つのがすごく速く感じてしまう。

今までの人生で一番嬉しい日だからかな?

さつきまで教会で結婚式してたと思ったら、もう披露宴が始まってるんだもの。驚きよね。

なんだか体がふわふわしてる気がする。

こんなに動きづらくて重いドレスを着てるはずなのに。なんだか不思議。  
きっとわたしは今日という日を忘れる事はないだろう。

お母さんもお父さんも、お兄ちゃんも祝ってくれて。

リズやシリカちゃんに、他にもたくさんの友達や知り合いがお祝いに来てくれた。  
でも、そこには――

――そこには、わたしが一番来てほしかった友達はいない。

誰よりも元気で、明るくて、賑やかだったあの娘は、この世界にはもういない。

「で、今日はわたしをどこに連れていくつもりなの？」

「ふつふーん。もうちよつと行つたとこだよ」

「まつたく……これから、飯のつもりだつたのに……」

「ほつほーう？ そんなこと言つていいのかな？ きっとアスナはボクに感謝することになるよー？」

「感謝ねえ……」

絶品だからと連れてかれたカレー屋。

おいしいからと連れてかれた虫料理店。

キレイだからと連れてかれた湖。

びっくりするからと連れてかれた幽霊屋敷。

ユウキに連れられて素直に感謝できる確率は今のところ半々なんだけど、今回はどう

なのやら。

「じゃつじやーん！　ここでーす！」

「ここつて……」

主街区のど真ん中にあつた、ちつちやいお城みたいな石造りの建物。  
「ここが目的地……？」

というか、こんな建物前來た時にあつたつけ？

主街区だから確實に一度は來たはずなのに、全然見覚えがないんだけど。

「……今日は何屋さんなの？」

「アスナが大喜びすること間違いなしのお店だよ」

「…………武器屋さん？」

「ふつふつふ。なんとこはお風呂屋さんでーす！」

「詳しく聞かせなさい」

「わお、反応はやい。ま、教えるより入つた方が早いよ。入ろ」

「ちよつ、ユウキッ！　待ちなさいって！」

なんでもこの店は、ここ第53層主街区の街で受けられるクエストの報酬なんだそう  
だ。

正確には報酬ではなく、クエストの結果NPCが運営するお店が出来た、が正解らし

いが。

まあ、過程は正直どうでもいい。

大事なのは大きいお風呂に入れるということ。

この仮想空間では水の表現はあまり上手く再現されていないが、それでも大きいお風呂というのはそれだけで心が弾むものだ。

「——で、そこからは各地の村対主街区つて形になっちゃつたらしく、プレイヤーがNPC達の間を取り持つていくと、実は全てを操つていた黒幕が存在してたことがわかつてね。それで」

「はいはい。つまりは色々あつてこの銭湯が出来たつてことでしょ」

「ぶうー。ここからが面白いのに……」

「だつて別に、ユウキが参加してたわけじやないんじよ？ いつも迷宮で会つてたわけだし。というか、よくそんなに詳細を知つてるわね？」

「内容はアルゴに教えてもらつたんだよ。面白くつて色々聞いちゃつた」

「アルゴつてことはお金かかつたんじやないの？」

「だつて、ここからつてどこで追加料金取るんだもん。おかげでお財布が軽くなつ

ちゃつた」

「……最近よく迷宮で見かけると思つたら」

「…………えへへ」

「まつたく……」

ユウキはソロだから、どのくらいの頻度で迷宮に籠るのかは自由だけど、あんまり無茶すると死んでしまうということは十分にあり得る。

ソロは危険だからと、ギルドに誘つても断るし。

団長もユウキなら構わないって折角言つてくれるのに。

わたしも、友達と一緒にいられるのは安心できるから、ちょっと期待してたのに……  
「あはは……まあボクのことはいいんだよ———それで? アスナはなにか進展  
あつたの?」

「な、なんのことかしら……?」

「またまたあー、黒いアイツのことだよ。カサカサ動いてこつちの攻撃躲してバツて突  
撃してくるアレのこと」と

「…………はあ。わたし、そんなにわかりやすかつた?」

わたししが自覚したの、結構最近なんだけど。

「んー、ボクが知つてるつてのもあるけど、前と目つきが違うのは見てわかつたよ」

「そつか……」

「目つきが違う、か。

「その、キリト君にも実はバレてたりとか、してたりする？」

「いやそれは無いね。うん、絶対無い」

「……そ、そう。それはそれでちょっと残念かも……」

ホツとするような、悔しいような……

なんとも言えない気分ね。

「まあ、そこは、ボクが手伝うから安心して任せなよアスナ。攻略組のキューピッドの名に恥じない働きをしてあげるから、期待してなよ」

多分、このゲームの中で最もキリト君と一緒にいる時間が長いであろうユウキに手伝つて貰えるなら、確かに心強い、けど……

「そう、ね……ユウキに手伝つて貰おうかしら……」

いいんだろうか？

わたしがキリト君と付き合えたなら、ユウキはキリト君とは――

「大船に乗つたつもりでいいよ。ということで、まずは今度のお祭りでデートと行こう！」

「いつ、いきなりデート!?」

いや、今は考えないでおこう。

わたしはユウキの友達で、ユウキはわたしの友達だ。

話す機会はいくらでもあるんだから。

「よつ、ちゃんと楽しんでる？ アスナ」

「あ、リズ——それはもちろん。さっきの余興も笑い過ぎておなか痛くなっちゃったわよ」

「ならよかつたわ。わざわざシノンのこと引き込んだかいがあつたわね」

「つていうかなんなの、あのユニット名。『M O R E D E B A N』つて、いつたいなんの出番を求めてるのよ」

「さあ？ あたしも詳しくは知らないわ」

「リズが考えたんじゃないの？」

「ということはシリカちゃん？ それとも他の二人が？」

「あれを最初に言いだしたのはユウキよ。あたしとシリカ見ていきなりそう言つてきたの。失礼しちやうわよね、ほんと」

「あはは、ユウキなら仕方ないのかな。いつもよくわからぬこと言つてたし  
よくなにか叫んでたりしたけど、一番多かつたのは『原作がー！』だつたかしら。

「ま、そうかもね」

「ふふつ、でも、おもしろかつたよ。4人のショートコント劇場  
「ま、練習はずつとしてたからね——で、どうしたの？」

「えつと……どうしたつて、なにが……？」

「そんなの決まつてるでしょ。なんでちよつと寂しそうな顔してたのかつて話よ。こん  
なおめでたい日にどうしたのよ」

わたしが、寂しそう……？

「……わたし、そんな顔してた？」

「してたわよ。アスナ、さつきからたまにどつか遠く見てるんだもん」

「そう……だつたんだ……」

気づかなかつた。もう振り切れたと思つてたのに。

ユウキの事で引きずるのはやめたはずだつたのに……

「で、どうしたの？」

「ううん……ただ、ユウキにも来て欲しかつたなつて、思つてただけ」

「……そうね。あいつがいたらもつと賑やかで、騒がしくなつてたでしようしね。どうせ自分の知つてるキリトとアスナの話をひたすら周りに話し続けるに決まつてゐるわ」  
わたしはキリト君と付き合つてから、なぜかユウキがわたしとキリト君の惚氣話を周りに話して、それを聞いた攻略組のみんながキリト君を追いかけまわしてた。

それを見てユウキは笑つて、わたしも、心配しながらちよつと笑つてた。  
そんな、いつかの日常を思い出す。

「ふふつ、ユウキならやりそうね」

「そんで最後にはあんた達二人に向かつて、ニコニコ笑いながら『おめでとう！』つてうるさいぐらいに大声で言うに決まつてゐるんだから。S A Oでもそうだつたでしょ？」  
「ふふつ、そうね。ユウキはそんな娘だつた」

「……ユウキ」

「なーにー?」

「……ありがとう」

「へ? なにが?」

「昨日のボス戦あなたが庇つてくれなかつたら、わたしは死んでたかもしかつた…………だから、ちゃんとありがとうつて伝えたかつたの」

慢心。その言葉が一番相応しいだろう。

攻略は順調に進んでいて、最近は死者も出していない。

自分は強くなつたという驕り。

ユウキが咄嗟に動いてくれなかつたら、きっとわたしは死んでいた。

本当に自分が情けない。

「もう、そんなの全然いいのに。友達助けるのなんて当たり前でしょ?」

きつとユウキは本気でそう言つているのだろう。

過去に何度も死が迫つたプレイヤーを救つてきた事を考えれば、本心だとわかる。

助けるのは当たり前。

失敗すれば自身も死んでしまうかもしない状況で、果たしてそれを為すことができ

る人は、一体どれだけいるのだろうか？

ユウキの友人であるわたしは、それができるのだろうか。

「……いいえ、ユウキがそう思つてたとしても言わせて——本当にありがとう」

「そつか……ま、アスナがそこまで言うなら、お礼にごはんご馳走になつてあげてもいいけど？ けどけど？」

「もう……わかつたわよ。ごはん作つてあげる。なに食べたいの？」

「ほんとつ!? じゃあボク、カレー食べたい！ 甘口でつ！」

「はいはい。じゃあこの後買い出し付き合つてよね」

「うん！ アスナ大好きっ！」

「きやつ！ もうつ、いきなり抱き着かないでつて、いつも言つてるでしょ」

「えへへ、ごめんなさいー」

誰もが躊躇うことを平然とできるユウキに、わたしは憧れていたんだ。

彼女のようにになりたいと、心の底で思つていた。

いつか彼女が辛い時に手を差し伸べられるような存在になりたいと、思つていたんだ。

「お、やつぱり似合うなそのドレス。俺の目に狂いはなかつた」  
「はいはい。そのセンスを普段から活かしてよね。ほつとくといつも真っ黒なんだから」

「それはゲームの中の話だろ。現実でも外出する時は頑張つてるだろ……」

「ふふつ、そうね。頑張つてるものねキリト君も」

衣装替え。着替えたのはキリト君が選んだ真っ白なドレス。

他にも似たものは多かつたけど、どうしてもこれがいいと力説されたもの。  
このドレスの何が琴線に触れたのやら。

「——ちよつとは落ち着いたか?」

「……うん。リズのおかげでだいぶ」

「そつか。なら良かつた」

キリト君も気付いてたんだ。わたしのこと。  
まあ当然か、ずっと一緒にいたんだもの。

「キリト君がすぐ教えてくれればよかつたと思うんだけど?」

「あはは、ごめんごめん。なるべく、次からはそうするよ」

「もう……わざわざリズに頼んだりして」

ちようどキリト君が席を外しているタイミングで都合よく来るなんて、おかしいもの。

「……俺だとちょっと気まずいかなって思つたからさ」

「……ユウキの事考へてるつて、わかつたんだ」

「……ああ。というか多分、みんなわかつてたと思うぜ」

「え?」

「無意識だらうけど、ソレ、ずっと触つてたからな」

「あつ……」

首にかけられた小さな十字架。

紫色のロザリオ。

わたしの物になつたその日から、いつもわたしはこのロザリオをかけている。

なぜならこれは――

――ユウキがくれた唯一の贈り物なのだから。

これが贈られたのは、ユウキが亡くなつて一週間は過ぎた後。わたしが初めてユウキとリアルで出会つた日。いつもの笑顔のまま、棺の中で眠つているユウキ——紺野木綿季と初めて会つたときのこと。

SAOから脱出し、ALOから解放されて、わたしの戦いは终わり、ようやく現実への帰還を果たすことができた。

そしてそこにはキリト君がいて、リズやシリカちゃんがいて、生き残つた人達も皆いた。

だけど——ユウキだけは、どこにもいなかつた。

一緒に笑いあつた友達として。

肩を並べて戦つた仲間として。

さよならも言わずに別れた彼女に会いたかつた。

もう一度、彼女と話がしたかつた。

再会は唐突だつた。

気が付いたら隣にはユウキがいた。以前とは違う顔のくせに、まるで同じように笑いながら。

SAOから帰ってきてからは違うゲームで遊んでいて、気が合った人たちとギルドまで作つたと言つていた。

わたしがどれだけ誘つてもギルドには入らなかつたくせに……

再会してからの3か月はとても充実していた。

以前のように、命を懸けた戦いの合間の気分転換なんかとは違う、ただ楽しむための時間。

前みたいにキリト君とよく遊んで、喧嘩して、また遊んでいた。

ユウキがキリト君の事を好きじゃないのは知つていたけど、なんとも言えない気分になつたのはしようがないと思う。

そうして一緒に笑つて、一緒に飛んで、一緒に戦つた3か月。

——ユウキと一緒に過ごした、最後の3か月だつた。

あつという間だつた。

彼女の身体のことを聞いてから、彼女が永遠の眠りに就くまでは。

わけがわからなかつた。

嘘だと思つた。

覚悟なんて出来てなかつた。

心が理解を拒んでいた。

なにも――聞きたくなんてなかつた。

告別式には行きたくなかった。

行つてしまえば、ユウキが死んだことを認めてしまつたようで嫌だつたから。

だから、キリト君が家に来てわたしを引っぱつていかなければ、わたしはユウキ――

紺野木綿季と会うことはなかつただろう。

連れていかれたそこは、大勢の人がいた。

ALOで知り合つた人が大半だつたが、その他にも多かつた。

――SAOでの攻略組のメンバーだ。

SAO帰還者が集められた学校にも攻略組に参加していた人はいたが、ごく少数。

攻略組のほとんどは社会人で、現実に帰つてから再会した人はほとんどいなかつた。

だから驚いた。そこには攻略組として最前線で戦つていた人たちがほぼ全員いたのだから。

俯いている人がいた。

空を仰いでる人がいた。

泣いてる人がいた。

久しぶりの再会に喜び合うでもなく、ただみんな――悲しんでいた。

棺の中でユウキは眠つていた。

痩せ細つた体で、頬を緩めたまま静かに眠っていた。

ただ幸せそうに、今にも起きてきて声を掛けてきそうな顔で。わたしが未だ現実を認められないでいると、倉橋というユウキの主治医であつた人に会つた。

彼は小さな箱をわたしに渡してきた。

『生前に、結城明日奈さんに渡してほしいと頼まれていたものです』  
『感謝の気持ちを贈りたいと、彼女はそう言つていました』

中にはネットレスが入つていた。

小さな十字架の、紫色のロザリオが。

おはようと言つて欲しかつた。

名前を呼んで欲しかつた。

手を握りたかつた。

抱きしめたかつた。

いつかのように一緒に笑い合いたかつた。

いつものように一緒に遊びたかつた。

でも――もうそんなことは出来ないと、理解してしまつた。

もう、駄目だつた。

抑えることはできなかつた。

ユウキが死んだと聞いてから一度も流れなかつた涙があふれてきた。

自分が自分でないよう、体が言うことを聞いてくれなかつた。

わたしはひたすら、キリト君の胸で泣き叫ぶことしかできなかつた。

その日、わたしは大切な友達を失つた。

「もう、振り切れたと思つてたんだけどね……」

あれからもう数年経つた。

心の傷も癒えたと思つていたのに。

「……別に無理にそうする必要はないだろ。アスナの中ではそれだけ大きいヤツだつたつて事なんだから」

「ふふっ、その言い方だと『まるで太つてるみたいに言うな!』つてユウキに怒られるよ

?」

「俺の場合はいいんだよ。普段からユウキにはアレコレ言われまくつてるんだから、たまには言い返してやつても」

「そうだね。キリト君たちはそだつたもんね」

ユウキは、自分の最後の時間をキリト君と過ごしたらしい。

キリト君とユウキは特別だった。

仲良く喧嘩するという言葉が最も似合う相手。

なにも言葉を発さなくても、相手がどうしたいのかを理解している。

二人はよく一緒に、どれだけ仲が良くて恋なんて余計なものはそこに無く。あつたのはどこまでも深い友情だけだった。

わたしがユウキの死を受け入れて、落ち着いてからその話を聞いて感じたのは、ちよつとした嫉妬。それもキリト君に対して。

気づいた時には自分でも驚いた。まさかキリト君にそんな事を感じるなんて思つてもいなかつたから。

わたしはユウキの死を最初に受け入れられなかつたのは、彼女に何も返してなかつたからだ。

元気を、楽しさを、未来を思う気持ちを。

命を救つてくれた恩を。

たくさんものをユウキはくれたけど、わたしはなにも返せなかつた。

せめて、彼女の苦しい時に大丈夫だと、そう声を掛けてあげたかつたんだ。せめて、彼女の言葉を聞いたかつた。別れをちゃんとしたかつたんだ。

だから彼女の最期に立ち会えたキリト君にちよつとした嫉妬心が芽生えてしまつた

のだろう。

おそらく、そのどちらも成したキリト君に。

「——なんて、思つちやつてたの。ここまでは確か前にもちよつと話したよね……でも、それは以前までの話。今はもうそんな風には考えてないよ…………ただ、ちよつと残念なだけ。やつぱり最後になにかわたしに伝えてほしかつただけ。伝言くらいキリト君に残してくれればよかつたのに、そうしたらわたしも、もう少し素直にユウキのこと受け入れられたかもしれないのについて。ユウキつてひどいわよね——

「やばいまずいやばいまずいどうしよう」

「ちよつ、ちよつと！ キリト君！？」

なに!? どうしたの!?

わたしそんなに震えるほど怖かつた!?

そんなに羨ましそうにしてたつ!?

「ちくしょう。なんで俺はあるタイミングで録画を切つたんだ。おかげで再生の条件の話が俺との会話になつちまつたから、なんで黙つてたんだって言われた場合『口約束でそうなりました』って言うことしかできない。証拠も無しに説得するしか方法がない。なにか方法は…………無理だ。終わった、諦めよう」

「えっと、キリト君？」

大丈夫？

「いや、うん……なんでもないんだ、大丈夫。気にしないでくれ……」

本当に大丈夫？ さつき小さい声でなにかぶつぶつ言つてたけど。  
なんかすごい憔悴した顔つきだけど。

「大丈夫ならいいけど……無理しないでね？」

「ああ、うん……」

本当に大丈夫なのかな？ 披露宴まだ続くんだけど。

『では続いては、友人代表の方にスピーチをお願いしたいと思います』

「あつ、ほらキリト君、しつかりしてよ。次クライインさんだよ？」

「…………めん、アスナ」

「キリト君…………？」

なんで唐突に謝るの？

「友人代表をクライインに頼んだって言つたけど、あれ嘘なんだ」

「…………嘘？」

クライインさんにスピーチを頼んだっていうのが、嘘？

「ああ。本当は違うやつに頼んだんだけど、秘密にしといた方がいいかなって思つて」

「なら、一体誰に頼んだの？」

「それは……見たらわかるよ。準備が出来たみたいだ」

いつの間にか映像用のスクリーンが降りている。

今のタイミングでなにかの動画を再生するなんて予定はなかつたはずなのに。  
さつき言つてたスピーチをお願いした人が関係してるので？

「キリト君、これは――」

『すうーはあー、よし』

「この、声は――」

『――和人君、明日奈さん。ご結婚おめでとうござります』

嘘……なんで……

『私は二人の出会いから結ばれるまで――』

「キリト君っ！」

なんで、なんでユウキが

「……まあ、そうなるよな」

「なんで、だつて、こんな……」

「最後の言葉」

「え……？」

「さつき言つたろ？ なにか言つてほしかつたつて。俺がユウキから渡された皆へのメッセージなんだ——だから、今は聞いてあげてくれ」

ユウキからの、最後のメッセージ。

『——つまり何が言いたいかと言うとですね。二人が結ばれたのは私のおかげなので、二人は私に感謝しなくちゃいけません。これでもかつてくらい感謝しないといけないのです』

感謝なんて、ずっとしてたよ。

応援してくれて、一緒に考えててくれて、祝つてくれて。

本当に嬉しくて、何度もありがとうって言つても言い足りなくて。

『なので二人は私の言うことを聞かなくちゃいけません。絶対厳守だね』

わたしは攻略組のアイドルなんて周りからチヤホヤされていたけれど、ただそれだけ。

輝いて見えるなんて言う人もいたけど、それは違う。

もしそう見えたならわたしを輝かせていたのはユウキだ。

攻略組で常に周りを希望という光で照らし続けていたのは、ユウキなんだ。

未来が見えなくなつて諦めてしまった人に、明日の幸せを語つて立ち直らせたのは彼

女で。

仲間が死んで前を向いていられない人の背を優しく押してあげたのも彼女だ。だから皆はあの日、あの場所に、お別れを告げに集まつたんだよ。

『私は友達が大好きです。友達が泣いてたら泣かせた相手をぶん殴つてやると決めてます。そして二人は私の大事な大事な友達です』

憧れたんだ。

みんなに好かれ、どこまでも自由に生きていたユウキに。

あの世界で絶望せず、諦めず、常に明日を追い求めてたユウキを。

明日が楽しみだと、笑顔で語るユウキに憧れていたんだ。

『——だから』

頼つてほしかつた。

願つてほしかつた。

大丈夫だよつて、あなたが言つてくれたように。

わたしもあなたにそう言いたかつた。

怖いつて言つてほしかつた。

あなたの不安を、恐怖を、一緒に抱えたかつた。

あなたの味方になりたかつた。

あなたの友達として、力になりたかった。

でも、それはもう叶わなくて、どうしようもなくて。

『——だから、二人は幸せにならないといけません』

なのに、今さら、こんな

『ボクは友達思いなので友達を殴りたくありません。なので二人はお互いを一生泣かせてはいけません。ボクの為にね』

づるい。

こんなのはづるいよ。

『キリトもアスナもお互い愛が重いからなんか今は上手くいつてるけど、それに胡坐をかいて相手の事を疎かにというか、縛り付け過ぎちゃだめだからね。あ、ちなみに子供産む時とかそういう感極まつた時は泣いてもいいからね。嬉し泣きはオツケー。悲し泣きはNGだからね。そこは勘違いしないでよ』

いつも、元気づけられて、味方でいてくれたから、その恩を返したかった。

でも、あなたは何も言わずに別れてしまつて、会うことも出来なくて。

やつと再会できたと思つたら、どこかおかしくて。

力になりたくても、何も言つてはくれなくて。

そして……

そして、キリト君から真実を教えてもらつて。

あなたはそのすぐ後に、手の届かない場所へ行つてしまつた。

『さて、あとなに喋つた方がいいかな？ なんか結構今のでボクはスッキリしたけど、多分これだけじゃあ短いよね。きっと二人のエピソードとかがいいよね。二人のとなるとそうだなあ、キリトが爆笑ギャグとか言つてやつた激寒ギャグ5連発の話とかしようか？』

恩を返したかつた。

感謝を伝えたかつた。

もつとたくさんのがどうを届けたかつた。

わたしはユウキの友達になれて良かつたつて言いたかつた。

『あれは確か、S A O の 6 6 、 7 層くらいだつたかな。ボスの L A 取つた人は攻略組の皆の前でギャグをするつていうのが丁度流行つてた時期があつてね。キリトがいつものように L A 搔つ攫つていつて「考えて来るから時間をくれ」つて言い出して、そしたら——つてキリトどうしたの？ 大丈夫？』

『なにがだよ……』

『なにがつて、泣いてるよキリト。おなか痛い？ このすごい微妙なバフかかるグミ食べる？ 10 秒間与ダメージプラス 5 とかいう使いどころがよくわからないやつだけ

ど、さらにラーメン味とか言つてすごいけど。というか今ボク友達泣いたら殴るつて言つたばかりなんだけど、こういう時は誰殴ればいいの？ キリト？』

キリト君とユウキがあーだこーだ言い合つて、わたしがいい加減にしなさいつて怒つて、みんなが周りで笑つて、そんないつもの光景がとても楽しくて。

そんな日がずっと続くと思つていて。

『なんで俺が殴られるんだよ。俺を泣かしたのはユウキだ。こういう時はどうすんだ？』

『えっ、ボクう？ ジやあ、仕方ないからこの微妙なグミはボクが食べよう。これで殴られたのと同等ということにしよう。そうしよう』

『相変わらず、自由で、自分勝手で……楽しそうで……』

いつもの、楽しそうな、安心できる笑顔で。

『つていうかキリトそれまだ撮影中でしょ。どうするのさこのグダグダな感じ。ボク撮り直しつつ嫌いなんだけど』

『本当におまえは——なら、このまま流すさ。それでいいだろ』

『マジ!? イエーイ！ キリト、アスナみつてるー？ リズ、シリカ、リーファ良い男見つかつたかーい。ユイちゃんボクみたいな良い女になるんだよ。エギル奥さん美人つてほんと？ 一度くらい写真見せてくれてもいいじゃんかー！ クライインは、えー、相

い』

変わらず一人でかわいそうですね同情します頑張つてください応援してます5分くら

見てる。見てるよ。ちゃんと見てるよ。

みんなここで、あなたを見てるよ。

『——じゃあ、そろそろ切るぞ』

『ちよ、あとちょっとだけ！　えっと、ボク幸せだつたよ！　辛くて苦しかったけど、もつとたくさん楽しかつたよ！　みんないたからボクほんとに楽しかつたよ！　だから、えつと、つまり、みんなボクの友達なんだから幸せになるんだよ！　もし誰かに泣かされたらボクに言うんだよ！　絶対に相手ぶん殴りに行つてあげるから！　だから、みんな元氣でね。ボクとの約束だからね！　絶対だからね!!』

わたしも幸せだつたよ。ユウキといられて楽しかつたよ。

ユウキがいたから、今のわたし達がここにいるんだよ。

ユウキがいたから、今わたしの隣には、大好きな人がいてくれてるんだよ。

『守つてないやつがいたら俺が守らせるよ。約束だ』

『お、言つたなキリト。ボクとの約束は破れないんだからね』

『——ではでは改めまして、桐ヶ谷和人君、結城明日奈さんの友人代表、紺野木綿季で

した。二人の道に幸福が訪れる事を願っています。約束破つたら末代まで祟っちゃうからね』

「あははは、あー、ごめん……」  
「……なんで見させてくれなかつたの？」

「遺言だつたんだ。これ撮り終わつた後に披露宴以外での再生禁止つて言いやがつてさ。ユウキとの約束は破れないから見せれなかつたんだ」

「……なら、教えてくれるだけでも良かつたんじやないの？」

ユウキがなにかを伝えようとしたことだけでも教えてくれれば良かつたのに……  
「アスナはそれまで我慢できそーか？ 僕なら多分こつそり見ようとするけど」

「…………ぶうー」

「……それ、何の真似？」

「ユウキの真似」

「ふつ、そうだな、よくやつてた」  
笑い事じゃないわよ。本当に。

「……ユウキ、目線が安定してなかつたね」

「……ああ」

「……後半はずつと、立つてゐるのも辛うだつた」

「力が自分の意志に反して勝手に抜けていつてるように見えたよ。それでも、なんとか氣合で最後まで立つてたみたいだけどな」

「…………ずっと、楽しそうに、しゃべつ…………てた…………」

「……ああ、ユウキはアスナの結婚式に行きたいつて、スピーチやりたいつて言つてたからな。見てるみんなの反応考えて楽しかつたんだろうな、本当に」

「……今、披露宴中なのに、メイク落ちちゃうじやない…………」

「……嬉し泣きはオツケーらしいぜ」

「ばかあ…………」

本当に、二人揃うとバカになるんだから。

その後の披露宴はそれはもうひどかった。  
主にS A O組が。

リズもシリカちゃんもずっと泣いてるし、エギルさんは嬉しそうに泣きながらお酒飲みまくるし、クラインさんは声上げて泣き出すし。わたしもずっとワンワン泣いてるし。感受性強い人達も釣られて泣くものだから、本当にもうひどい状態で。結婚披露宴で親への感謝の手紙とかでなく、友人のスピーチで一番泣いたのはわたし達くらいでしょうね。きっと。

「ばーか……キリト君のばーか、ユウキのばーか……」

「あはは、ごめんって」

「もう……こんな披露宴初めてだつてスタッフの人言つてたよ」

「あー、記憶に残るものになつたもんな」

「恥ずかしいって意味でね」

ああもう、あんなに人前で泣いたのなんて、それこそユウキの告別式以来じゃないから。

「——実はもう一個あるんだ」

「もう一個……？ 今度はなに？」

「ユウキと約束したんだ」

「約束……？」

「ああ、あの映像を披露宴で流すのとは別に、もう一つ」

「どんな約束したの？」

「——また皆で遊ぼうぜって」

「——それ、は」

「だから、おとなしく待つてろって言つたんだ。お土産も頼まれたしな」

「……なら、たくさんいろんなもの持つて行つてあげないとね」

「だな。じやないとどんな文句付けられるかわかつたもんじやない」

「そうねつ……本当に、楽しみ、ね……」

「…………嬉し泣きは、オツケーらしいぜ」

「…………ばか…………」

「…………俺は君を、アスナを幸せにする。世界で一番の幸せ者にしてみせる。だから、アスナは俺を幸せにしてくれ。どつかのバカが殴りに来ないよう、祟られないようにして  
くれ」

「…………つもう、ばかあ…………」

「えー、そうか？ 結構いい事言つた気がしたんだけど」

「だから——いつか一緒に、ユウキに会いに行こう」  
「うん……」

拝啓、紺野木綿季様。

わたしは今日、大好きな人と結婚しました。

これからわたしは幸せになります。

あなたが言つた約束を守れるように、元気に、楽しく生きていきます。

辛いこともあると思います。

苦しい時もあると思います。

でも、最後には幸せだつたと言えるように生きていきます。

あなたがそうしたように、わたしもそうして生きていきます。

そして、いつかわたし達がそつちに行つたときは、また一緒に遊びましょう。

約束だよ。

結城明日奈より。

# いーえつくす

太陽が輝き、青空が広がっている。

風が吹き、鳥が鳴いている。

眼下に見える街が、とても小さく見える。

この展望台から見える景色はいつも変わらない。

ここに変化はない。

ここに進化はない。

なのにボクはまだ、ここで街を眺めている。

「ボクはなんで、まだここにいるんだろう？」

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。

何度も何度も、同じことを繰り返す。

なぜボクは、こんなことをしているんだろう？

なぜボクは、未だこの街にいるんだろう？

「……ボクは一体、なにがしたかつたんだろうね」

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。いつもと一緒。

目的もわからないのに、ひたすら同じことを繰り返す。

「……ボクも『次』に行こうかな」

思つても無いことを口にしてみる。こういうのは口に出してみたら、本当にそういう気持ちが湧いてくるらしいと、なんかの本で読んだ気がする。多分。

もう、あんまり『前』のことは覚えていない。

なのに、ボクはまだこの街にいる。

「ボクも姉ちゃんについていけばよかつたのに……」

なんで、一緒に行かなかつたんだつけ？

もう、その理由も曇気だ。

そうしてまた、一日が終わる。

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。

日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。  
日が昇り、展望台に行き、街を眺めて、日が沈む頃に帰る。  
いつもと一緒。

同じことの繰り返――

「——んにちは、お嬢さん」

「——え？」

「——で、なにをしていらっしゃるんですか？」

今日は、いつもとは違うらしい。

後ろを振り向く。

そこには一人のお爺さんがいた。

白い髪と白い髭の生えた元気そうなお爺さん。

すぐに『次』に行きそうな感じの、あまり、この街には似合わない人だ。

「——で、お嬢さんはなにをしていらっしゃるんですか？」

さつきと、同じことを尋ねられた。

「……別に、ただ街を眺めてただけだよ」

「ほう。街を」

「そ。それだけ」

「楽しいのですか？」

「まさか。ボク同じところでずっと同じ景色見るの嫌いだもん」

ずっとベッドの上で窓の外を見るのは嫌いだつた。だから本に逃げたんだ。

文字の中なら、ボクはどこにだつて行けたから。

「ふむ……では、なぜ街を眺めていたのですか？」

「さあ？ なんでだろうね」

「自分で理由がわからないのですか？」

「うん。それはもう置いていつちやつたみたい」

「……置いていった。何をですか？」

不思議な事を聞くお爺さんだな。そんなこと、この街にいたら皆知ってるのに。

「――思いを、だよ」

この街は『次』に行く前の休憩所だ。

『前』が終わつた人がこの街にやつてくる。

この街には全部がある。

望んだことを全て叶えることができる街。それがここ。

金が欲しいと思えば手に入る。

ただ暴力を振るつて回りたいと願えばそれが叶う。

女が欲しいと言えば目の前にいる。

ここはなんでも叶う場所。

全てがある街。

そうして『前』の思いを置いていつて『次』に行く。それが決まり。まあ、正確には別に置いてかなくともいいらしいけど。

どつちにしても『次』に行く時に全部なくなるらしいし。

「——思い残しつて言うでしょ？ この街はそういうのを残さずに置いてく為にあるんだよ」

「なるほど……」

「お爺さんも好きな事したら？ ここならなんでもできるよ。若返つて酒池肉林つてのも出来るらしいし」

「……ならば、『次』に行かない人もいるんじやないですか？ この街には全てがあるというのなら」

「……ほんとにお爺さんはなんも知らないんだね。この街に来た時に全員言われてるはずなんだけど」

「あー、ちょっと気になることがあって、聞き流しまして」

変わったお爺さんだな。

なぜかちよつと懐かしい気がする。

「まあ、いいけど——で、『次』に行かない人がいるんじやないかって？　いないよそんな人は」

「なぜですか？」

「思いを置いていくつてのはね、自分の意思でやることじやないんだよ。勝手に置いていつちやうんだよ。この街にいる限り、勝手に思いが自分から離れて行くようになつてるんだ」

そう。ここは思いを置いていく街。

速やかに『次』へと進む為の休憩所。

『前』から進む為の場所。

なにかをしたいという思いも。

もつと欲しいという思いも。

もつともつと、さらに求めてるその思いも、そのうち置いていかれる。

この街にいる理由が無くなつていく。

無くなつっていく。『前』のことは全て、ここで失つていくんだ。

「——だから皆、この街からいなくなる」

『前』を全て失う、ですか……」

「うん。だから全部置いて行っちゃう前に『次』に行く人もいるんだよ。忘れないまま『次』に行こうってね」

「思いを持ったまま『次』に行けるんですか？」

「まさか、最初に言つたでしょ。『次』に行つた時に全部消えるんだよ。自分も思いも、全部ね。だからそれを選ぶ人はどんどん『前』が無くなっていくのが恐ろしいと感じる人。『前』の思いを持ったまま消えたい人。どつちにしても結果は変わらないんだけど、結構多いんだよ」

「ここに『前』の思いを全部置いていつて『次』で消えるか。

『前』の思いを持つたまま、『次』で全部消えるか。

この街にはその二択しかないんだ。

「では、あなたはどちらなんですか？」

「え……？」

「生憎ですが私には、あなたがそのどちらにも見えません。この街には全てがあるのに、あなたはそれを求めているようには見えない。そのくせ『次』に行こうとしているわけでもない――――あなたはなぜこの街にいるのですか？」

「ボクがここにいるのは……」

ボクがここにいる理由、それは、なんだつたつけ？

わからない。  
わからない。

わからぬ。

それはボクがもう置いてしまったもの。

ボクが手放してしまったもの。

無くしたはず、それなのに未だボクがここにいる理由。

それは、なんだつたんだろう?

「ボクの……理由は……」

でも、いつか誰かがそれを教えてくれたはずだ。

ボクが忘れたその理由を教えてくれたんだ。

アレは、確か―――そうだ。姉ちやんだ。

ボクの姉ちやんが教えてくれたんだ。

『私、「次」に行こうと思うの』

『え、姉ちやん……?』

『ごめんね。いきなり勝手な事言つて。でも、決めたんだ』

『え、いや、なんで』

『……この街で色んな事したね。パパとママと私達姉妹の家族4人で遊園地に行つて、

水族館に行つて、プールに行つて。「前」できなかつたことを、家族でたくさんやつたね  
『うん……楽しかつたよ……』

『でも、この樂しかつたつて思いもそのうち置いていかれる。だからその前に、私は「次」  
に行こうつて思つたの』

『……そつか』

『うん、そうなんだ……ごめんね』

『なんで姉ちゃんが謝るのさ！ ボクが変なだけなんだよ!? なにも無いのにここに残  
りたいつて思つてるボクが変なだけなんだよ!?』

『ううん、変じやないよ。それはきっと正しい事なんだから』

『姉ちゃん……』

『あなたが置いていつても忘れていないその理由、それはとてもキレイなものなんだか  
ら』

『キレイな、もの……？』

『そう。あなたがここにいる理由、それはね』

『それは……？』

』

『そうだ。ボクがここにいる理由。

それは――

「――約束だから」

「約束……？」

「そう、約束。待つてるつて約束したんだボクは」

「待つてる、ですか」

「そう……ただ、なにを待つてゐるのか憶えてないから、困っちゃうよね」

「それでも、待つのですか？」

「うん。待つよ」

「なにを待つてゐるのかも、わからないのに？」

「うん。待つて約束したから」

「なるほど」

お爺さんに背を向けて、街を見渡す。

そうだ。ボクはここで待つてたんだ。

街を一望できるこの場所で、いざれ来る『なにか』をすぐに見つけられるように。

毎日毎日、日が昇つて沈むまで、ここで探していたんだ。

ボクは憶えていなかつたけど、ボクの心は憶えてた。

無意識だつたけど、約束を守ろうとしていたんだ。

やつと、思い出せた。

ボクがここにいる理由。

「では、お嬢さんはその『なにか』が来るまで暇ということですか？」

「暇つて……いや、間違つてないけどさ。まあ、確かに『なにか』が来るまで待ちぼうけなわけだから暇だとは思うけど、それがどうかした？」

「というか、地味にそのお嬢さん呼びされると、背筋がぞわつてするから止めてほしいんだけど。

「なるほどなるほど、暇ですか。それは良かつた。それなら——」

人が暇で良かつたつて言い方、ボクどうかと思うけ——

「——なら、一緒にゲームしようぜ」

〔〕

なぜか、言葉が出てこなかつた。

「暇なんだろう？ 一緒にゲームでもしようぜ」

ゆっくりと後ろを振り向く。

そこにいたのはさつきまでの白いお爺さんじゃなくて、もつと若い、十代後半くらいの男の子が立っていた。

「これでも、俺『前』は色々なゲームに関わっててさ。おもしろいゲームいつぱい知ってるんだ」

ボクよりも、多分少し年上で、線が細くて、ちょっと女の子っぽくも見える。

「口出しさせてもらつたゲームも多くてさ。結構世間の評価も良かつたんだ」

でも目は力強くて、自分の意思を強く伝えていて。

そんな男の子が、そこにいた。

「俺以外にも何人かいてさ、まだ全員はいないけど、きっと楽しいさ」

憶えてない。

わからない。

見覚えなんてないはずなのに、それなのに。

胸が張り裂けてしまいそうなほど嬉しさが、どんどん心の奥から溢れてくる。

ああ、不思議だ。

不思議で不思議でたまらない。

なんでボクは今、こんなにも泣いているんだろう。

「——また、みんなでゲームをしよう。どうだ?」

「——いいよ。でもボク、ゲームの天才だから対戦ゲームにしたら君きつと泣きべそかいちやうと思うけど、大丈夫?」

「へ、へー。まあいいさ。女の子には優しくしてあげないといけないからな。最初は花を持たせてやるさ」

かつちーん、ときた。

この野郎言わせておけば。

「ふーん、なに? 今から負けた時の言い訳? 大変だね男の子つてやつは」「いやいや、思いつきり実力差を示して泣かせたら大変だろ? 女の子はさ」

「あはは、あはははははは」

「はは、ははははははは」

「…………」

「…………」

「やるかこのヤローツ!」

「上等だオラーツ!」

ボツコボコにしてやるぜー!

覚悟しろ!

「ねえ……」

「なんだ？」

「……会いに来てくれて、ありがとう」

「そりや来るさ。なんたつて、約束破つたら殴られそうだからな」

「なにさそれ…………バカキリトのくせに」

「バカつて言う方がバカなんだぞ。バカユウキ」

## 番外編

I F

「あと1時間か……」

日曜日の午後一時。

親は仕事に、妹は部活に行つて家には俺達一人きり。

開始時刻まで、まだ時間はある。

今さら特別やれることも特にはない。ないけども、落ち着かない心のままに自室で現状でわかっている数少ない情報を纏める。

——まだ時間あるんだし、もつとのんびりしたら？ せつかくだしこの前のシユーテイングやろうよ。アレ楽しかったし。

「あるつて言つてもあと1時間だけだろ。遊んでる最中に時間過ぎたら俺泣くぞ」

俺が今日をどれだけ楽しみにしてたのか、それを一番知ってるだろうに。

——ぶうー。

「拗ねるなつて。もうちよつとなんだからいいだろオレ？」

——……もう、しようがないから我慢してあげるよ。ボクに感謝してよね

僕。

「へいへい。ありがとー」ざいまーす

誠意を感じないぞー！

それじゃあ改めて、これから始まるS A Oのベータテストの情報の整理するかな。

『転生したら主人格が既にあつた件』

。

そいつとは気づいた時には既に一緒だつた。  
多分、生まれた時から一緒だつたんだと思う。少なくとも俺が憶えてる範囲では常に  
一緒だつた。

はつきりと憶えている中で一番古い記憶は、デパートでゲーム売り場に行きたかつた  
俺と、アイスを食べたがつていたオレとでエレベーターの前で喧嘩をしている記憶だ。  
今にして思えば、独り言を言いながらなぜか怒っている子供だつたから周りから見れ  
ば相当不気味だつたと思う。まあ、今でも気を抜くといやつてしまふが……。

ともかく、そいつはずつと俺の中にいて、声も俺にしか聞こえなかつた。

小さい頃はそれがおかしいということに気付いてはいなかつた。自分にいるんだから皆にも同じようなのがいると思つていた。

だが周りの人に聞いてみても誰もが首を傾げるだけで理解はされず。

そんな中で成長していくと少しずつコレが異常であるということを知つた。

そんなおかしな自分のこと怖くなつたこともあり、親に相談したこともある。病院にも連れて行つてくれ、検査もして。一時期は通つてもいた。だがそれは、いつまでもいなくなることは無かつた。

幻聴？

妄想？

イマジナリーフレンド？

表す言葉はたくさんあつたが、どれもしつくりとはこない。

他の誰にも聞こえず俺にしか聞こえない声ではある。

俺が考へないような突拍子のない事を言うこともある。

確かに病状に当てはまる部分は多々あつたが、疑問も出てきた。

そういうふた存在は普通謝るものなのだろうか？

---

ボクのせいでキミを普通でいられなくして、ごめんなさい。

確かに、自分が周りの人と違うことに恐怖は感じていた。はやく消えて欲しいとも思った。

実の親だと思っていた人達が本当の親ではないと知つて、これ以上余計な迷惑を掛けたくないとも思つていた。

だけど、別に謝つてほしいとは思つていなかつた。

最終的に、俺はオレを認めた。

そうしてからは周りの人に『もう何も聞こえてない。問題は解決した』と、そう言い張つた。

まあ、それでも両親にはバレてるみたいだつたが。

親は子供をよく見てるつてことなのかもな？

それからは二つの意識で一つの体という、奇妙な共同生活の始まりだ。

俺がゲームで遊びたい時に、外で遊びたいと言い。

剣道を辞めると言えば、絶対に続けると一昼夜言い続け。

泳げないから怖いと叫ぶ声を無視して、俺は水の中に飛び込み。

お化け屋敷にお互いにビビりながら入り。

一緒にあーだこーだ言いながら夏休みの自由研究に勤しんだ。どこにもいない。だけど、ここにいる。

いつしか、俺にとつてオレは他の誰よりも近しい存在となっていた。

「…………ねー、ずっと画面見てて飽きないの？ ボクはもう見飽きたんだけどー。」

「もしかしたら直前に更新されるかも知れないだろ」

「…………いや、無いでしょ。だつてあと10分だよ。こんな変なタイミングでHPの更新は無いって。」

「…………もしかしたらあるかもしね」

「…………無いって。」

「…………無い。 つていうか少しは落ち着きなよ。 昨日も全然眠れてなかつたしさ。 そんなに楽しみ？」

「当たり前だろ。世界初のVRMMOのベータテストだぞ。ゲームーなら普通滾るだろ」

待望のVRでのMMORPG。

しかもたつた千人しか参加できないベータテスト。これに興奮しないゲームがいるはずがない。間違いない。絶対に。

これまでに発売されたナーヴギア対応のVRゲームはどれもオフライン限定のもの。全世界のゲーム達がどれだけこの時を待っていたことか。

いや、ボクは別にゲームじゃないし。

「よく言うよ。そうは言つてもゲーム好きだろ？」

対戦ゲーだつたら、だいたい勝つまでやるくせに。

いや、確かに好きだけどさ。でも、ボクそつちより体動かすほうが好きだし。だからまたマラソン大会出ようよ。この前のも楽しかったでしょ？

「しばらくはマラソンはもういい……あれは楽しいよりも疲れたイメージしか残つてないって」

いや、本当に。

ゴールに辿り着いた時はぶつ倒れるかと思つたし。

すぐにドリンク持つてきてくれたスグが天使に見えたくらいだぞ。

なので、しばらくは勘弁。

えー、楽しそうだつたのに。ゴールした直後にスグちゃんのこと抱きし

めるくらいにテンション上がつてたじやんかー。

「それは言わない約束だろうがっ！」

なにさ、まだ恥ずかしいの僕？ いいじやん別に。かわいい妹抱きしめただけでしょ。恥ずかしいことなんてなにもないじやん。

「恥ずかしいに決まってるだろ！ あんな大勢の前で、しかもなぜかクラスの皆もいたし……」

あ、それはボクが前日にメールで連絡してたからだね。

「おまつ!? 何してんだよ勝手に!?」

寝てる間なら体軽く動かしてもいいって言ったの僕じやん。

「軽くって言つておいただろが！」

軽くですー。右腕一本しか動かしてないですー。

「……頼むから、次からはやめてくれよ」

おつけー。

あー言えばこう言いやがつて。

なぜ俺はこうもオレに口で勝てないんだろうか。

学力は絶対に俺の方が上のはずなのに。一体なぜだ。

ねえ。ところで僕？

「今度はなんだよ……？ マラソンも自転車レースも水泳大会もしばらくは出場する気

はないぞ」

これからの一ヶ月は早朝ランニングと、週2の剣道の稽古で勘弁してくれ。ゲームに集中したいんだよ。

――時間いいの？

「時間……？　ちよつ!?　今何時だ!？」

まづい！

ベータテスト開始時刻は午後2時からだ！

そろそろナーヴギア被つて待機しないと丁度に間に合わない！　スタートに乗り遅れる！

今何時だよ!?

慌てて壁掛けの時計を見る。時計の針は長針がほぼ真上で、短針が2の位置に

――――――3、2、1、ポン。ボクが午後2時をお知らせいたします。

「ちよつ!?

嘘だろお前っ!?

――――――さあ、さつさとナーヴギア被つてベッドに横になろうか。

「言われなくとも!」

そうするつての！

急いで、ギアを掴み、被つて、寝転がる。

「行くぞ」

「いつでもどーぞ。」

「リンク・スタート！」

——いやあ、キヤラメイクは強敵だつたね。

「まさか、ベータからあんなに細かく設定できるとは思わなかつたな」

おかげで無茶苦茶時間かかつたからな。

俺とオレの好みが微妙に違くていつも時間かかるから、今回は事前に相談しておいたつてのに。

たつた千人しかプレイヤーいないのに、あそこまでやるのか普通？

——それこそ、カヤバーンのこだわりってやつじやないの？

「……確かに記事とか読む限りだと色々こだわる方っぽいから、そうだつたとしても不思議じゃないけどよ」

でも、さすがに茅場晶彦ではないと思うけどな。

今までの発言を確認する限りだと世界観の方を重視してゐるんじゃないかなって予想してゐるんだが。

「それにしても……すっげえ、面白かったな」

——うん。楽しかった。ソードスキルも思つた以上に簡単だつたしね。

「もうちよつと難易度高いかと思つたんだけど、すぐ出来るようになつたもんな……でも、オレが一発で成功したのは納得いかないけど」

——ふつふつふ。センスというものがあるのだよ、少年。

「俺が成功した感触を真似たからだろ、それ」

——こういう時ずるいよな、一緒の体使つてるつてのは。

成功した時の感触も丸々伝わるから、それを真似したらしいだけだし。

「明日はどうする？ 今日はほとんど俺が動かしたけど、明日はオレメインでやるか？」

——うーん……いや、いいよ。明日も僕がメインで。

「いいのか？」

——うん。あれだけ楽しみにしてたの知つてるし、1ヶ月しかないからね。

あつ、でもたまには貸してくれると嬉しいな。戦闘以外もやつてみたいし。

「おう、了解。なんか悪いな」

なに言つてるのさ。ボクと僕の仲でしょ？

「はいはい。そうだな、俺とオレの仲だもんな」  
でも、普段の悪戯はあんまり許さないからな。  
特に羞恥系は。

本当に。

さてさて、今日の二つはんはなんだろな。

「匂いからしてカレーじゃないか。きつと」

そして、時間はあつという間に過ぎていった。

ある時は、

「うおおおおおおお!! 絶対生き残つてやるからなっ！」

叫んでないでさつさと回避！ 右奥からさらに3体接近中！

「ちくしょう！ 普通あんな弱点みたいに実がなつてたら攻撃するだろうが！」

バーカバーカ！ 僕のバーカ！ アホ！ スカポンタン！

「オレだつてきつと弱点だつて言つてたくせに！」

—— 実行したのはそつちでしょ！ ギヤー！ 後ろから足音ツ！ 多分2体！

「ちつくしようつ！ 花つきさつさと出てこいよおおおおおお！」

ある時は、

—— 甘くておいしい。ゲームでもこんなケーキが食べれるとは、SAO恐

るべし。

「うまかつたな。サイズもショートケーキなのにすぐでかくて喰い応えあつたし」

—— このお店はチエックだね。ボク的SAOランキング上位に躍り出たよ。  
「まさか、こんなに食い物系が充実してるとは思わなかつたな」

—— デザート系は結構食べたから次はお肉だね。ドラゴンステーキとか。

「まだ2層なのに、そんなの出す店があるとは思えないけどな」

—— 願うだけなら自由だからね！

ある時は、

ふあいとく。

「…………ぐつ…………あと、ちよつと……」

——右手をもうちよい上。あーそつちじやなくて、ちょい左の出つ張りの方。

「こつち、だな……」

——そーそー、そつちそつち。いやー、にしても頑張れば登れるもんなんだね。多分今のとこプレイヤーの中でも最高記録なんじやない?

「聞く限り……だと、そうっぽい、な……」

——まさかこんな崖まで登れるようになってるとはSAOってすごいね。あつ、そこ左ね。

「ちよつ、言うの遅——あ」

あ

「落ちるうううううう!?」

——ギャアアアアアアアア! 惨い惨い! 早く目つぶつてよおおおお!

そんなこんなで、1カ月。

「今日が最終日、か……」

長かつたような、短かつたような。楽しい1カ月だつたな。  
だいたい騒いでばつかだつた気がするけど。

「お、なんだよ、オレも残念なのか？ もつと遊びたかつたつて？」  
まあ、ね。結構楽しかつたし。

「安心しろつて、ベータテストには製品版の優先権貰えるらしいから発売したら思う存分遊べるつて。それまで楽しみにしてようぜ」

製品版、か。

「ああ、戦闘も探索も充実してたし、生産系は今回は手出さなかつたけど面白そつたし。今度はそつちをやつてみるのも楽しそうだな」

せつかくだから、製品版の方ではオレ用のキャラデータを別に作つてみるか。

2キヤラ目からは課金しないと作れないみたいだけど、それぐらいの金はあるしな。  
ただそうなると、俺のプレイ時間が減ることになるから攻略組は難しいかもしねない  
けど。

まあ、たまにはいいだろさ。そういうのも。

うん。

「なんだよ、大丈夫か？ 元気ないぞ？」

ねえ、僕？ 一つ質問してもいい？

「……？ なんだよ急に。別にいいけどさ」

珍しいなオレがこんなに沈んでるのは。

前にこんなに元気なくなつた時はUFOキャッチャーで財布の中身が尽きた時以来  
か？

基本的にいつも楽しそうに過ごしてるので。

もし、もしもゲームの中で死んだら本当に死んでしまう。そんな  
ゲームがあるとしたら、僕は…………いや、桐ヶ谷和人はそのゲームをやる？

「はあ？」

なんだその質問？

「そんなゲームやらないに決まってるだろ。だって死んだら死ぬんだろう？ それなら誰  
だってやらないだろ普通」

いや、現実に嫌気が差してとか、生糞のゲームーだつたらもしかしたらやるのかもし  
れないけどよ。

少なくとも俺はプレイしないな。そんな危ないゲーム。

家族の命がかかってる、とかなら俺もやるかもしないけどさ。

ただし、

「ただし？」

「ただし、やらないと1万人が死ぬとしたら？」

「え、はあ……？ なんだよその設定。無茶苦茶にも程があるだろ」

「お願い、答えて。

答えろつて言つてもよ。

「えーと、なんだ？ そのゲームを俺がやれば1万人は助かるのか？」

「ううん。多分最低でも千人は死ぬ。

「千人も死ぬのかよ」

「…………うん。最低、というか確定で、かな。多分もつと増えるはずだけど。

やらなかつたら1万人死ぬ。

やつても千人死ぬ。しかも最低で。

しかも途中で死んだら俺も死ぬ。なんだよそのハードモード。

ただの男子中学生が背負う問題じやないだろ。漫画かアニメの主人公かよ。……いや、二重人格モドキという漫画かアニメみたいな設定はあるけども。「……その1万人にスグは入つてるのか？」

「いいよ。

「父さんと母さんは？」

家族は誰も含まれてないよ。

「クラスのみんなは？」

「それは…………わからない。もしかしたらいるかも知れない」としか。

「…………俺が知ってる範囲で含まれてるのは他にいるのか？」

「…………多分、いないと思うけど……今のは、和人には友達いっぽいいるか

ら、わからない。

なんだよ今のつて？ 意味わからねえよ。

つてかなんで今さら名前で呼ぶんだよ。

お前も桐ヶ谷和人だろうが。

まるで他人みたいに言うなよ。俺達は一緒じゃないのかよ。

「…………オレはどうしてほしいんだよ？」

「…………わかんない。

「1万人見殺しにしてほしいのか？ それとも最高で9千人助けられるかもしれないけど、俺が死ぬかもしれないゲームをプレイしてほしいのかよ」

「…………わかんないよ！ 全然わかんないっ！ ボクもどうしたらしいかわか  
んないんだよっ！ だからこうして聞いてるんだろ？」

「こっちだつて意味わからねえよ！ いきなり1万人死ぬだの、千人以上死ぬだの言わ

れて簡単に答えれるわけないだろつ！ ちゃんと説明しろよ!?」

説明なんてできるわけないでしょ！ 詳しく話したら、僕、和人は絶対に気にするに決まってるんだから、そんなの言えるわけないじやんつ！」

「なんでだよつ！ わからねえよつ！」

「なんでもだよつ！ わかつてよ!!

お互いに声を張り上げ、怒鳴り合う。

久しぶりだ、こんな風に喧嘩したのは。

喧嘩して機嫌が悪くなろうが結局同じ体だから、どうしても意識してしまう。だからいつの間にかお互いに喧嘩にならないように気遣つて生活してきたのに。

「ハア……ハア……」

「あ……あ……」

「……なあ」

「……なに？」

「とりあえず、名前で呼ぶの止めろよ」

「なつ、なにさ突然。

「突然なのはそつちだろ。慣れないからいつも通りに僕つて呼べよ。落ち着かないから

さ」

「それは……そう、だね。ごめん……

「別に謝らなくていいって」

「ただ、今さら他人扱いされるのが嫌なだけだからな。

「……なあ、オレ?」

「なに、僕?」

「……その死ぬゲームつてのが、SAOなのか?」

うん……製品版のSAOの初回販売数は1万。それを買って参加する  
プレイヤーはみんな、デスゲームに囚われる事になるんだ。

「デスゲーム……」

世界初、待望のVRMMOがデスゲームになる。そんなこと到底信じられる事ではな  
い。

だけど、俺はオレが嘘を吐いているとは思えない。

確かにオレは嘘を吐くし、冗談も言う。

だけど決して悪質な嘘を言わないのを、俺は知っている。

「……未来予知ができるなんて知らなかつたぞ俺は」

極々限定的な事しかわからないからね。しかも本当にそうなるかわか  
らないし。

「確信があるわけじゃないのか……？」

——色々言つておいてなんだけど、確信は無いんだ。ボクが知つてるのはデスゲーム開始以降の事ばっかりだから。

「なるほど……だから、どうしていいかわからないってことか」

本當かどうかは起こつてみないとわからない、ね。

「……犯人は？」

茅場晶彦。

「動機は？」

夢の世界の創造、だつたはず。

「それがなんでデスゲームになるんだ？」

——リアリティの追求、だつたかな？　ごめん。結構うろ覚えだから違うかもしねれない。

「なんとも迷惑な話だな」

——ほんとにね。

一人で勝手にやつてろとしか言えねえな。

そんなことに1万人も巻き込むなつての。

「それで、俺はどういう役割なんだ？」

英雄。

「は……？ 英雄？」

誰が？ 僕が？ マジで？

——うん、英雄。あるいは勇者。ビーティー、二刀流、黒の剣士。あとはブラツキーだつたかな？

英雄に勇者。残りのはよく分からぬいけど、全くもつて似合わない。

俺はただの中学生だぞ。大役に過ぎる。

「俺が、1万人救うのか？」

——ボクが知つてる最終的な数は6千だか7千だかだつた気がするけどね。大して変わらないつての、そんなの。  
重すぎて吐きそうだ。

「……俺がやらないとダメなのか？」

——……わかんない。キリトだつたからつてのは確かにあると思うけど、もしかしたらアスナとかが代わりになるのかもしね。でも、そうなる確証はなにも無いから、なんとも。

「そのアスナ？ つてのは、えつと、なんだ、勇者パーティの一員的な人か？」

——えつ、いや、まあ、そうつちやそつかな、うん……

なぜ言い淀む。

「警察とかは……無理だよな」

証拠とかはなにもないからね。悪戯扱いされて終わりじゃない?

「だよな」

だね。

どん詰まり。

結局のところ、俺が行くか、行かないかしかないって事か。  
ひどい話だな。

「本当にそう思つてるのか? オレは」

確証はないから、實際にはなにも起こらないかもしねりないよ。一応。

「思つてない。桐ヶ谷和人の実親は亡くなつてしまつたし、義理  
の妹の名前は直葉だつたし、剣道についておじいちやんは厳しかつたし。  
よく分からぬけど、知つていてる状況と合致してる事が少なからずあつて俺に質問し  
てきたんだろ、オレは」

……うん。

「そして、行つた方がいいとも思つたんだろ?」

な、なんで

「死にたくないとか、俺を死なせたくないとかだけ思つてたら絶対にオレは行かせようとしないだろ。そうせず、『わからない』『どうする』って言うことは、行つた方がいい、行きたいって少なからず思つたつてことだ」

そもそも、他人の生き死にに関して人一倍うるさいのがオレだ。

おそらくだが、今と同じような状況で自分だけの体があり、自身の意志でどうするか決められる状態なら迷うことはあつても、なんだかんだ行くだろうしな。大切な誰かの代わりにとかだつたら迷いもせずに突つ込むだろうし。まあ、とにかく決まりだ。

「じゃあやるか」

——えつ、な、なんで!?

「それしかないだろ、実際。じやないと大量虐殺が起つるらしいし」

——でも、死んじやうかもしれないんだよつ!?

「かもな。だけど、オレの知つてる桐ヶ谷和人は生き残つたんだろ?」

ハツキリと断言はしてなかつたが、多分そうだろう。

なら大丈夫だ。

——それは!  そう、だけど……ボクがいることでもう世界は既に変化してるんだよ!  死なない保証なんてどこにも

「オレがいるから死ぬかもしれない？　ないよ、そんなことは」  
　　「なんで言い切れるのさ！？」

「なんでもなにも、そんなの決まってるだろ。」

「ただの桐ヶ谷和人より、俺達二人の桐ヶ谷和人の方が強いからに決まってるだろ」

　　「な、

「だから大丈夫だ、心配するなって。なんとかなるさ、きっと」

「一人より二人の方が強い。当たり前の話だろ。」

「だからなにも問題なんてないっての。」

「だから助けようぜ、1万人。俺とオレの二人で」

「一人の俺が、英雄で勇者なら。」

「二人の俺達は、大英雄で超勇者で。」

「1万人だつて軽く救つてみせる。そのぐらいできる。」

「そうだろ？」

　　「おう」  
　　「……………なんていうかさ。」

　　「僕つてバカだよね。」

「オレにだけは言われたくないっての」

じゃあ、やろうか僕。

「おう。やつてやろうぜオレ」

これが始まり。

二人で一人な俺達で1万人を救うなんて馬鹿げた事を成そうとした瞬間。  
そうして、俺達の無謀な戦いの幕は切って落とされた。

「……で、そなは言つたがどうするよ？ ベータ終わつたけど」

……製品版が出るまで剣道頑張る、とか？

切つて落とされたのだつた。多分。

イフ

『……約束だよ』

『……約束だ』

「…………もうすぐ1ヶ月、か」

時間は過ぎる。

戻ることも止まることもなく、ただ進んでいく。

どれだけ辛く悲しい出来事があつたとしても、変わらずに時は進んでいつてしまう。隣にいた存在が、次の瞬間にはいなくなる。

辛いが、その気持ちを俺達はあの世界で何度も味わった。  
でも慣れたとは言いたくない。

この感覚は慣れるべきものではないのだから。

辛くて苦しいけど。それよりも大きなものを託されたのだから。

「まだ6時か。早く起きすぎたな。たまにはスゲと朝の稽古でもするかな」  
あいつとした約束を、俺は守らなくちゃいけないのだから。

無理のない程度に頑張らないとな。

## 『0と1と0・5』

テーブルの上を少女たちの指が縦横無尽に動き続ける。

なにも知らない人が見たら怪しいどころじゃないな。いつそ不気味だ。

「いやつたあ、クリアです！」

「やつたねシリカちゃん。ナイスアシスト、リズ」

「これで100ポイントゲットですよ」

「あ、ケーキ無料サービスだつて、ラツキー」

楽しそうでいいけどさ。

「君たち、ちょっとゲームしすぎじゃないか？」

「キ、キリトさんにそんなこと言われるなんて……」

そんなことつて……。

いや、まあ俺も自分で言つておいて説得力はないと思つたけどさ。

「いいじやない、色んな店でポイント貰えるんだから。やらなきや損でしょ？」

「本当はキリト君も一緒にやりたかったんじゃないの？」

「なに、 そうなの？」

「違うつての」

よくもこんなにやつてて飽きないなつて見てる最中に思つたりしただけだ。  
あと、あまりコレが好きじやないだけ。

「なんであんたはそんなにコレのこと毛嫌いしてるのよ」

そう言いながら、頭に付けた小さなヘッドホンのようなものを指すリズ。

「オーグマー、か……」

「便利じやないコレ。どこでもテレビ見れるし、スマホみたいに手塞がないし。なん  
つつても、こうして現実でユイちゃんとも喋れるし」

「はい！ 私も皆さんとおしゃべりできて嬉しいです！」

「よねー」

次世代ウエアラブル・マルチデバイス、オーグマー。

アミューズフィアのよう<sup>V</sup>に仮想<sup>R</sup>の現実を作り出すのではなく、現実<sup>A</sup>を拡張する機能を  
持つた新しい形の情報端末。そのコンパクト性から携行にも適すとされ世間では評判  
になつてている。

VRと違い、ARは実際の肉体を動かすからフィットネスにも向いてるんだと。そしてなにより、このオーグマーを用いたとあるゲームが大流行している。

「つてかキリト、あんた今ランキング何位なのよ？」

「なんのランキングだ？」

「なにして、オーディナル・スケールに決まってるでしょ」

「あれか。さあ、何位だつたかな……」

付ければ表示されるけど、今カバンに放り込んだままだしな。

あまりプレイしてないから下の方だとは思うが。

オーディナル・スケール。

オーグマーを利用してプレイするARMMO。

拡張された現実に現れるモンスターと自らの肉体で戦う次世代ゲーム、とでも言おうか。

VRの様に作られたアバターではなく自分自身の体で戦うことになるので、トップを目指す場合は自然と体が鍛えられるらしい。

特徴はなによりもランディングシステム。

プレイする全てのプレイヤーは順位を与えられ、プレイすることにランクは上昇していくという単純なシステム。

さらにランギング上位になればなるほど協賛企業からの特典を多く獲得できるらし  
い。

牛丼大盛り無料は確かにいいなと俺も思う。

「本当に興味ないんですね、キリトさん……」

「せっかく帰還者学校の生徒全員に無料配布されたんだから、もつと使えばいいのに」「まあまあ、二人とも……」

そうは言つてもなあ。

「面白いガジェットだとは思うけど、俺はフルダイブの方がいいかな」「ふーん そんなもんなのねえ」

2年間も別の世界にどっぷり浸かつてたんだ。

「そうなつても不思議じやないと俺は思うんだけどな。

「あつ、そういうえば皆さんは例の噂のこと知つてます?」

「噂? なんのことシリカちゃん?」

「あー、アレのこと? オーディナル・スケールに旧SAOのボスマンスターが出るつて

やつ」

「SAOのボス?」

「なにかのプロモーションとかなの?」

「さあ？ それはわかんないけど、出現する直前にしかアナウンスが無いから足がないと気軽にに行けないのよね」

「しかも夜にしか出ないらしいんですよ」

「へー」

旧SAOのボスモンスターか。

ALOのインクラッドではボスは全て一新されているから、ALOとのコラボとかではないだろうし。

一体なんなんだろうか？

『たつだいまー』

『おや、おかえり。随分満足げな表情だね』

『もー、満足満足。すごかつたんだよ。全国各地の有名ラーメン店とコラボしたゲームがあつてね、期間限定でVR内で再現された各店舗の味が楽しめるんだよ』

『ほう。興味深いな』

『今月いつぱいまでやつてるらしいけど、今度一緒に行く？』

『誘つてもらえるならば、是非ご同伴願いたいな』

『おつけー。じゃあ今度行こうね！』

すごいな。さつき告知されたばかりなのに人が結構いるな。

それだけこのゲームのプレイ人口が多いってことなんだろうけど。

「おっせーぞ、キリの字！ お、アスナも一緒に」

「はい。キリト君が乗り気じゃないので無理矢理引っ張つてきました」

そうですね。無理矢理引っ張られてきましたよ。

それにしても、クライインだけじゃなく風林火山のメンバー全員やつてるのか。

ハマリ過ぎて怪我とかしなきゃいいけど。

「キリト君、そろそろ時間だよ」

「あ、うん」

久しぶりだな。このオーラグマーを貰ったとき以来じやないか？

「オーディナル・スケール、起動

キーワードを唱える。それだけで景色は一変する。

自身の服装。武器。地形。

視界に映るほぼ全ての物が変化する。

ただのビル街が、今では西洋の城塞みたいだ。

そして視界の先で魔法陣が展開され、中心には大きな人影が確認できる。

「本当に出てきた」

「10層ボス、カガチ・ザ・サムライロードか」

旧インクラッドのボスマンスター。まさか本当に出て来るなんてな。

当時のボス戦参加者しか知らない存在を出す理由はなんだ？

確かに、あのSAOのボスともなれば話題性は抜群だろうけど、世間に広がれば悪評にもなりかねないぞ。

「なんだ？」

AR通信用のドローンから光のエフェクトが発生してゐる。

人影？ 誰か降りて来るな。

「おお!? マジかよお!？」

「ユ、ユナちゃんだ」

一生で見たの初めてだ……

白く長い髪に赤い瞳の少女。結構かわいい。

ユナって言つたか?  
ンつて言つてたつけ。  
確かに、最近話題のARアイドルだよな。シリカとスグがファ

オーディナル・スケールのイメージキャラクターだつて聞いたけど、こういつたイベ  
ントにも出て来るのか。

「みんな準備はいい？」  
さあ、戦闘開始だよ。ミュージックスタート！』

よくある特殊演出つてやつだろう。

ステータスを見ると結構強力なバフ効果が付与されている。

よつしやあ！ いくせおまえら！ ユナちゃんにいいとこ見せるぞお！

——おおー！

元気だなクライン達は。

周りのプレイヤーと比べて連携も巧みだし、攻撃もまとまっているし。それでも戦闘中に歌か。懐かしいな。

いつだつたかどつかのボス戦であいつが大声で歌いながら戦つてた時があつたな。うるせえって、皆に笑いながら怒られてたけど。

見る限り敵の攻撃はS A Oの頃のままみたいだ。10層攻略時はクライン達のギルドはまだ攻略組じやなかつたから攻撃パターンは知らないだろうけど、S A Oの人型モンスターの拳動は知り尽くしてるからな。初見の敵でも対応は容易いか。

「キリト君はどうする？ 見てるだけ？」

「これから活躍するどこだよつ！」

剣を握り、走り出す。

動きが遅い。足が重い。ラグが大きすぎる。

皆はよくこんな状況でまともに戦えるな。

「やりづらいな…………あ」

足が絡まる。走った勢いのままに地面に転がる。痛い。

ちくしょう。これだからA Rは。V Rならこんなミスしないってのに。  
なんだ？ 頭上に影？

「あぶなっ！」

いつの間にか近づいていた敵が、さつきまで俺が倒れていた場所に刀を振り下ろす。別にそこまで必死にプレイしてないけど、だからってやられたくはない。なによりア

スナの前だ。格好悪い姿はなるべく見せたくない。もう遅い気もするが。

「もー。しつかりしてよねキリト君」

「……面白ない」

「ちゃんとこれからはリアルの体も鍛えた方がいいよ」

「ああ。これからは気を付けるよ。

「さて、わたしも行こうかな」

「ああ。気をつけて」

転ばないように。

軽やかに駆け出すアスナ。

すごいな。VRでのアスナと遜色ないんじやないか？

閃光のアスナは現実世界でもその実力を發揮できるのか。

「はあ。本気で体鍛えた方がいいのかもなあ」

自分の彼女より弱いってのは、男としてどうかと思うし。

くだらない男のプライドではあるけど、俺的には大事にしたいものもある。

「お、倒した。さすが閃光」

『ははは、ははっはははは』

『……なにか面白いことでもあつたのかね？』

『あつたあつたよ。もう大爆笑！ あそこで転ぶかな普通！ あー、もーダメ、おなか痛い』

『見に行つてたのか。会つたのかね？』

『まっさか。ボクはもう終わつた存在。どつかの誰かさんのせいで今はこんな状態だけど、その事実は変わらないよ。……見るだけつてのはちょっと寂しいけどね』

『……なるほど、君は今後そういうスタンスなのか』

『そーゆーこと。ま、たまにならバレないように手助けしてあげてもいいけどね』

オーブマーを取り出し、起動。瞬時に視界に現在時刻。アプリ。カレンダーが表示される。

そして妖精が小さな欠伸と共に現れる。

「おはようございます、パパ」

「おはよう、ユイ」

「ここは？」

「ああ、アスナが昨日例のイベントをした場所だよ」

「昨日、俺も参加したS A Oボスモンスターとのイベント戦。昨日もこの公園で行われ、家が近かつたアスナはこれに参加したらしい。「ママは頑張ってるんですね」

「おかげで俺とのランク差は広がるばかりだよ」

原因は主に俺があまりやらないからなんだけどな。

「ふーん…………あれ、パパ？ このマークはなんですか？」

カレンダーの印が付けられているとある日付を指すユイ。

「うん。その日はアスナと山に流星群を見に行く約束をしているんだ」

「流星群！ 素敵ですね、私も見たいです！」

「もちろん。ユイも一緒に行こう」

S A Oにいた頃にアスナとした約束。

現実で星空を見たことがないというアスナと、一緒に流星を見に行こうという約束。

そして、こちら現実でも指輪をプレゼントするという約束。プレゼントは用意したし、キャンプ道具も準備した。

そして、アスナの父である彰三氏を通してアスナのお母さんに挨拶する約束も取り付けた。アスナには内緒で。

今からすつごい緊張してる。当日は大丈夫だろうか、俺。

「そうだパパ！ 今のうちにオーディナル・スケールの練習をしましよう！」

「ええ……」

今？ いや、別に必要ないんじやないか？

一昨日転んだのはたまたまだつて。多分。きっと。

「ママはパパの運動不足を心配してましたよ」

「いやいや、このあとアスナとデートだから動いて汗臭くなつたらあれだろ？」

「カツコ悪いとこばかり見せちやうと夫婦の危機だつてユウキさんも言つてましたよ」

「あいつは人の娘になにを吹き込んでるんだ……」

そうじやなくて、とにかく今はいいんだつてば。

ユイを振り切るように後ろを振り向く。

そして振り返ると目と鼻の先に白い人影が。

「えっ、うわっ！」

びっくりしたあ。気配もなく背後に忍び込まれてたとは。  
なんて冗談はともかく。

「あつ、ごめんな。いきなり叫んでしまって」

俺の声に驚いたのか、座り込んでしまった白いフードの子を立ち上がらせようと手を伸ばすが。

「あつ…………？」

手がすり抜けた？

距離感を見誤った？ 違う。確かに今俺はこの子の手に当たった。でも、触れることがはなかつた。

「—————」

「なにを言つて…………？」

消えた。

まるで最初からいなかつたかのように。

起動していくオーグマーを外す。周りに人の姿は見えない。  
NPCのタグはなかつた。だけど。

「プレイヤーでもないようでした」

「だとすると……ARの幽霊?」

科学的なのか非科学的なのか怪しいところだな。

『探して』と唇は動いていたみたいですが

「探して? 一体何を……?」

何だつたんだ今のは?

フードから微かに見えた顔は女の子のもので、見覚えがあつた気もするけど。

…………わからん。思い出せない。

とにかく。何か分からぬけど記憶の片隅に置いておくべきだろうな。

『いやー、いい世の中になつたねー』

『と言うと?』

『ARが流行つたおかげで今街に通信用のドローンがいっぱい飛んでるから、それ用のアバターを用意すればボクもリアルの街を歩けるんだよ』

『ふむ。ちなみにどんな姿で?』

『恰好？ 大きいフードを被つて顔隠してフラフラしてるよ？』

『……ちなみにこんな噂があるのは知っているかね？』

『噂……？』

『A R起動中にしか見えないフードの少女の幽霊が出るという噂だよ』

『…………ま、そういうこともあるよね！』

『やれやれ』

アスナとした約束の日まであと少し。いつもの仲間にも内緒の二人だけの約束。  
きっと楽しい思い出になるだろう特別な一日。

その日まであと少し。

なのに、なのに。

「なにも思い出せないの……」

それなのに、こんなことがあるのか？

「キリト君との出来事が、AINクラッドでの記憶がなにも思い出せないの」

初めて出会った日の事も？

二人で初めて歩いたあの道も？

一緒に暮らしたあの森も？

「時間が経つにつれて S A O での事がどんどん薄れていって……今はもう、なにも……」

笑い、遊び、戦い、悲しみ、それでも生きたあの日々を？

「わたしはキリト君の恋人で、皆と友達……だったのよね……？」

俺達のかけがいのない友人との思い出も、わからないのか。

医師によると、限定的な記憶スキャンを行われた痕跡があるようだ。

S A O の頃の記憶のみを読み取ったのだろう。

都内ではこれまでにも何件か同様の症状が確認されていて、共通点は全員オーデイナル・スケールのイベント戦に参加した後だつたということ。

アスナは昨日、リズとシリカと共にユイが推測したイベント発生地点に赴き、これに参加した。

1日ごとに1層ずつ上がつていったボス戦で、なぜか出現した91層のボス。

S A O に参加した誰もが知らないモンスター。シリカを執拗に狙つたソレからアスナは自身を盾にして H P を散らされた。

医師はオーディナル・スケール、ひいてはオーグマーが原因かどうかは断言できないと告げたが、そう言つた本人も信じてはいないみたいだつた。

「…………キリト君、わたしをアインクラッドに連れて行つて」

「…………ああ、わかつた。一緒に行こう」

アスナとユイの3人でかつて過ごした鋼鉄の城を巡る。

はじめて出会つた場所を、デートしたカフェを、喧嘩した広場を、暮らした家を。  
——でも、効果はなにもなかつた。

「ごめんね、一人とも…………やつぱりなにも思い出せない」

「ママ……」

「A L Oでの時間は鮮明に憶えているのに、S A Oのことはなにも…………ごめんね……」

「ママはなにも悪くなんてありません」

「ユイの言う通りだよ。アスナが謝る事じやないさ」

そうだ。アスナのせいじやない。なにも悪い事なんてしてないんだから。  
だから、そんな、

「うん…………ごめんね……」

そんな顔をしないでくれ。

「お茶空つぽになつちやつたね。わたし淹れてくるね」

「あ、俺が」

「いいの。やらせて」

「……うん。じやあ頼むよ」

にこりと笑つてカツプを手にキツチンへ行くアスナ。

あんな表情をさせたくはなかつたのに、俺はなにをやつてるんだ。

テラスから空を眺める。いつもなら美しいと感じる夕焼けも、今は何も感じない。ガチャン、という陶器の割れる音が家の中から聞こえてくる。すぐに扉に近づき、音を立てないように中を伺う。しゃがみ込んだアスナが見える。

「マツ…………パパ？」

「今は、ダメだ……」

飛び出そうとするユイを抑える。

アスナの感じる痛みも、苦しみも、俺達には理解出来ない。だからダメだ。

今俺達はアスナに喪失感しか与えられない。

視界の先で背中が震えている。守ると誓つたのに。

横顔が悲しみに歪んでいる。そんな顔をさせたくないなかつたのに。

涙がいくつも流れ落ちる。何度も何度も。

それだけは、それだけは流させてはいけなかつたのに。  
絶対に守ると、俺はあいつと約束したのに。  
俺は一体、何をしていたんだ。  
ちくしょう。

『……………』

『……………どうかしたのかね?』

『……………泣いてた』

『ふむ?』

『……………ずっと、泣いてたんだ』

『……………ああ、なるほど。彼女のことが』

『なんで、いつたいなにが』

『……………違つたのか。君が関わらないのは関わるべきではないと判断したからだと思つて

いたが』

『…………なんの話？』

『単純に、今回の出来事を君が知らないだけだったわけか』

『……詳しい話を聞かせてよ』

『もちろん。構わないとも』

A Iを構築しているのだと、目の前の少女は言う。

計画者は重村徹大。オーグマーの開発者。

ここに集められたS A O サバイバ 帰還者からS A Oの頃の記憶を収集し結合する事で、かつて

S A Oで命を落とした少女、重村悠那をA Iとして再現しようとしているのだと。

「このままだと高出力スキヤンが行われて会場内にいる人は皆死んでしまうのっ！」

そう白いフードの少女、ユウナは叫ぶ。

自身の存在が、大勢の人を死に追いやることになると。

ここ新国立競技場で開催されたA Rアイドルであるユナのライブ。

無料招待された帰還者学校の生徒、チケットを購入して来た一般の参加者。合わせて

3万人。

そして今、その全ての人間がライブ中の会場に現れた大量のボスマンスターに襲われている。

戦い、敗北し、HPがゼロになつた人数が一定数を越えると会場全体にスキヤンが発生し、オーグマーを装着している人の脳は大きなダメージを受ける、と。  
「俺はどうしたらいい!?」

「旧アインクラッド100層でボスマンスターを倒して、黒の剣士！」  
100、層？

「そうすればきっと……今オーグマーのフルダイブ機能を解除するから椅子に座つて！」

オーグマーにフルダイブ機能が搭載されている？

いや、今はそんなことはどうでもいい。

VRなら俺も全力を發揮できる。やつてやる。

「……わかつた。こつちは任せろ」

旧アインクラッドのボスマンスター。それがどれだけの脅威なのかはよく知つている。

たとえ俺一人でも、やるしかない。

絶望的な戦いになるだろう。でも――

「――元攻略組がここにいるが、必要ないか?」

「エギル……」

「あたし、S A Oのボス戦はじめてなのよね」

「あたしもですよ。ただの中層プレイヤーでしたし」

「遠距離支援は必要でしょ?」

リズにシリカ、それにシノンまで。

「ああ。皆、頼む」

必ず全員で勝つて帰ろう。

「キリト君……」

「大丈夫。すぐに帰つてくる。ここにいる皆を助けてみせる。信じて待つてくれ、ア

スナ」

必ず戻るから。

これを持つて待つてて。

「……指輪」

「帰つたら約束の続きをしよう」

たとえ今の君が憶えていなくても、俺は憶えているから。

二人で星を観に行こう。

だから、少しだけ待つていてくれ。

「——行くぞ」

「——「リンク・スタート!」——」

巨大、そう表現するのが相応しいだろう。

デスゲームとしてではなく。本来の、死の危険なんて無いS A Oのラスボス。この鋼鉄の城の頂上で、挑戦者を待つ者。

こいつが当時のS A Oの仕様のままだというならフルレイド<sup>4</sup><sub>8</sub><sup>人</sup>で挑むのが前提の強さだろう。

だが、この場にいるのは5人ぼっち。当時の攻略組は俺とエギルの二人だけ。普通に考えれば不可能だ。

それでも、絶対に勝たないといけない。

会場にいる多くのS A O帰還者<sup>サバハイバー</sup>、S A Oとは所縁もないライブに来た観客。

そしてなにより、アスナがいる。

アスナと約束したんだ。流星群を見に行こうって。

ユウキと約束したんだ。アスナを幸せにするつて。

だから絶対に、こんなところで

「諦めて、たまるかああああああああああ!!」

何度もかの全力での斬り掛かり。

その斬撃はこれまでと同様に不可視の壁に防がれる。スイッチを多用し幾度とない連続攻撃を繰り返すことでようやく破壊でき、そうすることで本体にもダメージが通るようになる。だが。

「回復モーションに入られる！ シノン！」

声に応えるように何度も銃声が響き渡るが、その動きは止まらない。

バスの背後に巨木が生え、瑞々しい葉からバスに零が滴り落ちる。

複数あるゲージの一つが、また全快された。

くそっ！ 時間が無いってのに！

焦りが徐々に全身を覆つてくる。

こんな状況だからこそ冷静に戦わなければいけないのは分かっているが、抑えられな  
い。

バスの放つたレーザーが空気を切り裂く。悲鳴が聞こえた気がした。

他の皆も同様なのか、少しずつ動きが鈍つてきている。

こちら辺でなにか対策をしないと本当に間に合わなくなってしまう。

そんな考えの中、一瞬立ち止まつてしまつた隙をつくように巨大な手が眼前に迫る。

「しまっ！」

まるでおもちやのように掴まれ、その巨大な顔の前に持ち上げられる。バスの目が赤く光る。

攻撃前のモーションだろう。まだこのバスの攻撃パターンは把握出来ていないが、こんなに分かりやすいモーションもないだろう。

皆が叫ぶが、助けは恐らく間に合わない。

助けようと駆け出したエギルとリズは木に巻き付けられ、シリカは瓦礫に押しつぶされている。シノンは先ほど潜伏場所にレーザーを撃ち込まれてから反応がない。これで終わりなのか？

いや、そんなことあつてたまるか。終わらせてなんてやるものか。

最期の一瞬まで足掻き続けてやる。

また皆で笑い合うために。

またアスナと一緒に星を見に行くために。

大事な親友がどれほど望んでも手に入れられなかつた、明日を守るために！

赤い光が視界を埋め尽くす。これで終わりだと言うように。

閃光が迫る。

体に力を入れるが、抜け出せない。

閃光が迫る。

それでも足搔く。まだ戦いは終わつてない。

閃光が迫る。

もう間に合わない。あと一瞬で俺は死ぬ。だが諦めない。

閃光が、迫る。

そして

——小さな拳が、俺の顔に突き刺さりその場から吹き飛ばされる。  
光が急速に遠ざかる。

ボスがまるで困惑しているかのような拳動をしている。

だけど、そんなことはまるで目に入つてこない。

「——別にさ、ボクはいいんだよ」

ありえない。

「忘れたといつて思われてたんなら、別にそれは構わないさ。ただ胸の奥がきゅうつてするだけで」

ありえない。

「だから、それが幸せだつて言うのなら忘れられても別にいいよ」

ありえない！

「……でも、でもさつ！」

だけど目の前に、ここにいる。

「痛そうに、辛そうに、苦しそうに」

黒い髪を靡かせて。

「泣いてたんだ。悲しそうに泣いてたんだ！」

優しい瞳で未来を見据えて。

「それはダメだよ。ぜんつぜんダメ。許せるわけがない」

その言葉で周りの皆を明るくして。

「みんなに約束したんだ。親友と約束したんだ。なら、ボクが黙つてられるわけないでしょ！」

天真爛漫で自由奔放で、そして誰よりも友達思いで。

「——このボクがつ！ ボクの友達を泣かしたやつを、許すわけないだろつ！」

そこには、もう会えない筈の俺の親友が立っていた。

「なにぼさつとしてるのさ。はやく立ちなよ」

当たり前のように俺に声を掛けて来る。

幻覚じや、ないんだよな？　ここ仮想空間だし。

「あ、ああ……」

「もー、ボクが間に合わなかつたらどうする気だつたのさ。死んじやうとこだつたよ」「悪い、助かつた……」

「しつかりしてよね、ほんとに」

混乱の極みにいて全然頭が働いてる気がしない。

この緊迫した場面でこれはまずいんだけど、誰だつてこうなるよな？

俺だけじやないよな？

「まつたく。そんなんだがら約束守れないんだよ」

約束。

アスナを幸せにして、泣かせないこと。

たつた1カ月前にした約束なのに、それを俺は守れなかつた。

「それは、悪い……」

「ほんとはもつと殴りたいけど、さつき思いつきり殴つたからその1発で許してあげる」「……友達は殴りたくないんじゃないんじやなかつたのか？」

「友達と親友はべつなんですよ。残念でしたー」「こいつは本当に。」

「あ、そうだ。はいこれ」

「え、おう」

剣？ それも片手用直剣。

今俺が握っているものと同じやつ。

『俺が二本目の剣を抜けば、立っていられる奴はいない』だつけ？ ふふつ  
このやろう。

「とりあえず、色々聞きたい事とかあると思うけどさ」

「ああ」

「ボクの友達泣かしたアレぶつ飛ばしたいから、手伝つてよ親友」  
なにが手伝つて、だ。

違うだろ、そうじやない。

「逆だ、バカ」

「むつ。誰がバカだつて？」

「俺の嫁を泣かしたアレぶつ飛ばすから、手を貸してくれ親友」

「……どうせ、まだ挨拶に行つてないくせに」

「今度行く約束取り付けましたー。知らないくせに口出ししないでくださいー」

「…………」

「…………」

静かになつた瞬間を狙つたかのように、木の触手による攻撃が迫る。

俺の知る誰よりも速い反応速度で剣が宙を舞い、攻撃をいなす。

「アレぶつ飛ばした後で同じこと言えるか試してあげよ、キリト！」

だが斬撃を放つた後の彼女の無防備な背中を狙うように、さらに第二波が来る。こいつ、気付いてるのに動こうとしない。相変わらずだな。

「言つてろ！ そつちこそその減らす口を叩けるか試してやるよ、ユウキ！」

わかつてるくせに躲さうともしないバカを守るように、俺も剣を奔らせる。そうして互いにいつものように軽口を叩きながら、敵に向け剣を掲げる。

「「だからっ！」」

隣り合い、いつかの戦いのように目標に向かつて共に走り出す。

「「どつととぶつた斬るっ！」」

二人揃つた俺達が、アスナの為の戦いで勝てないわけないだろ！

# いふ？

「いっつ、バツレンタイーン！」

紫がかつた黒髪、綺麗な赤い瞳を持つた少女が突然声を上げる。  
要は、いつも通りの事。

わたしとキリト君の家でユウキが変な事を言いだした。それだけ。

まあ慣れたもので、わたしも含めてこの場にいる皆も素知らぬ顔だが。  
「なつ、なに？ いきなりなんなの？」

訂正します。

慣れてないシノのんは動搖した様子でした。

「あーあ。聞き返しちやつたわね。あれに」

「ご愁傷様です、シノンさん」

「えつと、ご愁傷様です？」

「きゆるー」

「えつ、なんのその反応」

リズもシリカちゃんもユイちゃんもそう言つてあげないの。

まだシノのんはユウキに慣れてないんだからしようがないでしょ。

「ふつふつふ。よくぞ聞いてくれたよシノン!」

聞いたんじやなくて、驚いただけだとと思うけどね。

まあ、今さら訂正してもストップしないだろうけど。ユウキの事だし。

「どうしてもと言うならばお答えしましよう。さてシノン! 来月は何月ですか?」

「先々週に新年迎えたばっかりなんだから、聞かなくてもわかるでしょ」

「リズ、この状態のユウキにそんな事言つても聞いてくれるわけないじやない」

「さすがアスナさん、慣れていますね」

ユウキとの付き合いはこれでも長いからね。

「この状態でスルーなの!? 待つた、なんていきなり抱き着いてっ!? ちよつ、あなたどこ触つてるのよつ!?」

「よいではないかーよいではないかー」

洗礼みたいなものだから、一人で頑張つて。

さすがに限界がきてハラスメント通報しそうになつたら皆で助けるから。

それから3分くらいシノのんの奮闘を鑑賞し、ユウキが満足したところで質問。

「それで、来月のバレンタインになにがしたいの?」

「さすがアスナ、よくわかつてるね!」

冒頭のセリフで大抵の人は察すると思うけどね。

「題して！」

「題して？」

「『ドッキドキ！ バレンタイン武闘会！ もキミのハートを奪つちやう』を開催します！」

「へー」

うん。わたし知ってる。これはまずい流れだ。

「あたし宿題やらないといけないんだつたー」

「わーもうご飯の時間なんで落ちますねー」

システムメニューを開こうとする二人の左手を掴む。

「ここで逃がしてなるものか。なにがあつても絶対に巻き込んでみせる。

「もう、何言つてるのよリズ。宿題ならこの前わたしが手伝つて終わらせたばかりでしょ」

「なに言つてるのアスナ、そんなのはきっと気のせいに決まつてるじゃない」

——逃がして。

——逃がさない。

この大切な親友と目と目で会話出来た気がした。きっと今までの時間で育まれてき

た友情のおかげに違いない。わたしはいい友人を持った。

「もうダメですよリズさん嘘吐いたら。ということであたしはご飯なので手を放して下さいアスナさん」

「さつきインしてきた時にお腹いっぱいって言つてたでしょシリカちゃん」「うつ。き、気のせいですよ、きっと」

——逃がして下さい。

——逃がしません。

この小さな友人と目と目で会話出来た気がした。きっと今までの時間で育まれてきた友情のおかげに違いない。わたしはいい友人を持つた。

冗談はともかく、被害にあう人間は多い方がいい。それだけ負担が分散するのだから。

とりあえずキリト君を呼ぶべきだろう。

今までの経験上キリト君がいれば被害の大半はそつちに向かうはずだ。

うん、そうしよう。

今すぐ呼び出そう。

「…………いいわよ？」

「…………はい。諦めました」

「…………キリト君を呼べばシノのん含めて5人。半分はキリト君に行くんだろうからわたしの負担は」

「あ、キリトは今回ダメだよ」

「えつ」

えつ?

被害担当の呼び出し禁止?

「…………ハツ。はいはい！」

「はいシリカ」

「クラインさんを呼びましよう！」

「いいわね、あたしも賛成！」

なるほど。キリト君が駄目ならクラインさん。  
確かにそれならまだ大丈夫なはず。

「ん? クラインも男の人だからダメだよ」

被害担当その2も禁止、と。

「…………」

「…………」

バレンタイン、男の人禁止、武闘会、ハート……。

「なんであの3人はあんなに沈みこんでるのよ？ 一体なにが始まるわけ？」

「なんでもユウキさんは破天荒さんらしく、色々大変だと前にパパが言つてました」  
復活したシノのんとユイちゃんが呑気に会話をしている。

知らないいっていうのは幸せな事なのね。

「……アスナ。ユイちゃんも巻き込みましょう」

「……リーファちゃんも入れれば6人です。きつとなんとかなります」

「……スリーピングナイツの女性陣も呼ぼうかしら」

サクヤさんとアリシャさんの領主コンビも巻き込めれば、もっと楽になるはず！

「今日はそんな大変じやないから大丈夫だよ」

「嘘おつしやい」

友達の言葉はなるべく信じるけど、ユウキのその言葉はもう信じない事になると前回  
わたしは誓つたの。

「な、ひどいよアスナ。ボクのことを信じてくれないの？」

そんな風に瞳をウルウルさせてダメです。

「前回の第1回攻略組大運動会を思い出してから言つて頂戴」

「あと、チキンレース大会もね」

「ファッショントヨーを忘れて貰つちや困りますよつ！」

「もー、みんなひどいなー」

「デート……時間……お化け……巨大魚……丸呑みキリト君……。やめましょう。もう思い出す必要はないんだから。

「今日はほんとにだいじょーぶだつて、すごく簡単にする予定だし」

「……とりあえず、聞くだけ聞くわ」

「おっけー。ではではボクが企画する内容とは——」

そして企画の説明、質疑応答などを挟んだ結果、ユウキが今回やろうとしている事は確かにとても簡単な内容だつた。

ユウキの話を一言で纏めると、バトルトーナメントをやりたいらしい。

勝つた時の賞品をチヨコにして。

「チヨコによる救済を！」

「へー」

開催理由は『チヨコを求める人にチヨコの救済を！』とかなんとか。

まあ、十中八九嘘だと思うけど。

「それで？ わたし達はなにすればいいの？」

「とりあえずシリカは景品でしょ?」

「うえつ!? 嫌です! もうほっぺにキスとかやらないですかね!」

「えー、ダメ?」

「だーめーでーす!」

「すつごくウケるのに……」

確かに。

シリカちゃん可愛いからすごい盛り上がりになるのよね。

そして大体キリト君が勝つから嫉妬されて大変な目に遭うまでがお約束だけど。

「はいはい、シリカちゃんの出演交渉はとりあえず後にしてちようだい」「はーい」

「アスナさん!?

驚きの表情をしたシリカちゃんを尻目にユウキに再度問う。

「それで、わたし達はこれからどういう風にこき使われるの?」

「チヨコ作つてもらうよ」

えつへん、と腰に手を当てて言うユウキ。ちょっと可愛い。

「…………え、それだけ?」

「あとはそうだね、たまに周りに宣伝するくらいでいいよ」

「……本当にそれしかしなくていいの？」

「なにもさせられなくて逆にちょっと怖いんだけど。

いつものキリト君とかみたいに、当日いきなり雑な扱いされるとかありそうで。

「大丈夫だよ。というか実はもうある程度準備始めてるしね」

「そうなの？」

「うん。各領主の人達にお願いして宣伝と運営の手伝いは頼んであるからね。さつすがボク、段取りいいよね」

「はいはい。さすがね」

「ぶうー。リズう、アスナがつめたーい」

「ああ、もうつ、だからつてこつちに抱き着いて来るんじゃないっての！ シリカの所に行つてなさいって」

「はーい」

「リズさんひどい！」

わーきやー騒ぐ皆を見てると、シノのんが静かにこつちに近づいて来てるのに気付く。

「あの子って、いつもあんな感じなの？」

「戦闘中はもつとキリツとしてるけど、ユウキは普段だいたいあんな感じよ」

「そう……」

「苦手なタイプ？」

「ちょっとだけね。強引な感じはあんまり  
やつぱりそう思うよね。」

昔のリズも同じこと言つてた覚えがあるし、わたしも一番最初に出会つた頃は鬱陶しく思つてたもの。  
だけど。

「シノのんにはもう迫つてきたりはしないだろうから大丈夫だよ」

「そうなの？」

「ユウキは人の表情よく見てるから。最初のアレは適切な距離感探つてただけのはずだ  
し」

「アレで距離感を測るのは間違つてる気がするけど……」

「大丈夫。皆ずっとそう思つてるから」

「いや、なら止めなさいよ」

ユウキの洗礼だから、一回は受けて貰わないと。

あ、遠くでひつそり騒ぎを眺めてたユイちゃんがユウキに捕まつた。  
がんばれユイちゃん。自力で対処できるようにならないとこれから大変だから、早め

に慣れた方がいいよ。

なんだかんだで1ヶ月経ち、今日は2月13日。

バレンタインの前日。

「それで明日は闘技場集合でいいの？」

「うん、それでおつけーだよ。大会の運営と誘導とかはみんながやつてくれるって言ってたし、だいじょーぶだよ」

「みんな、ねえ……」

「うん、みんな」

ユウキの言う『みんな』とはこのALOでの9種族の領主全員のこと。

つまり今回のイベントは、全種族の領主が率先して協力する非公式イベントということになる。

「用意するチヨコは前に言つてた数でいいの？」

……一体いつの間にそんな人脈を広げていたのやら。

「うーん、ちょっと予想より大規模になつてきたからもうちょっと増やしたいとこだけど、もう時間無いしね。そのまでいいよ」

「頑張ればもう何個かは明日に間に合うと思うわよ。味を度外視すればになるけどわたし以外のチョコ製作班の料理スキルのレベルが足りてないから、ちょっとあれだけど。

あまり美味しくなくていいのなら、それくらい作れるはず。

「いや、いいよ。今回みんなに料理スキルわざわざ取つてもらつちゃつたし、これ以上は無理させられないよ」

「そう?」

「うん」

「なら、いいけど……」

「だいじょーぶ。ボクがなんとかしてみせるから」  
ユウキがそう言うなら、いいんだけど。

「じゃ、ボク他の人のどこ回つてくるね。残りのチョコよつろしくー」

「ええ、任せて。いつてらつしやいユウキ」

「うん! いつてくるね!」

文字通り飛び出して行っちゃつた。

途中で誰かにぶつからないといいけど。

「さて、じやあ残りもちやちやつと作っちゃいましょうか」  
ノルマまであとちょっと。みんなで頑張つていこう。

「うへー、まだやるわけ?」

「もう、リズさん頑張つて下さい。いつも武器作るみたいに気合入れましようよ」  
「……鍛冶スキル使えるつてならもうちよつとやる気出すわよ」

「もー」

「リアルだつたらもう少し上手くできるのに。こういう時仮想空間つて不便よね。スキ  
ル使わなきや作れないんだもの」

「え、リズさんリアルでチョコ作れるんですか?」

「ちよつとシリカ? それどういう意味?」

リズの気持ちも分かる。仮想空間内の料理つて独特だし。

そもそも、なぜチョコ作りでわたし達に頼むのだろうか?

食べ物なんだから料理系ギルドに頼むとか、発注すればいいのに。

「あのアスナさん? 質問なんですけど、この大量のチョコつてあたし達以外の人も  
作つてるんですよね?」

「ユウキが言うにはそちらしいけどね。そうでしょリーファちゃん?」

わたし達が声を掛けられた日にはいなかつたけど、結局巻き込まれたりーフアちゃんに確認する。

「みたいですよ。シルフ領でサクヤさんが作る人集めてました」

「なら、なおさらあたし達が作る意味がわからないんだけど」

「あ、でも屋台用って言つてたよな?」

「屋台? なにそれ?」

「ごめんなさい、そこまでは」

屋台用? ユウキはわたし達が作つてるチョコは選手用としか言つてなかつた気がしたけど。屋台つてなんだろうか?

「作るチョコつて3種類でいいんですね? 簡単なのたくさんと、ちょっと手が込んでの1個と豪華な1個で」

「ええ、その通りよ。『トーナメント参加者用に』つてユウキは言つてたわね」

サクヤさん達が用意してると、わたし達のチョコは別物?

「料理スキルが低いプレイヤーのチョコを入賞用つて、どうなの?」

「女の子が作つたつていうのが大事なんじやない?」

「そうは言つてもゲーム内のアイテムでしかないのに?」

「多分……?」

ユウキの考えることだからよく分からぬのよね。

そして次の日。

バレンタインデー当日。

各種族、各領地、一般のプレイヤーによるネット上で告知、宣伝等々。プレイヤー主催でのイベントの規模としては過去に例を見ないものとなり、トーナメントも当初の予定を変更し予選を挟んでからの本選となつた。

一体どれだけの数が参加したのかは詳しく聞いてないけど、皆そんなにチヨコが欲しいのだろうか？

『…………とまあ、そんな感じで告知してたルールとは若干変更されたけど、みんな理解できたかな？…………うん。大丈夫みたいだね。ではでは改めて、ここにバレンタイン武闘会の開催を宣言します！』

ドーン！　と上空に色とりどりの花火と共に、ユウキの声が会場に響き渡る。

今回は一応関係者ではあるけど詳しいタイムスケジュールとか貰つてないから、これ

からユウキがなにをするのか分からなくて若干の不安とちょっとの期待で胸がドキドキしてる。

『それじゃあまず賞品の説明するね。会場の皆さーん。上空に浮いてるモニターをご覧下さーい』

「あいつ、あれどつから持つてきたのよ？」

「さあ、さっぱり……」

リズが疑問に思うのも無理はない。

上空に浮遊している大型モニター。公式イベントでしか見たことがないんだけど、ただのプレイヤーがどうやって調達したんだろうか？　まさか運営に借りた？　いやいや、さすがにそれはない、よね？　でもユウキだからなあ。なんとかしそうでもある。

画面は真っ暗なままで、未だなにも映つてないけど……。

あ、映つた。

見た事あるような無いような可愛い女の子達が画面に表示されてる。

「あの人達どこで見たような？」

「シリカも？　あたしもなんか見覚えあるのよね」

皆も見覚えあるんだ。

あつ、画面にわたし達が映った。

『はい、出たね。今画面に順番に表示されていつてるのが今回の賞品であるチョコを作ってくれた女の子達だよ。選考基準はケットシーカー領であつたミスコン上位者とか、レプラコーンの音楽祭で優勝したガールズバンドの人達とか。そういうつた人にお願いさせてもらつたよ。みんなチョコありがとね』

そういう選考基準だつたわけね。

なら、わたし達はなんで？ 別になにかで表彰とかされた覚えはないけど？

『それだけじゃなく、ボクがこの人のチョコ欲しいなーって個人的に思つた人にもお願いしたりしたけどね。…………なにさ、ずるいって？ 主催者特権だからするくないよ。合法だよ』

確かに違法ではないかもしれないけど、ずるいとは思うわよ。

『ちなみに予選参加者と観客席にいる人に配られたチョコクッキーもこの娘達に作つてもらいました。普段料理関係のクエストとかと関わらない人達にわざわざ料理スキル取つて貰つて作つてもらつたんだから、「これ味微妙」とかそういう文句言つたりしたらボクが怒っちゃうからね』

皆にはスキルレベル0から頑張つて上げて貰つたけど、さすがにひと月じや限度があつたからね。そこは大目に見てほしいな。

『どうか視点を変えよう。普段は料理しない女の子がバレンタインだからと自分のために頑張つて手作りチョコを作つてくれた。そう考えるとむしろあまり美味しくない方がそれっぽくて良くない?』

そういうものなの?

あ、でもキリト君が普段苦手な事をわたしのために頑張つてやつてくれたと思えば、その気持ちも分かる気がするわね。多分実際にされたらキュンとくる。

『そして本選出場者にはちょっと手が込んだチョコ1個が絶対に貰えます。手渡しですね。何回戦の第何試合で負けたらこの人のチョコ。そんな感じで既にルーレットで決めてあるから、好きな子のチョコが欲しかつたら何回勝つてどこで負ければいいのかをこの後画面に出るトーナメント表で確認しておいてね』

わたし達が事前にやつたルーレットの番号はそういうことなんだ。

『どうか、せめてわたし達には事前に説明しておいてほしいんだけど。なんのためのルーレットなんだろうって思いながら回してたんだから。』

『そしてさらーに、優勝したらすっごく豪華なチョコを女の子全員から貰えます。全員だよ? 男の子の夢だよね。バレンタインで大勢の可愛い女の子からチョコ貰うの。この提案をしたボクに感謝してもいいんだぜ』

『あの1個だけ豪華なの用意しろつてそういう……』

「普通あたし達には説明しておかないと？」

「そこはほら、ユウキだから…………」

わたしはもう半ば諦めてるわ。

『という訳で、予選開始していくよ！　みんな優勝目指して頑張つていこー！』

それにしてもユウキは本当に楽しそうね。

そして時は流れて決勝戦。

ここに至るまで幾つものドラマが繰り広げられた。カツプルができたりできなかつたり、まさかのユージーン将軍の参戦だつたり、クラインさんが泣き崩れたり。

色々あつたりしたけど、兎にも角にも決勝戦だ。

『では遂にこの決勝戦まで勝ち上がった選手の紹介をしていくよ。――まずはこの人！　予選のバトロワから危うげなく勝ち進め、本選もなんなく快勝。そしてさつきの準決勝で友人のクライン選手を容赦なく切り伏せてここまですんなり駆け上がつて来た男、キリトー！』

紹介と同時にキリト君の後ろで色とりどりな爆発が発生する。派手だなあ。  
すぐそばでスタッフが杖構えてるし、人力なんだろうな。スタッフさんお疲れ様です。

この戦いが終わればこのイベントも終了。  
そうしたら後は用事済ませて、キリト君とゆつくり二人で過ごそうとか考えてたけど。

『いやー、さすがだね。美少女の彼女がいるのにそれだけじゃ飽き足らず、他の女の子からもチョコを貰おうとするとは。果たして今回は一体どれだけの女の子をその毒牙にかけるつもりなのか。その動向にも注目だね』

いつものことだけど、きっと、すんなり終わらないんだろうな。

『え、なにキリト? 紹介に悪意を感じる? 気のせい気のせい』

ユウキのキリト君に対する態度は、小学生の男の子が好きな女の子にするイタズラみたいなのだとと思うから悪意はないわよ。きっと。

恋愛感情は無いらしいから、厳密にはちょっと違うだろうけども。

『そしてそれに対するはこの人!』

「……ねえアスナ?」

「……なにシノのん?」

『美麗にして可憐、砂漠のオアシス、荒野に咲く一輪の華』

「あの子って主催だつたはずよね？」

「ええ、その通りよ」

配られてたパンフレットの総責任者のところに、ちゃんとユウキの名前が書いてるわよ。

『天使のように清らかで、悪魔のように妖艶』

「なら、なんであそこにいるの？」

「さあ」

わたしにもわからないわ。

『そう！ ボク参戦!!』

ドーン！ と叫ぶユウキの後ろで色とりどりの爆発が起ころる。

あの演出、気に入つたんだろうか？

『ハーハツハツハ！ 大会主催者が参加しちゃいけないなんてルールは作つてないからねっ！ なにも問題はないのだよ！ ……あ、爆発ありがとう。もう戻つていいよ』

問題だらけだと思うけど。

『え、今度はなにキリト？ 紹介盛り過ぎ？ キリトのも盛つたんだからボクのも盛らないと釣り合い取れないじゃん。なに変な事言つてるのさ』

変な事言つてるのはユウキの方だと思うよ。

『いやー、大変だつたね。色んなとこにイベントのプレゼンした時からこうする予定だつたけど、実際にやると思つたより仕事多くて参つたよ。実況が長引いて予選の時間に間に合わなくなるかと思つて焦つたもん』

わたし達も焦つたわよ。予選にすごく見知つた子がいたから。  
一人だけ女の子だからものすごく目立つてたし。

『本選もビックリだつたよ。確かにスタッフのみんなにトーナメント表いじつたりしないでねつて言つておいたけど、あそこまで当たる人みんな強いのは予想外。準決勝でユージーン将軍だつたの知つた時は諦めかけたからね。……一応聞くけど、ほんとにあれランダムで決まつたんだよね？ わざとじやないよね？』

ユウキが対人戦で苦戦しているのをキリト君以外で見たのは団長以来だつた気がするから、新鮮だつたわね。

でも、こんな場面で見る事になるとは思わなかつたけど。

『ま、そんな終わつた事はもうどうでもいいのさ。大事なのはボクとキリト、どっちが勝つて大量のチョコを手に入れられるかなんだからね。そしてなにより――』  
「そういえば、ママの入賞チョコは準優勝用でしたつけ？」

「そう。だから勝つた方にすぐ豪華なの渡して、負けた方にちょっと手が込んでるの

渡すことになるのよね……』

『……あの一人にどつちも渡るんですから、ママの引きもすごいですよね』

どつちも知ってる人だもんね。

ただ、二人とも普段からわたしの料理食べてるから特別感はないかもだけど。

『——アスナの本命チョコはボクが貰うよっ！』

……………ん？ 本命？

『ちゃんと主催者特権で下調べは終わってるからね。アスナの優勝チョコはおつきなチョコケーキだつてのは知ってるんだよボクは』

「本命なの？」

「いや、別にそういう意図はないけど……ただキリト君も出るからキリト君に渡せたらいいなって思いながら作りはしたけど……」

本命チョコとかそういうつもりは無かつたんだけどな。

というか、それ以前にユウキは貰う方じやなくて、本来は渡す方じやないの？ 貰つて嬉しいの？

まず、そこから間違ってる気がする。

『ふつ、急に目の色が変わったねキリト。自分の恋人のチョコは絶対に渡さないって顔してるよ。そこなくちや倒し甲斐がないよ！』

うん。目に見えて顔つき変わったねキリト君。

その独占欲は正直すごく嬉しいけど、今それをされてもあまり嬉しくないというか

……。

『それじゃあ決勝戦を始めるよ！ いくよっ、キリト！』

……まあ、いいか。なんか楽しそうだし。

がんばれ、二人とも。

打ち上げ会場、結構広いな。

なにより人が多い。100人とか普通にいそうね。

それだけ今回のイベントに関わった人が多いって事だけど、改めて考えるとすごい規  
模ね。

さて、そんな中いつたいどこにいるのやら。

「あれ？ アスナ一人でどうしたのよ？」

「リズ」

「旦那と一緒にやなかつたの？」

「さつきクライൻさんに絡まれて、どつか連れてかれちやつた」

「あー、なるほど」

残念会だ、とかなんとか。

キリト君惜しかつたからね。制限時間があとちょっとあれば勝てたかもしけなかつたし。

「ならアスナ一緒に来る？ あつちに女性陣で集まつてるけど」

「んー、折角だけど遠慮しておくね」

「そ。なら別にいいけど」

「ごめんね。ちょっと今は用事があるから。

「あ、そうだリズ、ユウキ見かけてない？ 探してるんだけど見当たらなくて」

「ユウキ？ さつき飲み物持つてあつちに歩いてつたのは見たわよ」

「ほんとう？ ありがとう」

「いいわよ別に。じゃ、またあとでね」

背を向けるリズに手を小さく振る。またあとでね。

「あつちはなにがあつたつけ？」

別にダンジョンというわけでもないのでだし、行けばわかるか。

歩きながら今回のイベントを振り返る。

ユウキのやることにしては珍しくわたしが大変な目に遭わなかつたわね。そういうばユウキ相手にだつたけど、シリカちゃん結局ほつぺにキスしてたのは交渉の結果だつたのかしら？

そんなことを考えながらユウキの向かつたと思われる方向に進むと、綺麗な花で囲まれた中庭に辿り着く。

外に出て少し歩くと、見知った背中が見えてきた。静かに遠くの空に浮かぶ鋼鉄の城を眺めているらしい。柄にもなく黄昏ているのだろうか？

そつと隣に立ち、声を掛ける。

「なに考へてるの？」

「…………どーでもいいこと。世界一下らないお願ひを神様にしてただけ」

神様にお願い？

願いは掴み取るもの、なんて言うユウキが？  
珍しいわね。

「どんなお願ひ？」

「べつづにー。ただ、————明日が来ませんようについて、それだけ」

「……珍しいわね。ユウキがそんなこと言うの」

というより、初めてな気がする。

明日の話をすれば笑うのがいつものユウキなのに。

ちょっと驚いた。

「そうなの？」

「もちろん。ま、それだけボクにとつて今日が楽しかったってことだよ」

「そうなの？」

「もちろん。みんなが協力してくれて、友達からチョコたくさん貰つて幸せいっぱいだ

し」

「キリト君にも勝てたし？」

「うんうん。いやー、よかつたよ決勝まで行けて。キリト対策が無駄になるところだつたからね」

「対策つて、あの最後に使つたOSSのこと？」

決勝戦でユウキが使つたオリジナルソードスキル。

キリト君は全ての攻撃こそ受けなかつたけど、躊しきれず大ダメージを負つてしまいその状態でタイムアップ。残りHPの差で敗北してしまつた。

キリト君とユウキのPVPなんて周りからして見慣れたと呼べるほど頻繁に行われている。

周りがそう称するほどだから、本人たちも相手の手の内を知り尽くしていると言つて

いいほど戦っている。

だから対策として初見の攻撃を用意するのはとても理に適っているけど。

「そ。すぐかつたでしょ」

「度肝を抜かれたわよ。なによあの11連撃。一体いつの間に用意したのよ?」

OSSを登録するのはすぐ大変で、連撃となるとそれだけで難易度あがるのに。

よくもまあ、あんな必殺技編み出せたわね。

「大変かつたんだよアレ。ボクは刺突より斬撃の方が多いスタイルだから作るの手間取つてね。やつと出来たの2週間前だもん。その後秘密特訓もしたりして毎日くたくただつたよ」

2週間前?

丁度イベントの開催に向けてゴタゴタしてた時期でしょ。

「スタイルに合わないなら斬撃主体にすればよかつたじやない」「まー、うん、そうなんだけどさー」

「?」

ユウキにしては珍しく言い淀むわね。

「やっぱ、さ。一応ボクつてユウキなわけだし、アレは作つておかなきやダメかなつて」「……めんなさい、言つてる意味がよくわからないんだけど」

一応つてなに？ ユウキはユウキでしょ。  
ちよつとよくわからない。

「いいよ、気にしなくて。ボクが変な事口走つただけだから」  
「あー、なるほどね」

納得。すごい説得力ね。

「……それで納得しちゃうの？」

「ユウキの今までの言動を省みれば、自然とそうなるわよ」  
付き合いが長い他の人も同じ反応してくれるわよ。きっと。

「アスナひつどーい」

「いつも巻き込まれてるお返しよ」

互いに笑い合いながら言葉を交わす。

2年前まであつたはずの、いつかの光景。

あの世界が終わつてから無くなつてしまつた、いつもの日常。  
それをまた死の危険なんてないこの世界で再現できることが、とても嬉しい。  
もう会えないんじやないかと一時期思つていたからなおのこと。  
だからこれは、またあなたと出会えたことへの感謝の気持ち。

〔――ユウキ〕

「なーに？」

「はい、これ」

言葉と共に、小さなプレゼント箱をユウキへ渡す。

「えっ、うん。ありがとう……？」

疑問を浮かべながらも感謝を述べるユウキ。

いつも周りを困らせてばかりなユウキの戸惑つての姿はレアだな、なんて思いつつネタ晴らし。

「バレンタインチョコよ」

「えっ？ でも、ボク優勝してアスナからも貰ったよ……？」

「それは優勝賞品としてのでしょ。こつちはユウキ用に用意したやつよ」「ボクのために……？」

「そうよ。なのに大会に出るんだもの。コレどうしようかと思つたわよ」

もうチヨコあげちゃつたわけだし、別の物にしようかとも思つたけど。そのチョコに込めたわたしの思いを考えたら渡したくなっちゃつて。

でも、さすがに1日に2回も渡すの変かしら？

「やつぱりいらない？」

「いるいる、いるよつ！ 絶対いる！ もうこれボクのだからね！ 返してって言われ

「ても返さないよ！」

「そんなに喜んでくれるのに、返せなんて言わないわよ」

「ちよつと予想外の表現をされたけど、喜んでくれたみたいでよかつた。

「でも、なんでボクに？」

「伝えたかったから」

「なにを？」

「ありがとうって」

「え……」

「また会えて、一緒に遊べて嬉しいって気持ちを込めて作ったのよ」

「本当は現実で渡したかったけど、ユウキはそれを望んでないみたいだから。  
ちよつとだけ寂しいけど、ここで渡せてよかつた。」

「アスナは、ボクに会えて嬉しいって思つてくれたの？」

「そうよ、当たり前でしょ。友達なんだから」

「そつか。 そつなんだ………ありがとう。 今日あつた出来事で一番嬉しいよ。 ありが  
とうアスナ」

「喜んでくれたなら良かつたわ。頑張つて作つた甲斐があるもの」

「そつなの？ でも確かに。すごく美味しそうな雰囲気漂つてるもんね、これ」

「時間とお金をかけたからね。……これは内緒だけど、キリト君のより手が込んでるんだからね」

キリト君には絶対に言えないけどね。

地味にキリト君、わたしがユウキにかまつてあげると嫉妬してくれたりするし。  
嬉しいからたまにわざとやるけど。

「ほんとに!? これはもう嬉しさ倍増だね!」

「なら良かつた。じゃあ来月はわたしは期待して待ってるわね」

「…………らいげつ?」

「ホワイトデーのお返しよ。3倍なんて言わないけど、とびつきりなの期待してるから」

正確には期待半分不安半分だけどね。サプライズ自体は楽しみにしてるから。

「楽しみねお返し。先に言つておくけど今回みたいにバトル要素はいらないからね」  
わたしを巻き込まないなら多少はいいけど。

ちよつとは自重してもらわないと身が持たないもの。

「だから次回は——ユウキ?」

どうしたの?

さつきまで楽しそうに笑つてたのに、なんでそんな苦しそうな顔を

「——アスナ」

「な、なにユウキ？」

「アスナはさ、キリトが好きだよね」

突然なにを？

その質問の答えは決まっているけど……。

なぜ？

「え、ええ。もちろん大好きよ」

「だよね。ならキリトと一緒にいられたら幸せ？」

「幸せよ、とっても」

「ユイちゃんにリズやシリカ、リーファにシノン、クライインとエギルと他にも大勢の友達。そんなみんなと一緒にいられたらアスナは幸せ？ 笑っていられる？」

キリト君がいて、ユイちゃんがいて、皆もいて。

そして、ユウキがいるのなら。

「ええ。みんながいるなら、わたしはいつだつて笑顔でいられるわ」

「そつか……………そうだよね」

「ユウキ…………？」

「ごめんね！ いきなり変な質問しちゃって。ボクっぽくなかったよね、ごめんごめん」

「いえ、それはいいけど……大丈夫？」

「大丈夫だいじょーぶ。ちょっと急にセンチメンタルな気分になつただけだよ」「そうなの……？」

でも、さつきの表情はそんな感じには見えなかつたけど……。

「そーそー。いやー、アスナついてるよ。滅多に見れないセンチユウキちゃんを生で見れたんだから。みんなに自慢したつていいんだよ」

「……自慢したところで誰も羨ましがつてくれないわよ」

氣のせい？

ユウキの演技？

…………わからない。でも今のは。

「えーそうかなあ？ 超絶レアだよ？ キリトあたりなら羨ましく思うんじやない？」

少なくとも、今のユウキはいつものユウキだ。  
なにも変なところはない。

「人の恋人をなんだと思ってるのよ」

「うーん……いじり甲斐のあるおもちゃ？」

「……ユウキ？」

「ごめんなさい」

気にするべき、だろう。

さつきのは明らかに普段のユウキではなかつた。

あれはいつかの、剣士の碑に名前を刻んで泣き続けていた時の雰囲気に似ていた気がする。

あとでキリト君に相談してみるべきだろう。

「アスナ」

「なに?」

ユウキがなにかに悩んでいるなら、わたしはその手助けをしたい。  
いつかの貴女が、わたしにそうしてくれたように。

「来月、楽しみにしててね」

「ええ、来月もその先も。すっごく楽しみにしてるわ。だから――  
1年後も、10年後も、またこうして2人で笑い合つていられるよう  
だから、

「――これからもよろしくね、ユウキ」

「うん。これからもよろしく、アスナ」  
わたしは必ず、ユウキの助けに応えるから。

『時計の針は止まらない』

# もーしも

子供が一人真っ白な部屋のベッドに横になつてゐる。

部屋のドアの傍らには女性が一人立つてゐる。

女が口を開き、いつもの台詞を子供に言う。

「はやく死になさい」

子供は反応を返さない。

いつものように目を瞑つて寝たふりを続けてゐる。

その方法が最も自分が傷付かないで済む手段だと今までの経験で理解してゐるからだ。

女は一度舌打ちをして部屋を出る。これもいつもと一緒。

一人になつた部屋で顔を隠すように毛布を被り、思考する。

——ボクに生きる価値なんて、あるのだろうか？

「…………あ、夢か」

机に突つ伏してた体を起こす。変な体勢で寝てたからか関節が少し固まつていて、ちよつと痛い。

一体いつの間に寝てしまつたんだろうか？

開きつぱなしのままの、ぐつにやぐにやな字？ 線？ が書かれたノートを閉じながら記憶を掘り起こす。

意識に残つてる最後の記憶は、あーだのうーだの口にしながらノートに文字を書いたり消したりしてた記憶だ。なにを書こうとしてたのかは忘れたけど。半分寝てたし。その時に見た時計の短針は2を指していたような気もしなくもない。

ようは、ただの寝落ちだ。

それにもしても、昨日は確かに少しイライラしてたけど。

「だからって、あんな夢見る？」

ほんと最近よく見るなあ、あの夢。なんでだろ？

しかも本来の内容とちよつと違うのが腹立つ。

なんで個室なのさ。大部屋だつたじやん。喧しい人とか、静かな子とか色々一緒だつただろうに。

「あと寝たふりはいつもバレて叩かれたはずなんだけなあ」

そんなどうでもいい改変をするくらいなら、大好きな友達と一緒に遊んでる夢を見たかった。

絶対そつちの方が精神衛生上好ましいと思うし。

「……そもそも、夢に文句言つてどうするつて話か」

まあいいや、忘れよ。

今ボクには関係ないし。

そんなことより、今日の朝食の方が100倍大事だ。

現在時刻は朝の7時15分。普段よりもちょっとだけ遅い。

あと変な体勢で寝たから寝癖もひどい。早く整えよう。

「ごっはん、ごっはーん」

扉を開き部屋を出る。

小さい頃はそれだけで感動してた時期があつたのを覚えている。

自分で扉を開け外に向かう、という行為に無自覚ながら憧れがあつたのだろう。楽し

そうに部屋を出入りする幼い頃の自分を、両親も姉も不思議そうに見ていたつけ。階段を降りるとコーヒーの香りが漂ってくる。いつもの朝の匂いだ。

そのままリビングへの扉を開くとテーブルの近くに複数の人影が見えた。

新聞を読む男性。

テレビの天気予報を確認する女性。

そしてその二人に話しかけている女の子。

そんな三人向かって声をかける。

「おつはよー」

「……ああ、おはよう」

「おはよう。朝食もう出来てるから速く顔洗つてきなさい」

「おはよう。寝癖ひどいわよ?」

「知ってるうー」

そんな言葉を返しながら、ボクよりちよつと背の高い彼女に抱き付く。

これがボク達の、いつもの朝のやりとり。

「もう……ほら、お母さんが今にも怒りそうな顔してるからはやくしなさい、木綿季」「はーい。了解であります、姉ちゃん」

いつの日か、もう見ることはないのだろうと諦めたはずの——日常だ。

『君が描いた未来の世界は』

ソードアート・オンラインというライトノベルがある。

簡単に説明すると、VRゲームという仮想空間に囚われた主人公の男の子が色々頑張つて現実に帰還する物語だ。

……端折り過ぎかな？

まあいいか、そんなのがあるっていうのが大事なだけだし。

その物語にユウキというキャラクターがいる。

明るく快活な女の子だ。

だが病氣に罹つていて登場した時には家族は既に亡くなつており、本人も最後には死んでしまう。そういうキャラクターだ。

以前ボクが読んだ時は思わず泣いてしまつた。

彼女が死んでしまつたのが悲しかつたからか。

それとも、悲しむ大勢の友人がいて羨ましかつたからなのかは、もう覚えていないけ

ど。

「忘れ物はない？」

「多分ない！」

「じゃあここにあるお弁当は?」  
「ありや……?」

どういつた理屈かは知らないが、死んだボクはそのユウキになつた。  
そのことに気付いたのは、生まれてから結構経つた頃だつた。  
自分のことながらすごく鈍いと思う。

「やれやれ、木綿季はおつちよこちよいだな」

「もー。たまにはお父さんも木綿季に注意してくださいな」

「子供らしくて可愛いと俺は思うけどなあ」

「もー」

氣付いた時に感じたのは絶望だ。

最後にソードアート・オンラインを読んだのはボクの主觀で10年以上前。その知識  
はうる覚えではあつたけど、それでもユウキの結末は覚えていた。

だから、本当に怖かつたんだ。

優しい母を、暖かい父を、大好きな姉を失つてしまうのが。

こんなにも愛した人達が、こんなにも愛してくれた人達が死んでしまう。

自分が死ぬのが怖くなかったわけではない。

ただそれ以上に、喪うのが恐ろしかつた。

「もう忘れ物はない？」

「多分ない！……気がする」

「ほんとにもう…………私の妹の頭の中は一体どうなつてるのかしら？」  
「姉ちやんだいすきー、あ・い・し・て・る！ フウー！」

「…………たまに双子であるのが恥ずかしくなつてくるわね」

恐怖があつて、絶望があつて。でも、ボクにはなにも出来なかつた。  
ただの小娘でしかないボクには、家族を救う力なんてなかつた。  
だから神に祈つた。

こんなにも優しい家族をボクに与えてくれた神に。

生きる価値なんてないボクに、愛してくれる家族を与えてくれた神に。

——どうか家族を助けて下さい。そうしてくれたならボクは地獄にだつて喜んで  
行きます。ボクはどうなつてもかまいません。だから、せめてこの優しい人たちを救つ  
て下さい。

「姉妹仲良くじやれあつてないで早く行きなさい。遅刻するわよ」

「はーい」

「はい、お母さん」

もちろんそんな願いに意味なんてなく。当然のように家族全員発病した。

未来は変わらないのだと、ハツキリとボクに突きつけられた。ならせめて、前みたいな終わりにはしたくなかった。

一人寂しく、惨めな最期は嫌だつた。

いつか読んだユウキのように、笑つて逝きたかつた。

いつか読んだユウキのように、悲しんでくれる友が欲しかつた。

ボクは紺野木綿季として生まれた。だからきっとユウキになれると思った。姉を庇つてあの作られた世界に行つたとき、見知つた姿と名前を持つ彼らに近づいたのは打算だつた。

うろ覚えではあつたけど、キャラクターの性格はある程度覚えていたから。

親しい友人になれば、きっと別れる時に悲しんでくれる。泣いてくれる。そう思つたから。

「それじゃあ、いつてきます」

「いつてきまーす」

「気を付けて行くんだぞ」

「いってらっしゃい。藍子、木綿季」

打算だつたんだ。騙していたんだ。

ボクは自分の事しか考えていなかつた。

明るくて快活。常に笑顔な女の子。そういう風に自分を偽った。

全部嘘だ。ユウキという存在は虚構でしかなかつた。

心のどこかで思つていた。上手くいくわけないと。

生きることに懸命な人達の中で、死ぬ時の為に頑張るボクに居場所なんてあるわけない。

どうせすぐにバレて糾弾される。昨日まで笑いあつていた人達に軽蔑の眼差しを向けられることになる。

そう考えながらも、ただただ笑う日々。

でもみんな、思つた以上にバカなんだ。

ボクなんかの嘘に気付きもしない。

陰口に気付いてないふりをして、バカみたいに笑つて過ごした。そうしていたら一緒に笑つてくれる友達ができた。

突拍子のないことをして周りを巻き込んでみた。呆れつつも付き合つてくれる仲間ができた。

絶望し崩れ落ちてる人がいた。声をかけ、慰め、明日を語り、前を見た。共に戦う戦友ができた。

誰も嘘に気付かなかつた。

誰も疑問に思わなかつた。

誰もが、ボクを信じてくれた。

誰もが、ボクの嘘で笑つてくれた。

「じゃ、私はこつちだから」

「うん。またね、姉ちゃん」

「遅刻しないで行くのよ」

「姉ちゃん、ボクのことなんだと思つてるのさ」

ある日のこと、攻略層から戻つて宿の一室でふと鏡を見た。

鏡の中で少女が泣いていた。

ボロボロと涙を流し、声にならない声を出しながら泣き叫んでいた。  
まるで赤ん坊みたいだと笑おうとしたけど、喉から出て来るのは嗚咽ばかり。  
泣いて鳴いて哭いて、そして泣き疲れて眠つてしまつた。

起きた時に思つたことを、ボクは今でも鮮明に覚えている。

——友達になりたい。

みんなと、ちゃんと友達になりたいと思つた。

彼とバカなことを一緒にしてずっと笑い合つていたかつた。

彼女ともっと色んな所に遊びに行きたかつた。

みんなと一緒にいたかつた。

嘘の友達は、嫌だつた。

「……目を離すと飛んでいく風船？」

「風船よりはドローンとかの方がいいな。自由に動けるし」

「そういうとこよ」

「へ？」

あの世界から解放される時、またねとは言わなかつた。

嘘から始めたボクに誰かと一緒にいてもらう資格はないと思つたから。

一人は寒くて寂しいけど、あつたかい思い出があれば耐えられると思った。  
でもやつぱり最後にせめて『さよなら』は伝えようとも考えたけど間に合わず、気付いた時には天才大バカ野郎と二人きり。思い付く限りの罵詈雑言とS A Oの思い出話を別れを告げ、そして気付けば病室のベッドの上。

少し自分に呆れつつ。残り少ない家族との時間を満喫しようなんて考えて、言うこと聞かない体をどうにかこうにか動かしてナースコールを押そしたら。

——元気そうに自身の足で立つ姉が現れた。

啞然とした。顎が外れたかと思つた。

更に次の瞬間。

花瓶を持った元気そうな父と母も現れた。

変な声が出そうになつた。喉が張り付いて出なかつたけど。ちなみに部屋に入ってきた三人は変な声を出してた。

結論から言うと、神様にボクの願いが届いたらしい。

ボクが仮想世界に囚われてすぐに病気の特効薬が出来たそうだ。副作用ほぼゼロで即効性のある特効薬が。

なんだそりや。

ボクの絶望はなんだつたんだつて話だ。

いや、良かつたんだけどさ。これ以上ないくらい良かつたんだけどさ。

ただ素直に納得いかないだけで。

ともかく。

そんなご都合主義とも言える薬のおかげで家族は快復。ボクも元気もりもり。

まあ、しばらくは満足に歩けもしないから入院してたけど。

ボクはライトノベルしか知らなかつたけどアニメとか漫画ではユウキに関する展開が違つたのかな？ はたまた映画？ あつ、ゲームも出てたんだつけ？

ま、今となつてはなんでもいいんだけどね。

「ま、いいや。いつてらっしゃい。車には気をつけなさいよ」

「うん、そつちもね。いつてらっしゃい姉ちゃん」

未来は変わった。ボクにとつて最高な形で。

ママがいて。

パパがいて。

姉ちゃんがいる。

話を聞いた後でボクは泣いた。大いに泣いた。一生分泣いたんじやないかってくらい泣いた。

釣られたのか家族もみんな泣いてた。  
そのあと、みんなで笑つた。

つまり、ボクは生きていてもいいってことらしい。

キーンコーンカーンコーン。

学校中にチャイムの音が鳴り響く。

もうボクのおなかはペコペコ。早くご飯にしよう。

「紺野さん、あたし達と一緒にお昼しない?」

「あーっと、ごめん。今日は先約あるんだ。明日じゃダメ?」

「そつか、いいよ全然。明日待ってるわね」

「ごめんね、ありがとう」

断つちやつたけど、誘つてくれたのはほんとに嬉しかつたからね。ありがと。

お弁当を持って教室を出る。ちよつとだけ早歩き。

今日は雲一つ無い晴天。きつと外は気持ちいいだろう。

靴を履き替えて中庭に行くと既に彼女はベンチに座つて待つていた。  
結構ボクも急いだつもりだつたんだけどな。

彼女の視界に入らないようにしつつ、音を立てず後ろに回り込む。

抜き足差し足忍び足つてね。

「——おつまたせつ!」

「きやつ!?

真後ろで声を出すのと同時にベンチ越しに抱き着く。柔らかくていい匂いがする。

VRだとこの感触は再現しきれないから、ちよつぴり新鮮な感じ。

こういうのを感じると、現実で会えてよかつたなつてよく思う。

「……いや、あの……なにも言わずに嗅ぐのやめてもらえる?」

「だめ……？」

「だーめ。それよりもお昼にしましよう、ユウキ」

「はーい。わかつたよ、アスナ」

残念。

もうちよつとくつついていたかつたのに。

「そういえば他の人は？　あとから来るの？」

まだアスナしかいないけど？

みんな授業が長引いたりしてるんだろうか？

「あれ、わたし伝えてなかつたつけ？」

「なにを？」

はて？

昨日の夜届いたメツセージには『明日一緒にお昼食べない？』くらいしか書いてなかつた気がしたけど

違つたかな？

「……あー、ごめんユウキ。今見たらわたし誘つただけで他になにも書いてないわね」

「いいよ全然。アスナの誘いだつたらボク無条件に受けるし」

昨夜のトーク履歴をわざわざ確認してくれたけど、ボクもなにも聞かずにつぐ承諾し

たしね。そこでこの話題は終わっちゃったはずだし。

「そう言つてくれると助かるわ。ありがとう」

「ううん。気にしなくていいよ……それで、みんなは来ないの？」

「来ないというか。今日はユウキしか誘つてないから」

「……ボクだけ？」

「そう。ユウキだけ」

なぜボクだけなんだろう？

ボクにしか言えない話？　またはなにかの用事？　まさか今さら恋愛相談はないと思ふんだけど……。

実はキリトと喧嘩していく仲裁の頼みをしたい、とか？

二人が喧嘩してるのは嫌だな。いつまでも二人には仲良くイチャイチャしててほしい。

「……それで、ボクになにか用事があるってこと？」

もし予想通りだつたら嫌だけど、まだ内容は聞いてないわけだし。

聞いた後で改めて考えよう。そうしよう。

「用事というか、なんというか……」

「うん」

「ただユウキと一緒にごはんを食べたかつただけよ」

「……え、それだけ?」

「うん。それだけ」

ホツ、つと胸に広がる安堵と歓喜。

無駄に深読みして無駄に安心してるよボク。なにしてんだか。ちよつとだけ赤面してるだろう顔を誤魔化すように両手を広げ、アスナに少し芝居がけてこう言う。

「ああアスナ。そんなにもボクのことを想つてくれてたんだね。ボクは嬉しいよ」

「あーもう、わかつたから。嬉しいのはわかつたから抱き着いて来ないの。お弁当落とすわよ」

「それはダメだね。やめまーす」

ママが愛情込めて作ってくれた大切なお弁当だからね。

落とすなんてことは絶対にあつたらいけないこと。  
気を付けなければ。

「……ん? どうかしたアスナ?」

「なにが?」

「いや、なんかこつち見てニコニコしてるから」

ボクのこと見ながら笑つてゐるから。なんかお母さんみたいとでも言うべきだろうか？ そんな感じの表情を浮かべて。

今ボクなにか笑われるような変な事してたかな？

「いいなあ、つて思つて」

「いいな？」

「そう。現実でもこうやつてユウキといれて。楽しそうなユウキを見れて良かつたなあ、つて」

「ふ、ふーん。そ、うなんだ……」

まるで何も感じてないかのように返事をしながら膝の上に置いたお弁当に視線を向ける。

やばい。すごくやばい。無茶苦茶嬉しい。

今ボク絶対にダメな顔してる。全然顔のにやけが收まらない。頬が自然と上がつていく。

下向いてるけど耳も真つ赤になつてる気がするから意味なさそう。

顔全体が熱くてたまらない。

くそ。こういうことを唐突に口にするのはボクのキャラだつたはずなのに。

ちくしょう。この場にキリトがいれば、この表情を誤魔化す為に盛大にいじり倒すの

に。

なんでこういう時に限つていないんだよ。

キリトのバーカ。アホ。おたんこなす。今度黒歴史スグちゃんにバラしてやる。

「その、まあ、うん、あれだね。えっと……そう、ごはん！　ごはんを食べよう！」

「ふふつ、そうね。いただきましょうか」

「いただこう。今すぐいただきこう。

その、しようがないなあみたいな顔するのほんとは禁止だからねつ。

あーもう恥ずかしい。

「いつただきまーす」

「いただきます」

よし。食べて少し落ち着こう。

大丈夫。冷静になればなにも問題はない。

ここは別にテンパる場面でもなんでもない。いつものボクを思い出せばいいだけだ。

そう、いつものボクだ。

思い出せ、キリトをからかつてゐるボクを。

思い出せ、キリトをおちよくつてゐるボクを。

思い出せ、アスナが作つてくれたごはんを一緒に食べたボクを。

……あのカレー美味しかったなあ。また食べたい。

「そうだユウキ、週末つてなにか用事ある?」

「週末? 特になにもなかつたような?」

言いながらスケジュールを確認するが、記憶通り特になにもなし。

あえて言うなら、いつも通りちょっと遠くまで散歩して帰つて、その後ゲームするくらいだけど。

「週末なにかあるの?」

ALOでイベントとかあつたかな? 告知とか見た覚えはないけど……。

それとも人手がいるタイプのクエストとか?

「わたしの家でお泊り会やろうって話になつたからユウキもどうかなつて」

「……おとまりかい!」

「そ。お泊り会」

「…………お泊り会!?!」

「え、ええ。わたしの家でどうかなつて話なんだけど……いや、だつたりする?」

「しないしない! 行く! 絶対に行くっ!!」

お泊り会つてあれだよね! みんなでワイワイしながら同じ部屋で寝て、恋バナとかを夜通しでするあれでしょ?!

やる！ 行く！ 押しかける!!

「いついつ!? 週末つてことは土曜から日曜? もしかして金曜日の学校終わつたあと  
からとか!」

「えつと、一応土曜日の予定だけど……」

「土曜日だね! わかつた! いつぱい準備していくねつ!」

お菓子とかいつぱい用意していくた方がいいよね。

あ、それとアスナの家族にもなにか持つていくべきだよね。お世話になるわけだし。  
すごく楽しみ。心が躍るよ。

今日は早く帰つて準備しないと。

あと……あ、そうだ。これも聞かないと。

「話になつたつて言つてたし他にも人いるよね。リズとか?」

あとはシリカとかもかな?

「リズとシリカちゃんにリーフアちゃん、それとシノのん。それにユウキを合わせて5  
人ね」

「おおー、美少女勢揃いだね。これは楽しみが増してくるよ  
お泊り会つて友達と一緒にお風呂入つてもいいんでしょ?  
楽しみだ。

ん？ どうしたのアスナ寒そうに体を竦めて。

「なんとかしら、急に寒気が……」

「風邪？ 寒いなら校舎に入ろうか？」

病気は怖いからね。気を付けないと。

その後、なんでもないと言い張るアスナを念のため保健室に押し込んだりしたけど、先生は大丈夫だつて言つてた。なにもなくて良かつたよ。

これで、お泊り会も問題なく出来そうだね。よかつたよかつた。

放課後。今日の授業も全て終わつた。

本日の放課後予定は特に無し。あとは帰るだけ。

帰つたらママと姉ちゃんと相談しないといけないな。

ボク、友達の家にお泊りとか初めてだし。失敗しないようにしないと。

厳しいと噂のアスナのお母さんに嫌われたりしたら大変だし。色々考えながら下駄箱に向かうと、そこにはよく知つた顔。

珍しく一人だね。

小走りで近寄つて背中を叩く。一応力は抑えめにしてだけど。

「——とりやつ」

「いてつ、いきなりなん……なんだユウキか」

「なんだとはなにさ、ちょっと失礼じゃないキリト?」

女の子には優しくつて言葉を知らないのかねキミイ。

「あんな……いきなり叩いてくる方が失礼だと俺は思うけどな」

「ボクに免じて許してくれる?」

必殺! 斜め下から瞳ウルウル攻撃!!

ポイントは胸の前で小さく両手を握ること。

ボクのあまりのかわいさに喰らつた相手は残らず倒れる必殺技だ!

「ユウキのやつたことをなんでユウキに免じるんだよ」

「ぶうー」

「はいはい、ぶーぶー」

そうやつて人の鼻押すなよー。ボタンじゃないんだぞ。

もー。ボクじやなかつたら普通の女の子は怒るよ、きっと。

「アスナはどうしたのさ? 一緒じゃないの?」

周りには影も形もないね。いつも放課後デートしてるんじやないの?

「今日は別々で帰るんだよ。さすがに毎日一緒にやないつて」

「ふーん。お昼も別々だったのに悲しいねー」

「今日はユウキと一緒にだつたからだろ、それは」

「……なんだ、知つてたんだ」

「あの中庭のベンチ、テラスから丸見えだぞ」

「えっ、そうなの?」

マジか。全然知らなかつた。

じやあアスナを驚かしてたのも見られてたんだ。

なら次からはそれも考慮しないといけなくなるな。ちゃんと覚えとこ。

「……なあ」

「なーに?」

「この後もし暇なら一緒にどつか行くか?」

「なにそれ、デートのお誘い?」

「たまにはリアルで遊ばないかつてお誘い。どうだ?」

よく言うよ。

ボクの返事なんてわかりきつてるくせに。

「どうしてもつて言うなら、付き合つてあげるけど?」

「どうしてもどうしても。これでいいか？」

「もー。女の子にそんな誘い方したら嫌われるよ」

まつたく。そのうちアスナに愛想尽かされちゃうよ。

「ユウキぐらいにしかしないから、多分大丈夫じゃないか」

「そつか。ならばよし！」

アスナにしないならいいつか。

「どこ行くの？」

「駅前あたりをぶらつこうかと思つてたけど、ユウキはどこか行きたいとこあるか？」

「んー、ない！　けどアイス食べたい！　たい焼きでも可！」

クレープとかでもいいよ！

「甘いものくらいしか共通点無さそうだな。ま、それなら駅前でいいな

「よーし、そうと決まればレツツゴー！」

「あーおいひい」

「相変わらずユウキは美味しそうに食べるよな」

「美味しそうじゃなくて美味しいの！ その言い方は作ってくれた人に失礼だよ」

「悪い悪い。じゃあ詫びに俺のも喰うか？」

「いいの!? やつたね。ではでは、あーん」

「ほらよ」

そう言つて突き出されたアイスにパクリ、と大きく一口。

口の中に広がる甘さと冷たさ。美味しい。こっちの味の方が好みかも。  
「どうだ？」

「おいひい。アイスはやつぱりいいよね」

S A O でも色々食べたけど、やつぱり現実と仮想現実じや結構違うもんだね。  
この一気に冷たいもの食べた時のキーンって感じは現実じやないと味わえないもん  
ね。

「もう一口ちょーだい」

「はいはい。ほれ」

あーん。

おいひい。食べ物がおいしいってそれだけで幸せだよね。やつぱり。

あれ？ どしたのキリト？ いきなり顔をしかめて。

「どしたのさ急に？ 頭痛くなつた？ アイスの残り全部ボクが食べようか？」

「……いや、改めて今の状況を客観的に見たらさ」

「？……うん、見たら？」

「これ、アスナにすごく問い合わせられるタイプのヤツじやないか？」

「…………ハツ！」

脳内に稻妻が走る。

確かに！今までの経験則からして、これはバレたら全く痛くもない腹を探られるいつもものパターンな気がする！

「…………まあ、内緒にしてたらバレないよ、きっと」

「…………アスナに真っ直ぐ目を見られながら聞かれてもか？」

「…………無理、かな」

「…………だよな」

なんでアスナもリズもシリカも、毎回違うつて説明してるのに信じてくれないんだろ  
う。そんなにボク信用ないのかな？

それかキリト相手なら女の子はみんなそうなる、なんて考えてるのかも？  
自分達がそうだつたからつてボクも一緒にしないでほしいね、まつたく。  
「…………大丈夫だよ、キリト」

「どう大丈夫なんだよ」

「アスナは誠心誠意話せば必ず分かつてくれるから、大丈夫だよ。アスナの彼氏なんだから自信持ちなよ」

「日記」の「日」は「日」の「日」である。

そうそう。

キリトとアスナの絆は絶対なんだから、問題ないって。

まあ それはそれとして

「ホグはギリトは無理矢理されたって言うけど」

「おいらせよ」と待て

「ボクは嫌だって言つたのに、キリトが無理矢理押し込んできて……ボクはもうアスナに見せる顔ないよ」

二 言い方

よよよ、  
と泣き崩れる演技。

完璧だね。アスナに聞かれたらこうしよう。そうしよう。

…………なんでそういうところはいーも通りなんだよ】

「そういうことは二度なはさ  
それ以外もい一もど一絶だよホク」

「えつ、なにその呆れ顔」

おかしいな。いつも通りのはずだけど……。

なんかキャラぶれてたりした?

「ボクのどこが変だつて言うのさ」

「……特に多いのはリアルでだけど」

「うん」

「不安そうにしてる」

「……えつ?」

「不安そうだつて言つたんだ。迷子みたいにどこ行つたらいいのかわかんなそうな感

じ」

「…………それ、ほんと?」

冗談とかじやなく?

「マジな話だ。だから今日二人きりでご飯したかつたんだけど」

「……アスナも、そう感じてたつてこと?」

それで直接会つて話したかった。つまりはそういうことだよね。

「アスナだけじやなくてリズにシリカ、クラインとかもだ。付き合い長い連中は軒並み

気付いてたよ」

マジか。

だとしたら相当わかりやすく変だつたんだ。ボク。  
でも、さ。

「ぜんつぜん、ボクはその自覚ないんだけど」

「自覚なさそまだから俺達も対応に困つてたんだよ。そのくせいつも通りな部分もある  
しな」

「あーっと、なんか心配かけたみたいでごめんね」

「いいつて別に。それで？ 原因に心当たりはあるのか？」

原因ねえ？

最近のボクがおかしくなつた理由。最近のボクに起きてるなにか。  
だとしたら最近ちよつとイラッとした時に見る夢のこと、かな？

……いや、多分違うな。

「……」れかなつてのは一応思い付くけど……

夢じやない。そつちじやなくて、なぜまたあの夢を見る事になつたのかだ。

いつからまたあの夢を見るようになつた？ いつからボクは違和感を発するようになつた？

決まつてる。あれ以来だ。

「……聞かない方がいいやつか？」

「うーん。 そうだなあ……いや、せつかくだし聞いてくれる？ それで解決するかもだ  
し」

「分かった。 聞くよ」

ちよつとだけ深呼吸。 落ち着いて息を整える。

大丈夫。 なんでもない。

ただ今思つた自分の考えを言えばいいだけ。 それだけ。 大した事じやない。

「ボクつてさ、 病気だつたつて言つたでしょ」

「ああ。 聞いて、 そして怒つたよ。 知つてたら戦わせなかつたのについて」

「いつ死ぬか分からないう人が、 いつ死ぬか分からないう戦場に行くだけなのに？」

「それとこれとは別物だろ。 それに俺達だけじゃなくて他の攻略組のメンバーもそのこ  
と知つたら絶対にユウキのこと怒るからな」

「もーごめんつて。 —— で、 本来なら治らないはずだつたわけじやんボクつて。 家族  
含めてさ」

あんな夢みたいな薬が出来てくれなければ。

「それはつ！ …… そうかもしれない、 けど」

「うん。 で、 多分今ごろにはボクはもうこの世界にはいなかつたわけだ」

「…………」

「でも生きてる。治ったから」

「病気だつたつて聞いて怒つたけど、治つたつて聞いて嬉しかつたんだぜ俺達全員」「うん。ボクもそう言つてくれてすぐ嬉しかつたよ。……でもさ、S A O に行つたばかりのボクは薬が出来るなんて知らなかつたわけで、クリアしてもすぐ死ぬことになるつてずつと思つてたんだ」

だから、嘘を吐いた。

だから、誤魔化した。

怖くて恐ろしくて、ずっと泣き出したい気持ちを隠す為に。

「しようがないだろ。未来の事なんて誰にもわからないんだから」

「……ふふつ、ふふふ。そうだね。そりやそうだよね。はははつ」

「今なんか変なこと言つたか?」

「ううん、ごめん。なんでもない。——未来の事は分からぬ。こんな当たり前のこ

とをボクは忘れてたんだね」

未来を知つてゐる。なんてこと自体がおかしいのは当たり前のことなのにね。

ボクが紺野木綿季として生まれて、ユウキであると自覚したからこそ忘れてしまつて  
いた。

ほんとボクってバカだよなあ。

「だからあの頃のボクは一応覚悟して生きてたんだよ」

「覚悟?」

「そう。 いつ死んでもいいっていう覚悟」

「……」

「愛してくれる家族がいた。一緒に遊んでくれる友達がいた。共に戦う仲間がいた。ボクは最高に幸せだつたって最後に言う覚悟」

「…………ユウキ」

「でも生き残った。生き続けられた。生きていいって言われた。その時のボクの気持ちを想像できる?」

なんて言うけど、ボクも今話しててやつとわかつたんだけどね。

どこかモヤつとした今まで今の今まで言語化できなかつたボクの感情。ボクの悪夢の理由。

普通ならすぐわかるんだろうな。

「……嬉しかつたんじゃないのか。ずっと死ぬつて思つてたんだろ」

「うん。嬉しかつたんだ。いっぱい泣いていっぱい笑つて。――で、落ち着いた後に思つた。『怖い』つて」

「怖い? 病気は治つたのに何が怖かつたんだ?」

「んー、カツコつけて言えば先の見えない未来、になるのかな」

死ねと言われ続け、一人寂しく死んだ以前のボク。

家族を愛し愛される平穏の中で、生きる幸せを知った幼少期。

突如として思い出すことになった『ユウキ』の死の未来。

まるで、世界がボクに死ねと言っているのかと思つたあの日。一人が寂しくて、愛してくれる家族がいて、未来を思い出し未来を諦め、最期を覚悟した。

でも、世界は今度は「生きていよい」と告げてきた。

ボクの心はごちやごちやだ。

存在を否定されて死んで。生まれてきて喜ばれ。未来がない事を知つて絶望して。そして今度はなにもしてないのに求めてた未来を渡された。

「絶望したら希望が来て、その希望が絶望に変わつて、また希望が戻つてきた。——なら今の希望もまた消えてしまうんじやないかつて、そうは思わない？」

「……それは」

「巡り合わせが悪かつただけつて？ ボクもそう思うよ。ただの考え方過ぎだつて」

「ならつ」

「でも未来は分からぬ。だから、怖いんだ」

だから夢を見るのだろう。

ボクが一番辛かつた頃の夢を。

また、絶望が訪れた時に「やつぱりね」ってすぐに諦められるように。最近妙に見る

頻度が高いとは思つてたけど。多分こういうことだよね。

バカみたいな自己防衛だ。我ながら意味があるとは到底思えない。

「気にしなくていいよキリト。結局のところ、こんなのはただの被害妄想に過ぎないんだから」

そう。ただ無駄にボクが物事を否定的に捉えてるだけ。

もしかしたら交通事故に遭つて死ぬんじやないか、とか。

突然通り魔に襲われるんじやないか、とか。

はたまた隕石が落ちてきてみんな潰れちゃうんじやないか、とか。

そんな話でしかない。別に深い意味なんてないんだよ。

「だいじょーぶ。そのうち時間が解決してくれるよきつと。今の状況にも慣れるさ」

「……よくないだろ、全然」

「ううん。いいんだよこれで」

「いいわけないだろ。友達が苦しんでるのに放つておいていいわけあるかよつ！」

「……ならキリトは友達だつたら誰でも助けてあげるの？」

「そんなの決まって」

「——誰も望んでないのに？」

「なつ」

「キリトはさ、確かに英雄だよ。誰にも出来ないことをしてみんなを助けた」

S A O の途中クリア。

キリト以外では出来なかつたであろう偉業。それは確かだ。

「でもだからつて、友達だからなんて理由で心に踏み込んでいいわけじゃない」

「そうかもしけない。でもつ」

「俺なら救えるつて？ それはさすがに傲慢だと思うよ」

キリトは特別で、主人公だ。

でも、ただの男の子でしかないのも事実だ。

ただの友達の問題にそこまで踏み込んでいい理由にはならない。

「……確かに俺はユウキにとつてはただの友達なのかもしけない。でも、俺はユウキを

……」

「ボクを？ ボクがなんだつてのさ？」

「——ユウキのことを、親友だと勝手に思つてる」

親、友?

ボクが、キリトにとつて?

「そうだ。俺がユウキを助けたいって思うのはそれが理由だ。ただの友達なんかじやない。今まで生きてきた中で一番大切な友達だから、助けたいんだ」

「…………それが、キリトがボクを助けたい理由?」

「……ああ」

なんていうか。

「もー、ほんとにキリトはこれだから。

「……ふふつ、ふふふ。あははは」

「ユ、ユウキ……?」

「ごめんごめん。キリトだなって思つてつい笑っちゃつた」

「……どんな理由だよそれ」

言葉通り、そのまんまの理由だよ。

「――うん、そうだね。ボクは女の子でキリトは男の子だけど、一緒にバカなことでき

る親友だもんね」

「ああ、そうだつたろ。俺達は」

「うん」

もーほんとにさー。おかげで心臓バクハツしそうだよ。

今日はキリトといいアスナといい、ボクをどうしたいんだろうね、ほんと！  
 「……だから、なんだ。頼りないかもしないけど、ユウキが困つてゐるならいくらでも手  
 を貸すから。助けてつて迷わず言つてくれ。すぐに助けに行くから」

「うん。わかつたよ。でも今はほんとに落ち着く時間さえあればだいじょーぶだから。  
 また今度、泣きそうになつたらその時はすぐにキリトを呼ぶよ」  
 なにが頼りないだよ。キリトほど頼りがいがある人なんてボク知らないっての。

「おう」

「うん」

「……その、なんだ。そろそろいい時間だし、帰るか」

「そだね。帰ろつか」

二人隣り合つて歩き出す。

お互に顔をちょっと背けながら。恥ずかしい事言いやがつて、もー。  
 でも、嬉しかつたよ。ボクのことを親友つて言つてくれて。

「ねえ、キリト」

「なんだ？」

だから、これは普段は言わない心からのボクのキリトへの気持ち。

「――大好きだよ」

分かるかな。ちゃんと伝わるかな。ボクのこの思い。

「――俺も、ユウキのこと好きだぞ」

ああ、よかつた。伝わった。

なら、続きの言葉も分かるよね。

「親友として」

ふふつ、ふふふ。

あーもーつ！ 今すぐ体を思いつきり動かしたくてたまらないなっ！  
剣をこれでもかってくらい振り回したくてしようがないよ、もーつ！

「……顔真っ赤だよキリト」

「うつせ、そつちこそ首まで赤いぞ」

「ちよつとどこ見てるのさ。そーゆーのセクハラって言うんだよキリト」

「大丈夫ですー。俺はユウキのことをそういう目で見てないので問題ありませんー」「なにさせれ！」

「なんだよー！」

キリト誤魔化し方へたくそ過ぎー！

そんなんじやボクの方まで恥ずかしくなつてくるじゃんか！

ボクの親友なんだからもつと上手くやってよね！

「あ、そうだ。今いいこと思いついたんだけどさ」

「……一応聞くけど本当にいいことなのかそれ？」

「ボクはキリトの親友。さらにアスナの友達なわけでしょ」

「まあ、そうだな……」

「じゃあさじやあさ。二人の結婚式の時に友人代表としてボクがスピーチするつてどう  
!?」

ヤバい。名案すぎる。

ボクつて天才じやないだろうか。

「…………やだ」

「なんでつ!? 絶対盛り上がるつて！」

「どうせユウキの事だから無い事ばっかり話すんだろ、どうせ」「しないよそんなこと!」

「本当かよ……?」

なんだよその怪訝そうな顔は。

失礼なやつだな。

「ある事無い事をこれでもかつて盛り付けて、原形をわからなくするくらいだよ」

「やつぱりじやねえか!」

「なにさ、どこが不満だつてのさ」

「全部だよ全部! ……決めた。絶対にユウキには頼まない。むしろ招待しない」

「なつ、ひつどーい! それは横暴だよキリト!」

「いくらなんでもひどすぎる! ボクだつてアスナの晴れ姿見たいのに!」

「うるせえ! そうでもしなきや絶対にユウキは無茶苦茶にするだろ!」

キリトめ。黙つて言わせておいたらしい気になつちやつて。許さん。

「かつちーん。頭にきた。今謝るなら許してあげるよ、キリト」

「そつちこそ。今ごめんなさいつて頭下げるなら許してやるぞ、ユウキ」

「…………」

「…………」

「やるかこのヤローッ！」

「上等だオラーッ！」

もう許してあげないからな！

「18時！ ユグドラシルシティ中央広場！」

「魔法無し！ 飛行無し！ 消費アイテム無し！」

初撃決着！」

「辞世の句を用意して待つてな、キリト！」

「そつちこそ首洗つて待つてろ、ユウキ！」

宣戦布告するなり家に向かつて走り出す。背後から聞こえる足音から向こうも走つてゐみたい。

さて、どうしてくれようか。

この前のPVPは勝つたけど、また同じ手は効かないだろうし、なにか違う手でいかないといけないな。やっぱり最近作つたOSSで攻めるべきだろうか？ でもあれはとつておきにしたいんだよな。どうしよ。

あーでもないこーでもないと考えながら帰路を走る。そして気付く。

——今、ボク笑つてる。

別になにも解決してはいない。

未来への希望も、絶望も。これからボクがどうするべきなのかも定まっていない。不

安な気持ちも減つていなない。

今朝、あの夢を見て起きたときから状況はなにも変わつていなない。

もうボクに未来は分からない。ボクの持つていてる知識とは明確にズレてしまつた。明日死ぬかもしない。明後日死ぬのかもしない。なにも分からぬままだ。だけど、一つだけ分かつてあることがある。

もう、ボクがあの夢を見る事はないつてこと。

「キリトのバーカ！」

ありがとう。ボクの大好きな親友。

後日行われたアスナの家でのお泊り会は、急遽放課後データー検査問合に変更された。  
解せぬ。